

瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財
予備調査報告（I）

香川県教育委員会

序

もう、ふたむかしも前の話ですが、昭和33年12月6日、香川県議会の連合審査で本四架橋問題が取り上げられています。翌日の朝刊には、『夢のかけ橋』として、記事が載せられました。

それから20年—香川県教育委員会では、昨年4月から、瀬戸大橋架橋予定地の海狭部埋蔵文化財調査を始めました。本年度は、来年度から実施する予定の本格的な調査に向けての予備的な調査を樅石島と与島で行いました。この報告書は、その調査結果をまとめたものです。

瀬戸大橋という、20世紀の“文化財”建設を機に、瀬戸の島々の生いたちを明らかにし、私達の祖先の生活をうかがいたい。今後、調査を通して、祖先の文化遺産に触れ、これら文化財を後世に伝えていきたいと考えています。

最後に、調査にあたり御協力、御指導いただきました地元はじめ関係の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和 52 年 3 月

香川県教育委員会文化行政課長

沖 吉 和 祐

例 言

1. 本書は、瀬戸大橋架橋工事に伴う、海峡部の埋蔵文化財予備調査報告である。
2. 発掘調査は本四連絡橋公団から委託をうけて、香川県教育委員会が実施した。
3. 各調査区の分担は次のとおりである。

総 括	文化行政課長	沖 吉一和 祐
	同 課長補佐	藤 本 義 春
	同 係 長	松 本 豊 風
櫃石島第I調査区	専門員	秋 山 忠
	技 師	広 瀬 常 雄
II "	技 師	松 本 敏 三
	嘱 託	大 砂 古 直 生
III-北	技 師	松 本 敏 三
	嘱 託	大 砂 古 直 生
III-南	技 師	渡 部 明 夫
	技 師	大 山 真 充
与島I・II	技 師	渡 部 明 夫
	技 師	大 山 真 充

4. 報告書は各調査員が協議検討した成果を次のものが分担執筆した。

調査の経緯	松 本 豊 風
島嶼部の埋蔵文化財	
櫃石島第I調査区	秋 山 忠
II	松 本 敏 三
III-北	松 本 敏 三
III-南	大 山 真 充
与島I・II	渡 部 明 夫
	大 山 真 充

5. 資料整理、製図等は横田佳代子の協力を得た。

目 次

調査の経緯	1
島嶼部の埋蔵文化財	2
権石島の遺跡	4
第Ⅰ調査区	7
第Ⅱ調査区	33
第Ⅲ—北調査区	83
第Ⅲ—南調査区	127
与島の遺跡	153
第Ⅰ・Ⅱ調査区	153

調査の経緯

本州四国連絡橋児島・坂出ルートにあたる海峡部の横石島・岩黒島・羽佐島・与島の四島にはすでに旧石器時代から人類の足跡があり、それ以来古代から中世へと各時代を通じて、それぞれ多数の遺跡が所在する。

香川県教育委員会では、本格的な架橋工事に先立って、これら貴重な埋蔵文化財の取り扱いについて瀬戸大橋公団をはじめとする関係機関としばしば協議を重ねてきた。まず昭和46年1月、架橋用地等関係地区における埋蔵文化財の分布図を公団に提示した。次いで48年2月には瀬戸大橋ルート関連公共事業調査がおこなわれ、埋蔵文化財についても幅200m、海上部9.5km、陸上部1.5kmの範囲に所在する遺跡の分布図を作成し提示した。

しかしこの資料は一部に発掘調査の成果が入っているにしても、大部分は踏査によるものであって、この段階では遺跡全体の広がりとか、遺物を包含する当時の生活面が、地下でどのような層序によって構成されているかというようなことは適確に把握することは困難であった。従って遺跡の保存計画の策定及び本格調査計画案の策定に先立って試掘を主体とした予備調査を実施する必要が痛感されていた。

本四連絡橋公団においてもこの点をよく理解され、昭和51年 本四連絡橋公団と教育委員会で瀬戸大橋架橋工事に伴う埋蔵文化財調査についての協議が成立し、次いで6月1日付で海峡部埋蔵文化財予備調査委託契約そのIが締結された。

予備調査は昭和51年と52年度の二カ年に亘って実施する予定であるが、51年度は次表のとおりである。

調査区	調査地名	遺跡の概況	調査面積(m ²)
横 石 島	蒿の巣遺跡(一部)	尾根上。旧石器やサヌカイト片が採集できる。	
	がんど凹地(奥部)	谷状凹地。凹石器・弥生式土器・須恵器片などが採集でき、以前に磨製石斧が出土した。	
	がんど凹地後背尾根	尾根上斜面。旧石器やサヌカイト片が採集できる。	30,900
II	石の塔・五輪塔	尾根根・丘陵上平地。石造物の基礎石1基、箱式石棺2基、五輪塔1基と組み石数個がある。	
	花見山遺跡	尾根上斜面。旧石器やサヌカイト片が採集できる。	10,900
III	大浦浜遺跡	丘陵上斜面。旧石器や弥生式土器片が採集でき、住居跡も予想できる。	
	大浦浜遺跡	尾根根から浜堤。弥生式土器・師楽式土器・須恵器片などが多く多量に採用できる。	56,400
与 島	I しのだ遺跡	丘陵部に旧石器の散布がみられる他、平地には土器包含層がある。	33,700
	II		

島嶼部の埋蔵文化財

塩飽諸島に所在する埋蔵文化財については、古くから注目されていた。与島小学校には昭和8年以来採集されてきた石器類が保存されているし、櫃石島でも東山包雄氏によって根気強く資料が収集され保存してきた。

それらは学会にはばなしく発表されたり、多くの注目をあびることはなかったが、その業績は高く評価されなければならない。

昭和7年の岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告の中に、「鷲羽山で多数のサヌカイト製の石器を採集した」という記録があり、「鷲羽山には原史人の遺跡跡所にあり、全山に亘り、サヌカイトの破片夥しく、石鎌・石斧・石鎚等を多数検出した…」と記されている。昭和の初期、岡山県側と香川県側で期せずして、埋蔵文化財に対する関心が高まりつつあった。しかし残念ながらその後の継続的な調査研究の成果はなかった。そして学術的調査が本格的に実施されるようになったのは、昭和20年代の後半に入つてからであった。

昭和29年12月、鎌木義昌氏等によって先の鷲羽山の久須見鼻で発掘調査がおこなわれた。この調査によって土器を伴わない石器だけの文化の存在が明らかにされると共に、それ以来瀬戸内海の沿岸地帯及び島しょ部における石器文化に対する関心が急激に高まつていった。

香川県では昭和33年国分寺町の国分台の一角で多数の打製石器が発見され、次いで34年3月岡山大学の近藤義郎氏によって発掘調査がおこなわれた。同年川畠進氏が与島・小与島・櫃石島などで採集した多数の石器を報告し、翌35年8月香川県教育委員会は、与島の西方及び東方の尾根上で最初の発掘調査をおこなつた。

それよりさき昭和29年8月、香川郡直島町井島での調査、昭和30年坂出市城山出土の多数の石器の資料報告及びその分析等によって、瀬戸内沿岸地方における旧石器の編年が試みられた。こうして土器を伴わない土器文化以前の、瀬戸内海地方に最初の足跡をした人類の文化が次第に明らかにされていった。

昭和35年、与島で旧石器の発掘調査をおこなつた翌36年8月、再び香川県教育委員会は与島で発掘調査をおこなつた。この調査は製塩遺跡の調査で師楽式土器等多数が出土した。遺跡は、与島の東方61番地で、旧与島診療所の敷地にあたる。その頃坂出市の川畠進氏は附近で縄文式土器片を探集しており、与島には旧石器時代だけでなく、縄文時代・弥生末期から古墳時代にかけての遺跡の存在が明らかになつた。同様に櫃石島においても、大浦浜における師楽式土器包含層が確認されたほか、長崎鼻における後期古墳、歩渡島における組合せ箱式石棺の確認調査がおこなわれるなど、豊富な遺跡の所在が明らかになつた。

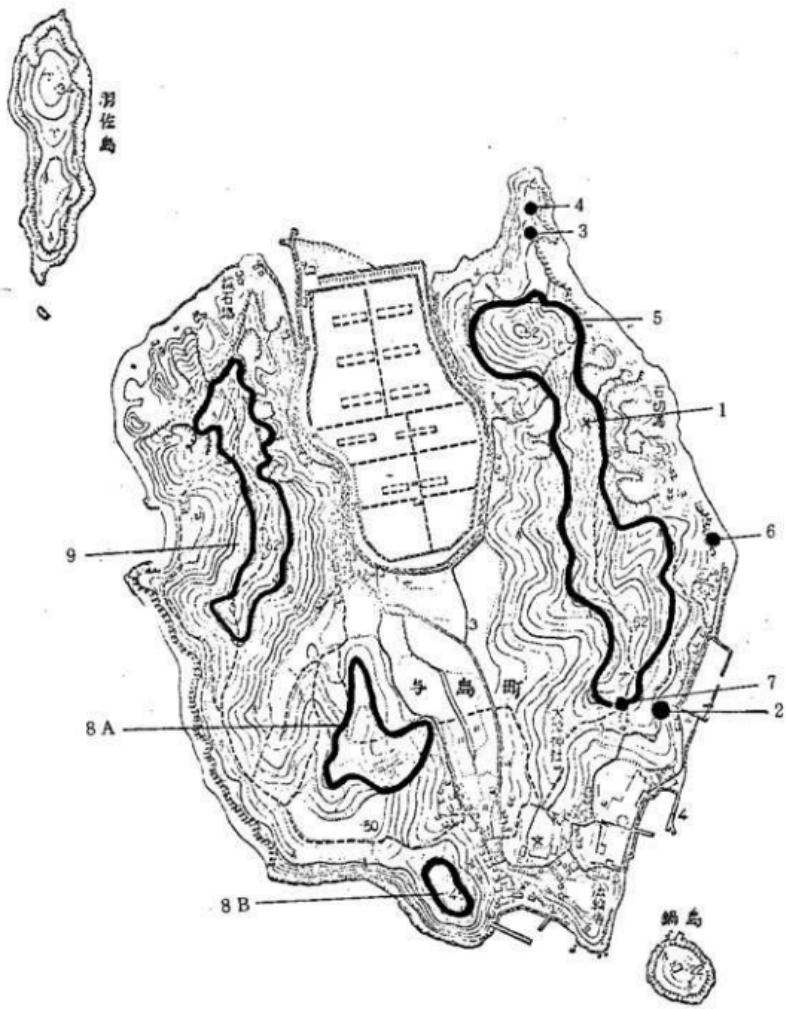
昭和37年に香川県教育委員会がおこなつた分布調査では、与島で山の神遺跡など7遺跡、

横石島で大浦浜遺跡など4遺跡が明らかになっていた。その後瀬戸大橋架橋工事が発表されたことによって、県教育委員会では、昭和47年度に国庫補助金を受け、県下一円における埋蔵文化財の分布調査をおこなった。その成果では、岩黒島・羽佐島において新たに旧石器の散布がみられたこと、横石島ではトビノス遺跡、がんど遺跡などが明らかになったこと、与島ではしのだ地区において旧石器の散布が明らかになったなど新発見資料の追加補正がなされた。



櫛石島の遺跡

1. 宮崎古墳
高さ約3m径7mの円墳、頂上に小祠がある。
2. トビノス遺跡
先土器時代の石器の散布地
3. がんど遺跡
今回の試掘調査でサヌカイト製の剝片やチャート製の剝片が出土した。
4. 石の塔
俗に「石の塔」と呼ばれている土地で、格狭間を刻んだ石がある。
5. 五輪塔
「しゃかのもと」の地名が残り、五輪塔1基と組み石数個が残っている。
6. 馬石・ゼにがみ石遺跡
島の最高所の標高78m一帯でサヌカイト製の石器の散布がみられる。
7. すくも塚
低い土盛りがあり古墳と思われる。
8. ほうろく岩遺跡（花見山遺跡）
王子櫛現社東西の尾根丘陵上でサヌカイト製の石器の散布がみられる。
9. 大浦及び大浦浜遺跡
丘陵地帯にはサヌカイトの散布があり、海浜部は製塙土器及び縄文土器・土師器の包含層がある。
10. たてわ古墳1・2・3号
古墳時代後期の横穴式石室がある。
11. 櫛岩遺跡
櫛岩と呼ばれる巨石がある。石器の散布もみられる。
12. 歩度島遺跡
組合せ箱式石棺群がある。



与島

(遺跡概要)

1. ミドロ遺跡

東方ミドロ採石場の上の丘陵からサヌカイト製ポイント・ナイフブレイド等が多数出土した。

2. タテバ遺跡

造船所近くの山裾から奈良時代以後の窯跡と推定できる土器群が出土したといわれているが未確認である。

3. 長崎鼻石組遺構

直径約30cmの石を二段ぐらいに積み方形に囲んでいる。性格は不明である。

4. 長崎鼻古墳

3の石組から北へ20m程のところに花崗岩切石の組合せ式石棺が2基あった。現在1基のみが露出し、あと1基は崩壊したものと思われる。

5. 東方遺跡

東方山の神から長崎鼻にかけての一带にサヌカイト製石器が散布している。

6. 大州浜遺跡

大州の診療所附近にあり、昭和36年にその一部が発掘調査され、師楽式土器片多数と貝(巻貝・ほたて貝)、魚骨(タイ・クロダイ)、歯骨(鹿らしい)等が検出された。

7. 山の神

小学校運動場から北に山を登ると頂上近くに聖人像を祀った小さな石祠がある。祠の背後は丸くテラス状の頂部になっており、そこからサヌカイト製ナイフ・ポイント等が掘り出された。

8. シノダ遺跡A・B

穴部の南部にある小丘一帯にサヌカイト製石器が散布している。

9. 西方遺跡

石槌神社を中心に、サヌカイト製ナイフが多数出土した。

樋石島第Ⅰ調査区

目 次

1. 立地 9
2. 調査の経過 9
3. 調査区の設定 10
4. 調査の概要 10
5. 主たる調査区 12
6. 遺跡の範囲 18

挿図目次

- 第1図 「がんど」凹地出土石斧
- 第2図 調査報告会
- 第3図 第1調査地区調査区の設定
- 第4図 2D-3平・断面実測図
- 第5図 3F平・断面実測図
- 第6図 5C出土石鐵実測図
- 第7図 「石の塔」の平坦地
- 第8図 5C平・断面実測図
- 第9図 「石の塔」及び周辺部の剖面図
- 第10図 第1調査地区遺跡の範囲

図版目次

- 図版1 (1) 第1調査小区Aトレンチ(南より) 25
(2) 第2調査小区(東より)
- 図版2 (1) 2D-3遺物出土状態 26
(2) 第3調査小区Cトレンチ(北より)
- 図版3 (1) 3F遺物出土状態 27
(2) 第4調査小区(西より)
- 図版4 (1) 第5調査小区(南より) 28
(2) 5C造構検出状態
- 図版5 (1) 5C造構及び石鐵検出状態 29
(2) 第6調査小区(南より)
- 図版6 (1) 第7調査小区(南より) 30
(2) 第8調査小区五輪塔群
- 図版7 (1) 「石の塔」北側斜面にかかる網み石 31
(2) 第1調査地区出土サヌカイト細片
(3) 第1調査地区出土チャート細片
(4) 5C出土石鐵
(5) 「がんど」凹地出土石斧

1 立地

第1調査地区は、島の東北部にあたる細長い「がんど」凹地の奥半分と、それを囲む南北側の標高20~30mの低い尾根筋及び丘陵上の地域である。

この地域には、周知の遺跡として、凹地北側の短く南北に延びた尾根上の「鳩の巣」遺跡があり、これまで畠地耕作の時などにサヌカイト製ナイフ形石器や剝片など先土器時代の遺物が多数採集されている。また、凹地の奥部北側の、俗に「石の塔」と呼ばれている平坦地に、格狭間を刻んだ方形の基礎石が残存し、これより約50m西南方の山裾には、原形にちかい五輪塔1基と崩壊した組み石が数個見られる。

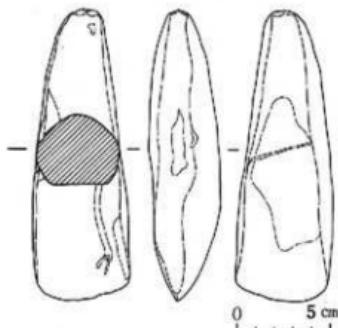
凹地の取付のところは、浜堤状に高まった地形で、付近の畠地より、細片ではあるが、古代の製塙に使用した師楽式土器や須恵器の破片が採集される。なお、昭和19年頃に凹地の南側尾根筋を東西に通る用水路の改修工事が行われた際、そのほぼ中央にあたるところで、長さ15.5cm、上部が次第に細くなる蛤刃の磨製石斧(第1図)が出土しているので、周辺の尾根筋や丘陵上を含めた地域に弥生時代の遺跡の存在が推測されている。一方、島内には、その昔御座船が凹地を出入りしていたという伝承もあり、一帯の往時の地形復元を明らかにすることも興味深いことである。

2 調査の経過

6月下旬、調査地区内の事前踏査に基づいて試掘地点の選定を行い、6月28日には地権者への調査説明会をもち、調査に関するご理解・ご協力をあおいた。

そして、7月2日より試掘区の設定に着手し、以後ほぼ予定通り第1調査小区から第8調査小区まで順次試掘及び地形測量調査を進め、9月4日をもって終了した。

その後、取り急ぎ調査資料の整理にあたり、9月20日~21日にかけ、櫛石公民館において調査報告会(調査の概要報告と従来島内で出土・採集されたものを含めた遺物の展示)を開いたところ、多数の方々の出席・見学を得たことは、まさに幸いであった。



第1図 「がんど」凹地出土石斧



第2図 調査報告会

3 調査区の設定

第1調査地区約30,900m²を事前の踏査や各所の現状に合わせて第1～8調査小区に区分し、大体300m²に3m²の割合で試掘区を設定した。一部、調査の進展に伴い試掘不要とした個所もあり、試掘面積は都合約240m²である。ただし、第8調査小区については、その遺跡の現状から考慮して地表観察及び地形測量調査にとどめた。

各小区の試掘区の設定は、次のとおりである。(第3図)

調査小区	立 地	試掘区数	調査面積
1	「嵩の巣」遺跡の北端部にあたる標高30mのところから16mに至る下降する尾根筋・山林	11	約75m ²
2	「嵩の巣」から南西に下った丘陵台地北東部・梅畠	7	約20m ²
3	標高21m前後の丘陵台地中央部・畑地	8	約69m ²
4	丘陵台地西南の斜面地形が一段掘り下げられて平坦地となつたところ・畑地	8	約23m ²
5	「がんどう」凹地ほぼ中央部・元水出地	3	約9m ²
6	通称「望の城」の短く北東に延びた尾根丘陵上・山林	6	約24m ²
7	島の最高所「四望眺」から北東に下降してきた標高30～21mの尾根筋・柿畠	6	約18m ²
8	ちょうど尾根の鞍部にあたる「石の塔」の平坦地及び周辺部・山林		約1,300m ²

4 調査の概要

調査小区	グリッド	面積(m ²)	所 見
1	A	21.75	各区とも、半ばの幅で風化花崗岩層(表土下20～70cm)まで掘り下げ、3～4土層序を観察した。
	B	7.8	遺物なし
	C	2.03	遺物なし
	D	22.65	第2層暗褐色土中(表土下約15cm)よりサスカイト剝片1出土
	E	3	第2層暗褐色土中(表土下約10cm)よりサスカイト剝片1出土
	F	3	遺物なし
	G	3	遺物なし
	H	3	遺物なし
	I	3	遺物なし
	J	3	遺物なし
	K	3	遺物なし

調査 小区	グリ ッド	面積(㎡)	所 見
2	A-1	2.25	表土下20~40cmのいわゆる地山(黄褐色土)層まで掘り下げ、第2層暗褐色土中より遺物を検出した(図版1(2))。
	A-2	3	しかし、サヌカイト・チャート細片と素焼土器(性格不明)・瓦質土器・陶磁器片などが混在した状態である。
	B-1	3	
	B-2	3	
	D-1	3	
	D-2	3	
	D-3	3	
3	A	12.15	丘陵台地上を広範囲に確認するため、A~Dは直交するトレンチとした(図版2(2))。各区とも地山(黄褐色土)層まで15~25cmほどで、第2層暗褐色土中より遺物を検出した。ここでもサヌカイト・チャート細片と150点をこえる素焼土器・陶磁器・染付片などが混在した状態である。なおBトレンチの直交点ちかくで径1.5m、深さ0.8mほどの円形すり鉢状土坑が認められたが坑内出土物・堆積土などから畠地開墾に伴うものと判断した。
	B	14.70	サヌカイト細片3・チャート細片4出土
	C	17.10	サヌカイト細片3・チャート細片3及び素焼土器・陶磁片が多数出土
	D	12.75	サヌカイト・チャート細片各2出土
	E	3	サヌカイト細片2出土
	F	3	チャート細片1出土
	G	3	サヌカイト細片11・チャート細片3出土(第5図・図版3(1))
	H	3	遺物なし
			サヌカイト細片3出土
4	A	2.25	丘陵台地の斜面地形を掘削し、西南側に寄せ土して半壇な畠地としている。地山(黄褐色土)層まで20~30cmで、表土下の暗褐色土・暗黃褐色土(耕作土層)中より遺物を検出した(図版3(2))が、所によって土層序の搅乱もひどく、サヌカイト・チャート細片・素焼土器片などが同一土層内に混在していた。
	B	3	遺物なし
	C	3	素焼土器・陶磁片のみ出土
	D	3	チャート細片1出土
	E	3	チャート細片2出土
	F	3	チャート細片1出土
	G	3	サヌカイト細片2・チャート細片1出土
	H	3	チャート細片1及び素焼土器片が多数出土
5	A	3	凹地奥部は湿地状態であるため、ほぼ中央部に場所を選んで試掘(図版4(1))。標高10m前後。南側道路とは1mほどの高差がある。A・Bでは95~105mの掘り下げで湧水がひどく、7~8層の土層序を観察したにとどまる。
	B	3	サヌカイト細片2・チャート細片1のほか、第7までに特に素焼土器・陶器片など多数出土
	C	3	サヌカイト細片2のほか、第6層までに特に素焼土器・陶器片など多数出土
			第7層下の位置より船板で仕切った用水路遺構検出、内部堆積土巾より弥生石器1出土(第6・7図、図版4(2)・図版5(1))

調査小区	グリッド	面積(畝)	所	見
6	A	9	山林の地形はさして変容が見受けられない。以前に近辺でサヌカイト製石器が表探されたという。しかし、堅質の黄褐色地山層まで15~20cmと浅く、遺物の出土は第2層暗褐色土中よりのわずかである(図版5(2))。	遺物なし
	B	3		遺物なし
	C	3		サヌカイト細片5のほか素焼土器片十数点出土
	D	3		遺物なし
	E	3		遺物なし
	F	3		遺物なし
7	A	3	尾根筋を掘削し、南北側斜面にかなり寄せ土をして平坦にちかい畑地としたところ。北側斜面にかかるE・Fで黄褐色地山層まで50~90cm・6層ほどの層序が見られるが、他は15cm前後と浅い(図版6(1))。	遺物なし
	B	3		陶磁器片3のみ出土
	C	3		遺物なし
	D	3		陶器片3のみ出土
	E	3		遺物なし
	F	3		チャート細片1出土
8		約1,300	「石の塔」の平坦地(標高17~18m)及び周辺部を調査区域とした。	各所の写真撮影と $\frac{1}{100}$ 地形測量図を作成(第9図)

5 主たる調査区

(1) 2D-3

丘陵の西側斜面にかかる位置に設定した。黄褐色地山層は区内西寄りで次第に下がり、表土下45cmほどを測る。遺物は第2層暗褐色土中より出土したサヌカイト細片14・チャート細片2であり、同層下位西半部での出土が多い(第4図)。

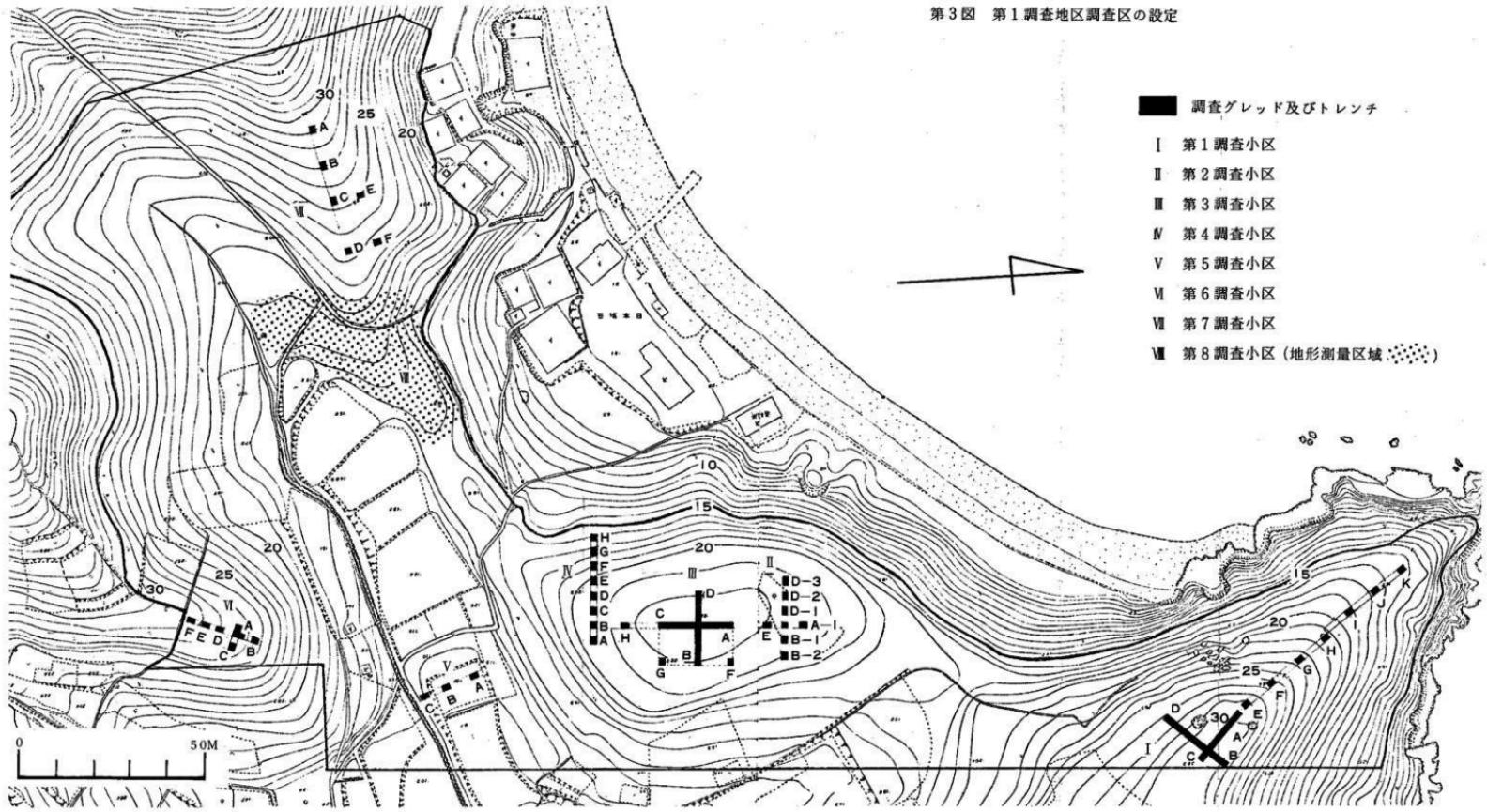
しかし、近辺の地形の変容や土層序の観察からして、同層が原状を維持する遺物包含層であるとはいひ難い。おそらく、東側斜面にちかい2B-2においてと同様に、他に比べてサヌカイト・チャート細片の出土が多かったのは、畠地開墾時に掘削土が東西側に引き寄せられて混入したためであろう。

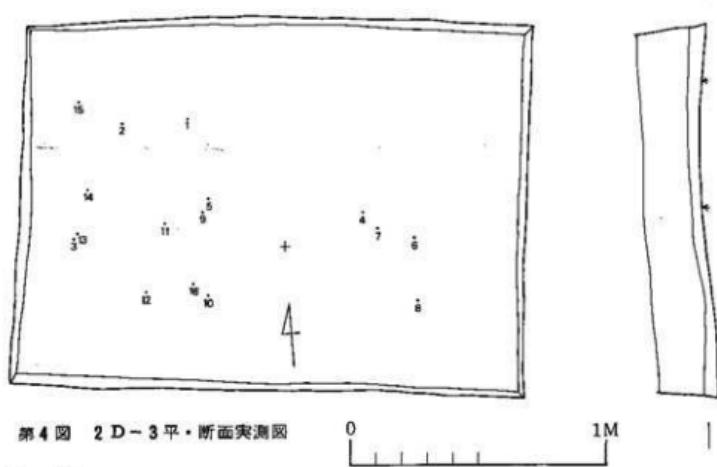
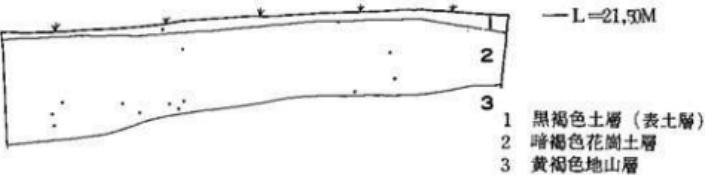
(2) 3F

丘陵中央部の東側斜面にちかい試掘区で、やや傾斜地である。黄褐色地山層までは15~20cmと意外に浅く、区内中程で幾分段づき東寄りに下がる層序から掘削時の様子が分る。

遺物は第2層暗褐色土中より検出されたが、そのほとんどが区内東半部においてであり、サヌカイト細片11・チャート細片3(第5図)と十数点の陶磁器・素焼土器片が混在した状態であった。こうした遺物の出土状況や現状の地形からみて、ここでもやはり先述の2D-3・2B-2と同様なことが考慮される。

第3図 第1調査地区調査区の設定





第4図 2D-3平・断面実測図

0 1M

5 C

兩側道路から一段下がった狭い平坦部で、これより緩い傾斜で凹地内に入る。

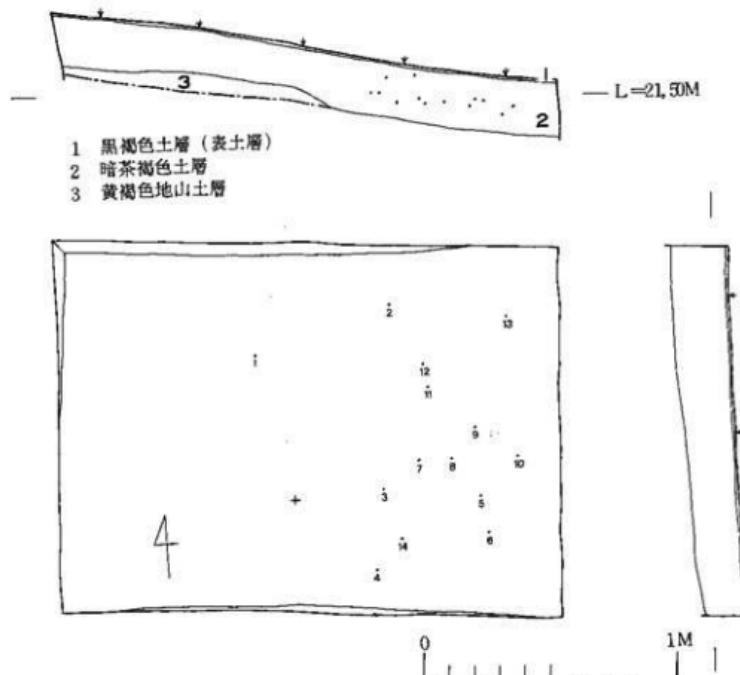
80~90cmの掘り下げで砂質の堆積土が8~9層ほどに細分され、兩側道路の高まりに沿った層序を示している。その第7層下(表土下70~80cm)の位置より、背後に丸杭どめをした船板で幅60cmほどに仕切った用水路の遺構が検出された(第7図)。堆積土層序からみれば、兩側船板の旧状は幅30~40cmのものであったかと推測され、上開きの傾斜も北側より大きい。内部には3~4層の砂質堆積土下に青灰色粘質土層が見られ、ある期間流水の用をなしていたことが分る。その設営の時期については、船板やそれに取り付けられた銅板の一部・釘などの腐蝕状況からみて、さほど時代を遡る遺構とは考えられない。このため、地権者その他島内の事情に詳しい人に問合せたが確実な時期をおさえることができなかった。一部には、明治中頃の設営ではなかろうかと推測している。

ところで、遺構内の黄褐色白色砂質堆積土中より弥生期のサヌカイト製無茎石器1点(第6図)が出土した。長さ2.4cm、基部はわずかに凹み幅1.6cmを測る。かなり精巧な剥離調整によるものである。

この石器は、いうまでもなく近辺より流入したものであるが、先述の磨製石斧がここより東へ約30mのところで出土していることを考えあわせると、凹地周辺部に弥生時代の遺跡の存在が十分に推測される。それが、南側の尾根丘陵上なのか、凹地奥部の山裾部なのかについては、地表観察だけでは推測の域をはず、今後の調査を待ちたい。

なお、凹地内に位置する5A・5Bにおいては、湧水のため7~8層の土層觀察にとどまった。その土層序にはあまり変化がなく、ほぼ中層に粘質土層を挟んで上・下に砂質土層が堆積している。上層からは素焼土器・陶磁器・染付片などが混在状態で多数出土しているが、5A第8層・5B第7層ではほとんど遺物の出土をみなかつた。

このように、今回の調査では、凹地の旧状復元や堆積推移を確認するまでに至らなかつた。そのためには相当規模の調査が必要であろうし、今後の課題としたい。



第5図 3F平・断面実測図

(二) 第8調査小区

ここでは各所の写真撮影と $\frac{1}{100}$ 地形測量図(第9図)を作成して、今後の調査を検討する資料を得た。

「石の塔」の平坦地は、東西約20m、南北幅が東側の広がったところで15mを測る。北側が自然斜面の状態、東南側は明らかに切岸状をなす。南側岸下の田地とは3mほどの高差をもつ。西南側は、50cmほど一段低下した9×24mの略長方形状平坦地である。また、平坦地の縁辺斜面には石垣積みの一部も見られる。

さて、平坦地の北寄りに、側面に格狭間を、上面中央に浅い窪みの小さな納穴を刻んだ方形の花崗岩基礎石が残る(第7図)。上部の石造物の形状については知る由もないが、故意に4分割されている。格狭間の観察から、中世末期頃にまで遡るものではなかろうかといわれている。

ともかく、この基礎石が「石の塔」と呼ばれる石造物に係るものであり、これがこのあたりの古地名の因ってきたところであろう。

ところで、「がんどう」の地名は伽藍堂からの転訛だといわれ、凹地奥部には「しゃかのもと」・「さいのかあら」の古地名が残っている。「しゃかのもと」とは、「石の塔」の平坦地から西南約50mの五輪塔群が所在するあたりを指す。かつては5~6基の五輪塔があったといわれるが、今は比較的原形にちかい1基と崩壊した組み石が数個散在する(図版6(2))。それらの十分な時代考察は難しいが、中世末期頃まで遡るものかもしれない。なお、対面する南側尾根の「さいのかあら」にも、数基の五輪塔が存在していたという。また、「石の塔」を下った海浜部を「堂の浦」と呼ぶ。

こうした古地名の位置関係や五輪塔群の所在、平坦地の状況などから考慮して、「石の塔」に小伽藍の御堂が営まれていたとすることも、あながち無理な推測ではなかろう。い

第8図 5C出土石築実測図(実大)



すでにせよ、この平坦地に何等かの建造物が存在し、それが石の塔を伴うものであったのか、石の塔がそれ以後のものなのか、などについては今後の綿密な調査によって検討したい。

なお、この平坦地東寄りの北側斜面にかかるところに箱式石棺様遺構が2ヶ所見られることにも留意したい。東側のは、板状の花崗岩を用い、1石が横位に立ち、斜面すぐ下方に数個の転石がある。これ



第7図 「石の塔」の平坦地

より5mほど離れて、花崗岩の不整形な割石を箱状に組んだ一部が残る。これらは、表面観察だけでは直ちに石棺遺構とは決め難く、なぜ、石垣遺構とも見受けられない組み石が、このように露な状態で平坦地の一画に残存したのかと疑問がある。

6 遺跡の範囲

今回の調査は、あくまで予備調査の性格上調査の方法や調査区の設定などにもおのずから制約があり、調査地区内の埋蔵文化財の内容を十分に把握できたとはいひ難い。

しかし、調査の結果、各調査小区における遺物の出土状況や土層序の観察からほぼ遺跡の概況を知り得ることができた（第10図）。

第1調査小区では、下降する尾根筋はともかく、A～Dにおいて、僅か2点のサヌカイト剥片が出土したにすぎないが、その立地は「糸の巣」遺跡の北端部にあたり、地形的にみても同遺跡の広がりを考えざるを得ないところである。

そして、従来遺跡として知られていなかった第2～4調査小区では、相当数のサヌカイト・チャート細片が出土し、特にサヌカイト同様に石器の原材として使用されたチャート（薄い青緑色）については、この島で知られていなかっただけに注目される。

たしかに、それらが石器の形態をとるものではなくても、明らかに石器製作の過程で生じたものであり、今後の本格的な調査によって先土器時代の人々の生活のあとも発見される可能性も強いわけである。

第5調査小区では、凹地の旧状復元という課題を残しながらも、近辺における弥生遺跡の存在が十分に推測できる成果があった。今後はできるだけ広範囲な発掘調査を通じて、単に凹地の旧状復元にとどまらず、周辺部の弥生遺跡の存在、「石の塔」、五輪塔群などに深くかかわる資料を得たい。

また、第6調査小区周辺部においても、これまで石礫の表探があったことを考えると石器散布地としての調査を要する。

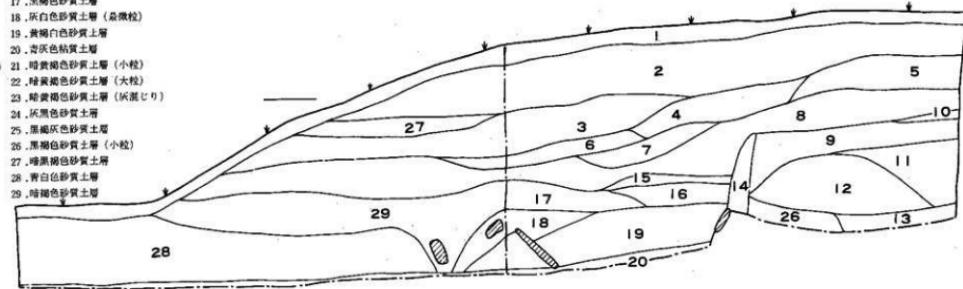
第8調査小区については、先述のような中・近世遺構の確認のため、全面的な、しかも詳細な調査が必要である。それらは、その時期においてこの島における代表的な遺跡の一つであり、確かな歴史の資料をわたくしたちに与えてくれるだろう。

わたくしたちは、たとえ1片の石片や土器片でも疎かに取り扱うことはできない。どのように小さな遺物にも、どのように小さな遺跡にも、かならず歴史を明らかにする貴重なヒントが潜んでいるはずである。

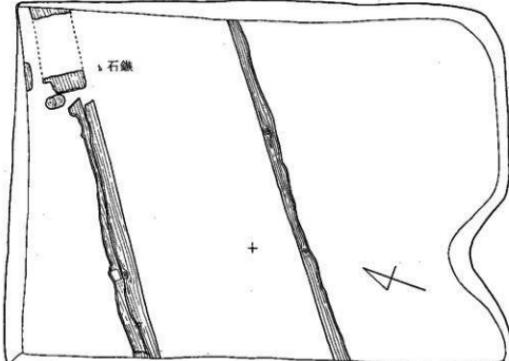
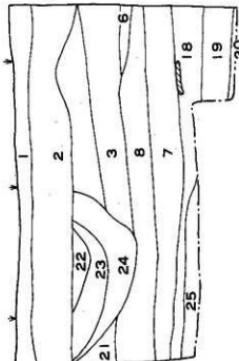
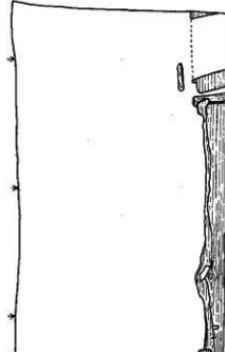
このことを念頭において、今後の調査をどのように実施するかについて考慮したい。

1. 黒褐色土 (腐食堆積土)
 2. 黄白色砂質土層
 3. 棕褐色砂質土層
 4. 茶灰白色砂質土層 (⑧より微粒)
 5. 黄白色砂質土層 (⑨より大粒・ジャリ混じり)
 6. 棕褐色砂質土層 (灰混じり)
 7. 淡白色砂質土層 (⑩より微粒)
 8. 淡白色砂質土層
 9. 黄灰白色砂質土層
 10. 黄白色砂質土層
 11. 明褐色砂質土層
 12. 暗茶褐色砂質土層 (大粒)
 13. 暗褐色砂質土層 (大粒)
 14. 茶褐色砂質土層 (茶色浸透移層)
 15. 貴重白色砂質土層 (米粒大的砂呉葉)
 16. 明褐色砂質土層

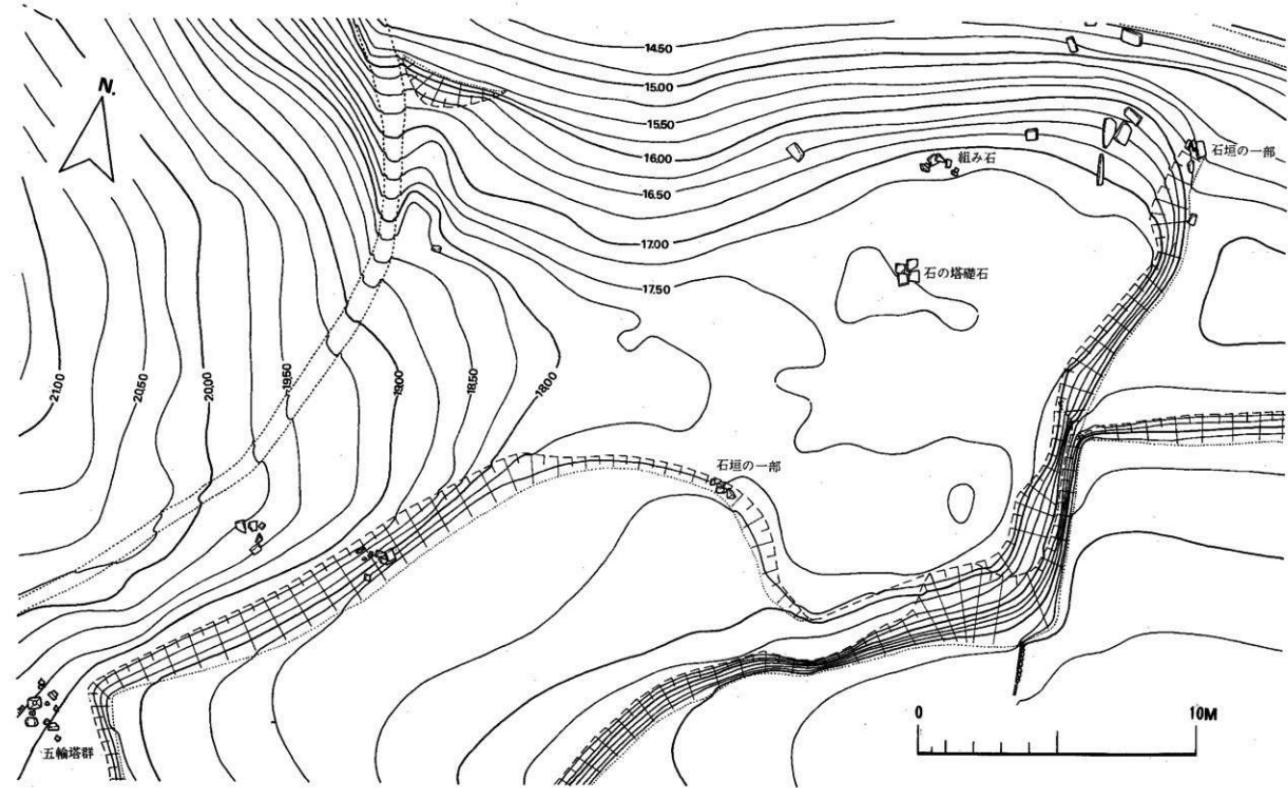
— L = 10.50M



— L = 10.50M

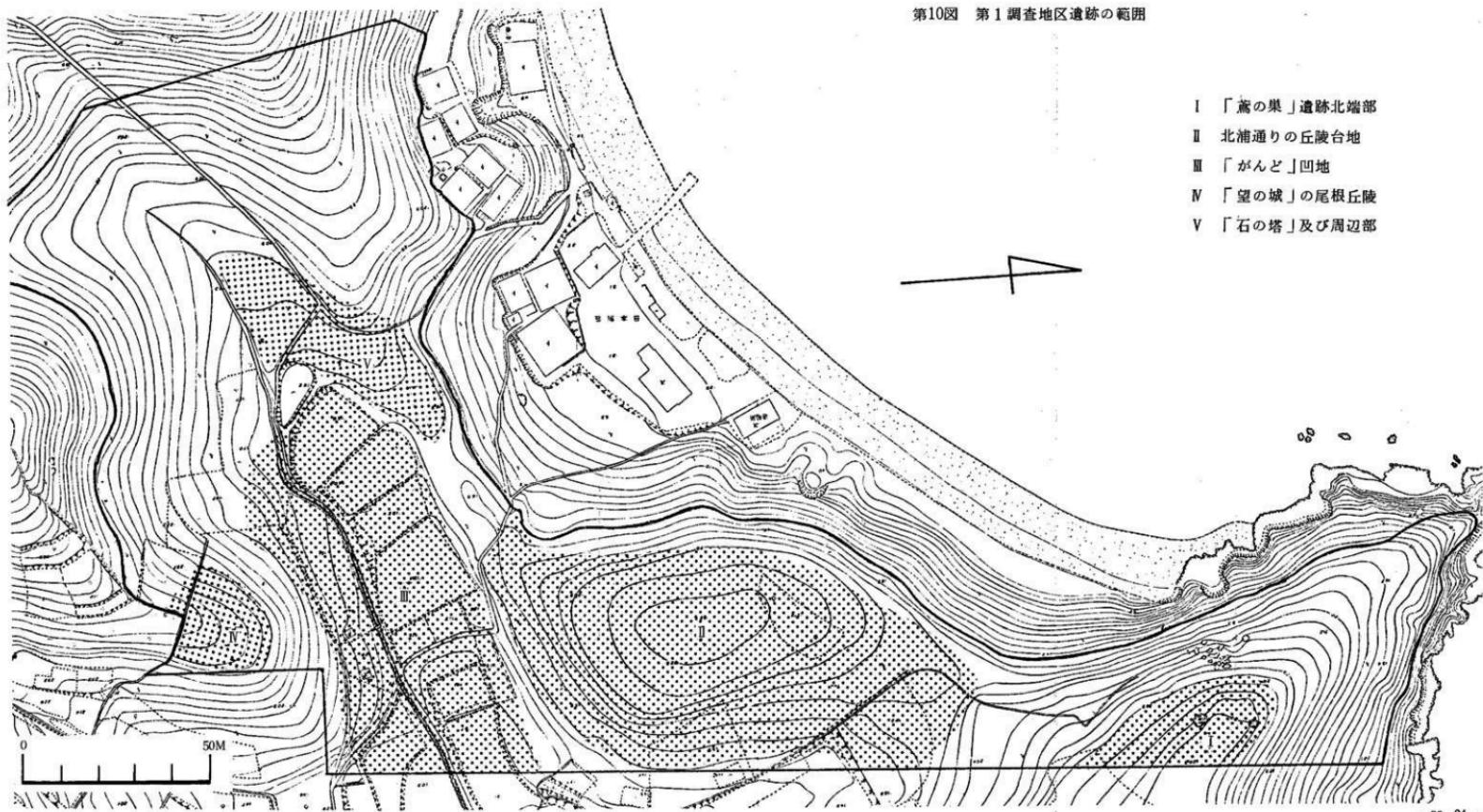


第8図 5C平・断面実測図



第9図 「石の塔」及び周辺部の測量図

第10図 第1調査地区遺跡の範囲

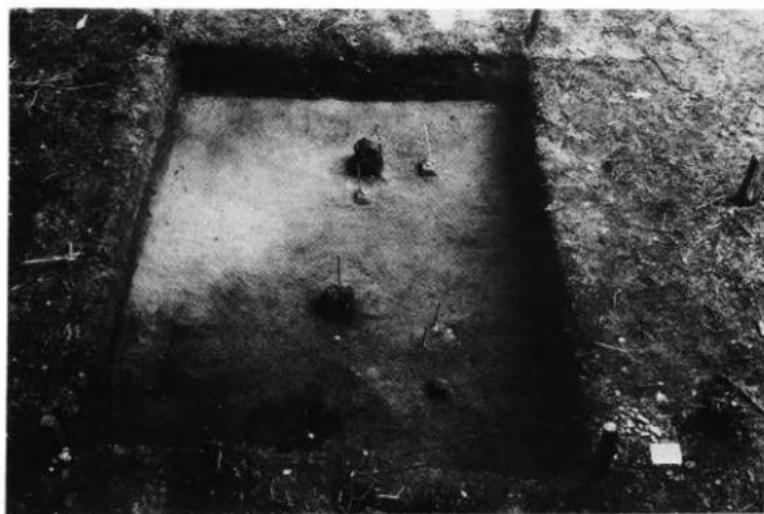




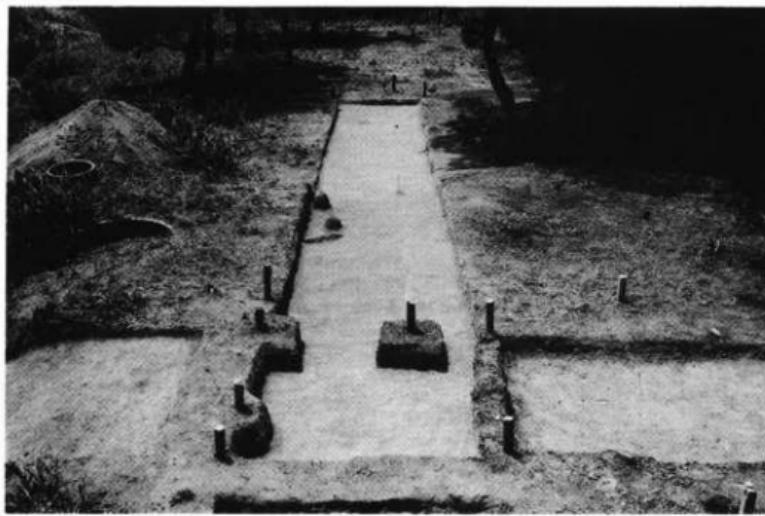
(1) 第1調査小区Aトレンチ(南より)



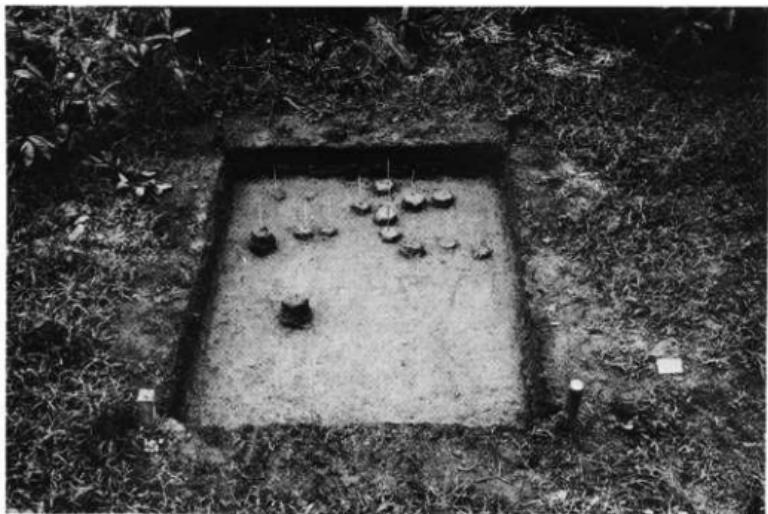
(2) 第2調査小区(東より)



(1) 2 D - 3 遺物出土状態



(2) 第3調査小区Cトレンチ(北より)



(1) 3 F 遺物出土状態



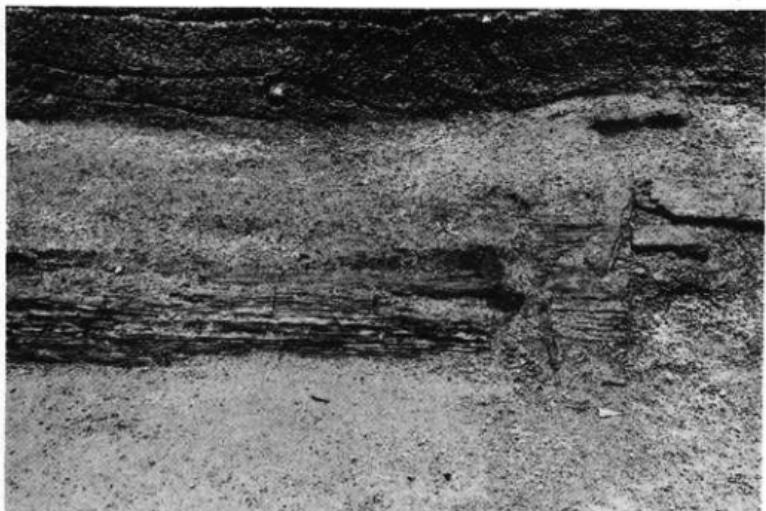
(2) 第4調査小区（西より）



(1) 第5調査小区(南より)



(2) 5C造構検出状態



(1) 5 C造構及び石縁検出状態



(2) 第6調査小区（南より）



(1) 第7調査小区(南より)



(2) 第8調査小区五輪塔群



(1) 「石の塔」北側斜面にかかる組み石



(2) 第1調査地区出土サヌカイト細片



(4) 5C出土石鎌



(3) 第1調査地区出土チャート細片



(5) 「がんど」凹地出土石斧

樺石島第Ⅱ調査地区（ホウロク石）

目 次

1. 立地	35
2. 調査の経過	35
3. 調査地区的設定	36
4. 調査の概要	39
5. 主たる調査区	41
(イ) 樺Ⅱ-1-D	第1図
(ロ) 樺Ⅱ-2-A	第2図
(ハ) 樺Ⅱ-3-C	樺Ⅱ-1-D調査グリッド実測図
(ニ) 樺Ⅱ-3-H	樺Ⅱ-2-A調査グリッド実測図
6. 遺跡の範囲	72

7. 插 図 目 次	
第1図	樺Ⅱ-3-H調査風景
第2図	樺石島第2調査区位置図
(イ) 樺Ⅱ-1-D	樺Ⅱ-1-D調査グリッド実測図
(ロ) 樺Ⅱ-2-A	樺Ⅱ-2-A調査グリッド実測図
(ハ) 樺Ⅱ-3-C	樺Ⅱ-3-C調査グリッド実測図
(ニ) 樺Ⅱ-3-H	樺Ⅱ-3-C調査グリッド出土遺物実測図
第3図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図
第4図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図
第5図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図
第6図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図
第7図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-1
第8図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-2
第9図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-3
第10図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-4
第11図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-5
第12図	樺Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物分布実測図-6
第13図	樺石島第2調査区の遺跡の範囲

図 版 目 次

図版 1.	(1) 樺Ⅱ-1-D調査グリッド(北より).....	73
	(2) 樺Ⅱ-2-A調査グリッド(西より)	
図版 2.	(1) 樺Ⅱ-3-C調査グリッド	74
	(2) 樺Ⅱ-3-H調査区発掘前景	
図版 3.	樺Ⅱ-3-H調査グリッド全景	75
図版 4.	(1) 樺Ⅱ-3-H第2層下層(北から)	76
	(2) 樺Ⅱ-3-Hグリッド全景、対岸は鶯羽山遺跡	
図版 5.	(1) 樺Ⅱ-2-Aグリッド出土遺物	77
	(2) 樺Ⅱ-3-Cグリッド出土遺物	
図版 6.	樺Ⅱ-3-Hグリッド出土遺物-1	78
図版 7.	樺Ⅱ-3-Hグリッド出土遺物-2	79
図版 8.	樺Ⅱ-3-Hグリッド出土遺物-3	80
図版 9.	樺Ⅱ-3-Hグリッド出土遺物-4	81

花見山地区（ホウロク石）

1. 立地

標高76mの櫛石島最高所の四望眺遠跡から緩やかに蛇行しながら南下する尾根は、石楠大槻現のある標高67.3mの地点やホウロク石地区で支脈を発し、櫛石島中央部の山麓地帯を形成する。第2調査地区（ホウロク石地区）の丘陵地は瀬戸内海の島嶼の例にもれず花崗岩を基盤とし、その表層は花崗岩風化土壌であり、殆んどが階段状の畠地に開墾されている。この地区的地形は尾根状丘陵地とそれに挟まれた狭い谷底地に区分されるが、それらの微地形は地点ごとに若干の相違が認められる。

2, 3の雑誌に発表されている表探資料の分布地点や今回実施の分布調査に於いて確認された旧石器の散布地はこの尾根状丘陵地の比較的緩やかな稜線上の平坦部分に立地する。

2. 調査の経過

8月中旬 第II調査地区、調査地点の設定のため3日間調査区の踏査を行ない、地形に見合った各地点に小区を定め、8月31日櫛石公民館に関係者各位の出席を求め、第II調査区の調査計画、調査地点などを説明し、承諾を得る。

9月 発掘小区にかかる地権者と共に地番、地目、発掘面積を確認し、発掘用地借上げ契約を締結する。

9月上旬は発掘各小区の立木伐採、下草刈りを発掘区抗打ちに平行して行なう。

第II調査地区第2小区（以下櫛II-2と呼称する）の9グリッド36m²の調査を、9月末に終了する。

櫛II-1地区の調査は10グリッド37m²を対象とし作業の都合上、櫛II-1、II-3地区と平行して行ない、9月28日に終了した。

櫛II-3地区は、第II調査地区の内で一番旧石器類の散布の多い調査地区で、櫛II-3-Aから櫛II-3-Jまで10グリッド56m²を調査対象とした。9月20日に着手し終了したのは12月19日であった。櫛II-3-Hグリッドの調査は延べ20日以上を要した。

10月 櫛II-4, 6地区はホウロク石から、南に続く尾根状の調査地区で、



第1図 櫛II-3-H調査風景

9月28日に調査を開始し、10月13日に終了した。

横II-5, 7, 8地区は櫛石中学校背後の丘陵基部の傾斜地に設定した8グリッド $29m^2$ の調査区であるが、10月6日から調査にかかり、12月18日終了した。

なお、櫛石島第II調査地区の調査と第III調査地区の調査は調査員、作業員の配置上の都合で10月中旬から併行して実施した。

3. 調査地区的設定

櫛石島第II調査地区は第I調査地区的「がんど」凹地につづく丘陵端部から、櫛石中学校背後の谷状地までに便宜的に区分されたものであるが、旧石器の散布密度の高いホウロク石周辺を中心に、尾根状丘陵部と谷状地に区分され、それらの走向に合せて、各調査小区を設定した。

櫛石第II調査地区第1小区（横II-1と略称する）

この調査小区は標高63.7mの石椎大権現社周辺の高地から北東に伸びる尾根稜線上に定めたもので、横II-A～Jまで10グリッド $37m^2$ の発掘区である。A～Jの各グリッド間の隔りは地形状況に合せて随時変化させている。またグリッドの規模も立木、果樹などの実情に合せて大小にする。

櫛石第II調査地区第2小区（横II-2）

宝珠寺背後の谷状地と尾根状地に定めた調査地区で、A～Iまで各口 $2 \times 2 m$ グリッド9個を定める $36m^2$ の調査面積である。

櫛石島第II調査地区第3小区（横II-3）

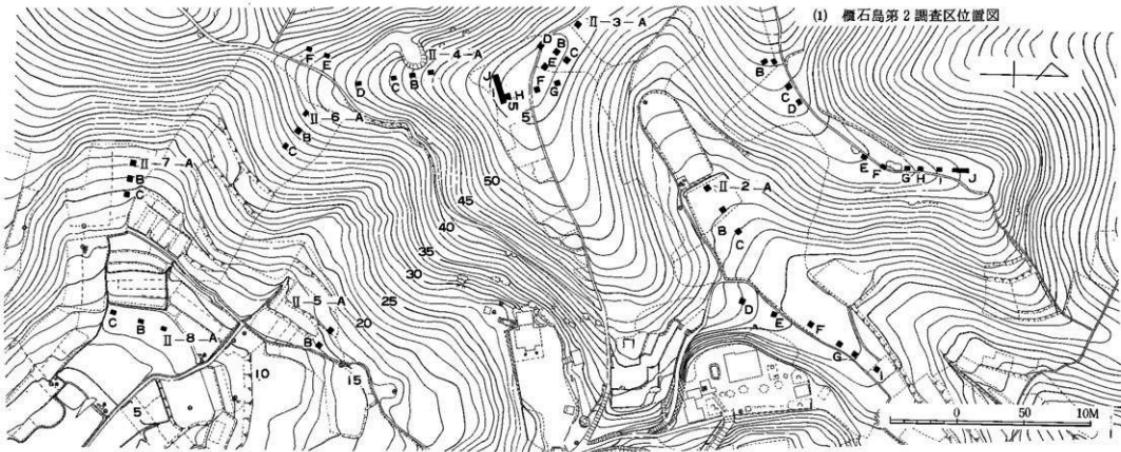
ホウロク石と通称される一帯の尾根状丘陵地で、王子神社門前の鞍部を経て宮崎まで連続する尾根の基部にあたる。一帯は台帳上は畠地とされているが既に放棄されていて、雑草の繁茂がみられるものの、随所に多量のサヌカイト片を認めるばかりか中にはナイフ形石器や尖頭器等をも採集する程で、調査前から旧石器時代遺構の所在が予期された。この地区的調査は一本松のある平坦地付近で尾根が曲折しているため、北方の石椎権現社のほうに続く平坦地に5グリッド $20m^2$ 、曲折地点近くではほぼ南北に3グリッドを設定し、南端のグリッドはさらに西方へ発掘区を延長したグリッドを定めた。ホウロク石地区の発掘全面積は $54m^2$ である。

櫛石島第II調査地区第4小区（横II-4）

ホウロク石地区から南に続く尾根が鞍部となる部分に定めたもので、やはり稜線上に尾根の走向に合せて、A～Fの6グリッド $18m^2$ を設定した。

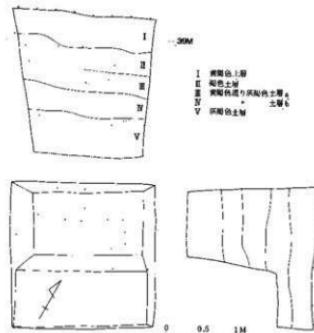
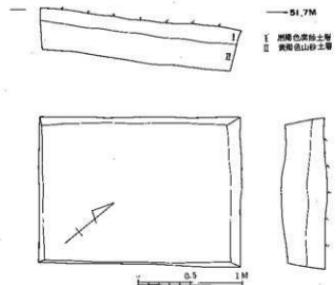
櫛石島第II調査地区第5, 6, 7, 8小区（櫛石II-5, 6, 7, 8）

これら4小区は櫛石中学校背後の三方尾根に挟まれた谷状地の尾根傾斜地と谷底部に定



(3) 横II-2-A調査グリッド実測図

(2) 横II-1-D調査グリッド実測図



第2図 横石島第2調査地区位置図、横II-1-D・II-2-A調査グリッド実測図

めたものである。第6小区は第4小区の鞍部から谷に続く傾斜地に定めた3グリッド $10m^2$ 調査区でミカン園の果樹の間をねったような状態である。

第5、第7小区はいづれも緩い傾斜地の畠地に定めた小区で5グリッド $20m^2$ の調査面積である。第8調査小区は、台帳には水田と記される。谷状地の中央部低湿地に定めたもので3グリッド $9m^2$ の調査面積である。

4 調査の概要

各調査区の概要

調査グリッド	面積 m^2	出土遺物	遺構	調査の所見
権Ⅱ-1-A	3		不明ピット	権Ⅱ-1 調査区は北に伸びる馬背状の瘦尾根に設定したものであるが、表土腐蝕土層、第2層花崗岩バイラン土層の2層をみるとだけで遺物包含層は皆無であった。不明ピットとしたのも植物の影響や地山の微細な変化によるものと考えられる。
	3			
	4			
	3			
	3			
	3			
	3			
	3			
	9	近世瓦質土器片		
権Ⅱ-2-A	4	サヌカイト片4・チャート片3・土師器・須恵器・瓦質土器・青磁片・瓦	不明落ち込み 不明ピット	平安～鎌倉の下層の土にサヌカイトを含む土層が堆積する。 A～Cグリッドは谷状地に定めたもので堆積土層が深く、遺物包含層に上下の逆転がある。 D～Iグリッドは畠地に定めたもので、近世から現代までの種々の遺物が混在する。 全体的に見れば安定した遺物包含層もなく遺構は所在しないと思われるが、A・B・H等に発見された青磁を中心とした中世土器の散漫な散布があるため注意を要する。
	4	サヌカイト片3・チャート片3・土師器片・瓦片・瓦質土器片		
	4	土師器片・瓦片		
	4	サヌカイト片・弥生式土器片・陶器片		
	4	サヌカイト片・チャート片・弥生式土器片・土師器片・須恵器片・瓦質土器片・瓦片・陶器片		
	4	サヌカイト片・瓦質・陶器片		
	4	近世土器片・瓦片・陶器片		
	4	青磁片・陶器片		
	4	瓦片・陶器片・近世土器片		
権Ⅱ-3-A	4	小型ナイフ形石器1・細石核1・二次加工ある細片1・剥片2・碎片5	不明ピット	不明ピット近くに細石刃核等出土。
	4	横長剥片石核1・縦長剥片石核1・剥片2・碎片4		
	4	細石核1・ポイント1・ナイフ形石器1・剥片15・碎片20・チャート碎片1		
	4	細石核1・縦長剥片1(切出形である)・ナイフ形石器1・剥片11・碎片15		
	4	縦長剥片1・剥片5・碎片16		

調査グリッド	面積 m ²	出土 遺 物	遺 構	調 査 の 所 見
標Ⅱ-3-F	4	細石刃3・細石核1・削器1・剥片11・碎片34・黒曜石剥片1・石礫2	巨石側近	布密度が高く石器製作跡を中心とした遺構の所在が容易に推定される。
G	4	石核1・縦長剥片2・幾可学形石器1・台形様石器1・剥片10・碎片40		なお、この調査区から東方の王子神社に至るまでの稜線上の平坦地もやはり、サヌカイト片の散布が著しく注意が必要である。
H	12	石核4・縦長剥片15・翼状剥片8・ナイフ形石器28・小型ナイフ形石器11・幾可学形石器2・二次加工ある剥片18・削器5・彫器2・ドリル3・尖頭器1・細石核14・細石核再生石器17・細石核に関連する剥片78・細石刃43・叩石3・円錐・焼石19・剥片328・碎片2862		
I	8	翼状剥片1・細石核1・細石核再生剥片8・石核1・ナイフ形石器4・切断ある剥片3・二次加工ある剥片・削器1・黒曜石7・焼石・円錐・剥片327・碎片79ほか		
J	8	横長剥片石核1・縦長剥片1・ナイフ形石器1・二次加工ある剥片4・削器1・細石核1・細石刃4・剥片20・碎片91・黒曜石碎片2		
標Ⅱ-4-A	3	土師器片1・瓦質土器・近世土器片・鉄片1		この調査区は標Ⅱ-3地区から南に伸びる尾根上に定めたものだが、表土花崗岩風化土層の2層をみるとだけで包含層は皆無である。
B	3	瓦片2		散見する土器片は近世以降畠地化されたとき混入したものとみられる。
C	3	近世土器片		
D	3	陶器片・近世土器片		
E	3	瓦片		
F	3	瓦片・近世土器片		
標Ⅱ-5-A	4	サヌカイト片2・チャート片2・須恵器片・近世土器片		標石中学校から王子神社に至る谷傾斜面に定めたグリッドであるが、後世の混入以外の遺物は検出されない。
B	4	近世土器片		
標Ⅱ-6-A	3			標石中学校西の標高25~30mの傾斜面に定めたグリッドであるが、遺物遺構は検出されない。
B	4			
C	3	陶製土鍤1		
標Ⅱ-7-A	4	須恵器片1・近世土器片		標石中学校背後の南部谷傾斜面に定めたグリッドである。地表下1m前後で、グライ土層が検出された。遺物は二次的堆積したもので遺構は検出されない。
B	4	瓦片・近世土器片		
C	4			
標Ⅱ-8-A	3	近世土器片		
B	3	サヌカイト片1・瓦質碗・瓦・土鍋片2・近世土器片		
C	3	近世土器片		

5. 主たる調査区

(1) 標Ⅱ-1-D (標石第Ⅱ調査地区第1小区)

石楠大権現から「がんど」凹地に伸びる尾根稜線上の標高約51.5mの地点に設定したグリッドである。地目は畠地と記載されているが、十数年来畠地としては利用されず松林となっている。

土層は2層しかなく、その基底部は花崗岩風化の地山である。第1層は旧耕作土で10~15cmの厚さではほぼ水平であり、黒褐色腐蝕土層である。第2層は黄褐色を呈する山砂土層で20~25cmを測り、地山の花崗岩風化土層とかなり凹凸を持って接している。第1層、第2層とも遺物は検出されない。

この標Ⅱ-1 調査小区では、標Ⅱ-1-A~Hまで8グリッドを調査したが各グリッドともやせた尾根上にあるため表土、表土下層、花崗岩風化の地山といった層序を示し、表土層の浅いところでは数cmも掘り下げないで直ちに地山が検出されたグリッドも2、3認められた。遺物は標Ⅱ-1-Hの表土中から明らかに遊離遺物とみなしうる細片化した瓦質土器の破片を1片検出しただけで、ほかには全くその出土は認められなかった。

(2) 標Ⅱ-2-A (標石第Ⅱ調査地区第2小区)

ホウロク石(標Ⅱ-3)から王子神社に向う尾根と石楠大権現から北東に伸びる尾根(標Ⅱ-1)に挟まれた谷状地に設けたグリッドである。この地点には10m毎に4m²のグリッドを3箇所設定したが、いづれも堆積土層が厚い。第1層は黄褐色土層で耕土である。第2層は褐色土層であるが、茶褐色を呈する上層と暗褐色土層の下層に2分しうる。上層と下層の境目が不明瞭なものであることや土質が近似した粒状を示すことから合せて第2層として取り扱った。耕作の影響は第2層上層まで認め得る。第3層は黄褐色土混り灰褐色土で地表から約1mを測り、35cmの厚さを持つ。第4層には遺物は含まれていない。第5層は灰褐色土層で有機質の変化したものと考えられる汚れが全体に及んでいてこの土層の上部から須恵器片・土師器片(亀山焼系統の軟質なものも含む)・瓦器碗片・青磁片が出土する。

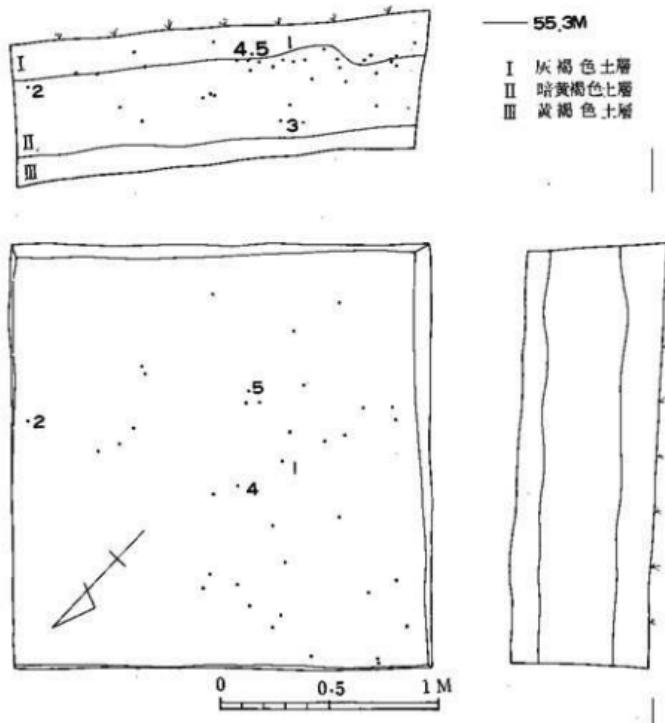
地表から約2m程掘り下げたが第5層の下辺は把えられず湧水が激しいためそれ以下の調査は断念した。

この谷状地に定めた調査区の土層はいづれも褐色系統の山砂土で全般に粒状が粗く、密度も粗く余りしまっていないので、尾根傾斜面からの堆積が容易に推定された。第5層土層に僅かではあるがまとまって出土した平安後期から鎌倉期にかけての土器群には青磁の細片も検出され注意を引くが、これ等遺物を含む土層がどのようにして形成されたかは明らかでない。

第4層灰褐色土層からは、須恵器片3・瓦器片1(2)・青磁片1・瓦質土器片1の出土が

みられたが、いづれも他所からの堆積でみるべきものは少ない。

須恵器片は壺成いは壺の体胸部の細片2片と鉢成いは盤の口縁部の細片1の3片で、体胸部の1片は灰白色を呈し、焼きの悪いものである。口縁部の細片は口縁端部で内外方向に鈍く肥厚するもので、外面とも器暎は横撫で調整をしていて外面には1cm前後の間隔に沈線が入り、その間帯は肉厚に肥厚している。口径はかなり大きいと推定される。瓦器片はいづれも細片であるため器形は明らかでないが高台の退化した指頭圧痕を多く認めるもので終末期のものと考えられる。No.13の細片の内面には水平方向の暗文が施されている。瓦質土器は外面格子目叩目、内面撫で整形で、外面は黒色を呈し、内面は暗い灰色を呈する。青磁片は2.5cm大の三角形の細片であるが碗である。口縁端部はなだらかに外反して外横に棱を持ち、上辺は丸味を持つ。口縁直下5mmあたりから外面には笠描きの浅い陰刻がやや左に傾いて施されているがその全容は明らかでない。舶載品であると推定される。



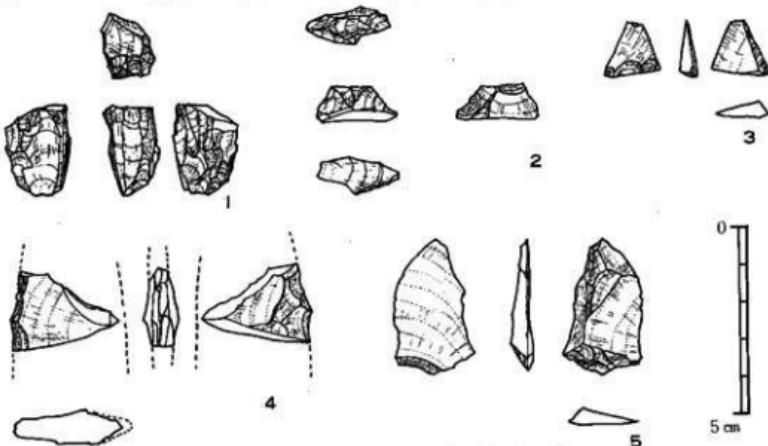
第3図 横II-3-C調査グリッド実測図

（iv） 標II-3-C（標石第II調査地区第3小区）

ホウロク石と通称される標高55m前後の稜線上平坦地の縁辺に定めたグリッドで、北東方向に僅かに傾斜していて、その先端mの地点で傾斜角度は急になり丘陵傾斜面に移る。畠地に開墾されているため地表から約20cm前後の表層は完全な擾乱層と考えられる。

第1層は20cm前後の厚さを持つ旧耕作土層で灰味がかった褐色を呈する粒状の比較的細い土壤である。第2層は30~35cmを測る花崗岩風化土層で、黄褐色を基調とするが暗褐色の小粒状の斑点が上層に多く、下層になるにつれて減少するかたちで認められる。第3層は第2層に認められた暗褐色の斑点がない黄褐色花崗岩風化土層である。第3層下は花崗岩地山である。第3層は地山の崩壊土層であると思われる。

遺物の大半は旧耕作土下層つまり第1層下層と第2層上層表面に密度を高くし、第2層上層、第2層下層とその量を減少させる。第3層以下には遺物は含まれない。遺物の出土総数は碎片まで数えて38点でその内訳は、細石核1、小形ブレイド1、不定型ナイフ形石器1、ポイント1、剝片15、碎片20とチャート碎片1である。



第4図 標II-3-C調査グリッド出土遺物実測図

細石核は平坦に調整された打面とマイクロブレイド剥離面との角度が70°前後を測るものである。打面円周は5cmで1.5cmの間に6条の櫛状剥離痕が認められ2cm程の目的物が得られたようで、階段状剥離のような剥離ミスのため捨て去られたものと考えられる。側面は下からと横面からの調整剥離が認められる。現状では打面長1.8cmを測り、得られた石刃長の方が長いのが特長である。細石器製作にはサヌカイトを母岩にしても玻璃質の密度の緻密な石材が使用されている。碎片の中には同質の小片が數点認められたが、細石器類は検出されなかった。小形ブレイドとしたものは、円盤状石核のような不定方向からの

剥離によって得られたエッジを有する 4 cm 足らずの剥片の基部に二次加工を施したものである。他の 1 片は宮田山型に入るものと考えられるが先端部が小片のため明らかでない。なお、この小片の断面はクサビ状の続いた三角形である。ポイントとしたものは鷲羽山遺跡調査略表にある D 項のものに類似するが小片であるため法量は明らかでない。

(e) 横 II - 3 - H

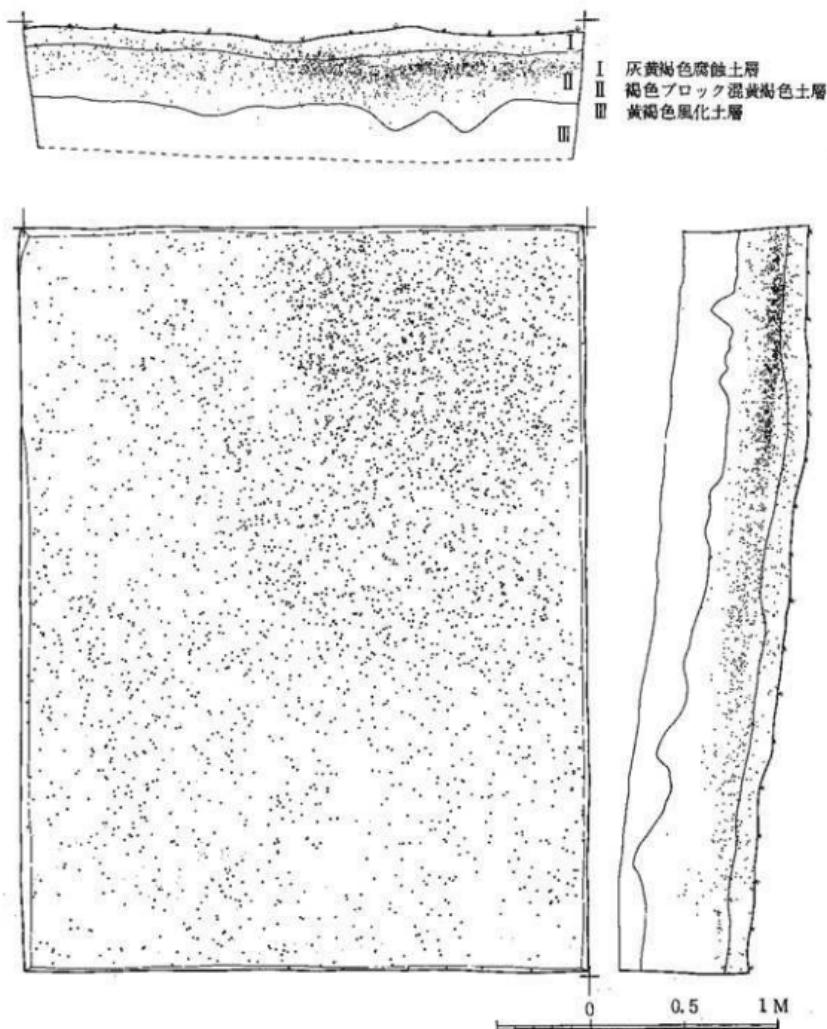
この調査グリッドはホウロク石と通称される岩塊の所在する丘陵状尾根の稜線上の平坦部に定めた $12m^2$ を発掘面積とするグリッドである。この地点は王子神社を経て宮崎に至る尾根を南に伸びて大浦浜背後に至る尾根の分歧する基部にあたり、東に僅かに内海を開いた至近距離に鷲羽山遺跡を望み、西には丸亀市本島ほか塩飽の島々や、岡山県笠岡市の島々を望む要地である。先述の横 II - 3 - C グリッドとは約 30 m 程の距離を持つ地点で、北から南へ緩く傾斜している。台帳上の記載は畠地とあるが現状は自然地形に近い傾斜を示す雑地である。グリッドは南北 4 m、東西 3 m の長方形で別記した横 II - 3 - 1、横 II - 3 - J に東西軸を延長している。

層位と遺物出土状況

この調査地区の層序は第 1 層、第 2 層、第 3 層の 3 層に分けることができる。第 1 層は表土層で約 15 cm を測り、粒状の非常に細かい腐蝕質の花崗岩風化土層で旧耕作土と見做される。第 2 層は上層部分では第 1 層と同質の旧耕作土層が認められるが、下層部では 2 mm 大の砂粒を含む花崗岩風化土層となり、花崗岩に含まれる鉄分が凝聚したものと考えられている暗褐色を呈する斑紋状の土塊が平面で 5 ~ 15 cm 大の円形状に、断面で 10 ~ 25 cm を測る縦長のブロック状に認められる。このブロック状の暗褐色土塊の分布は北半つまり高い方に少なく、中央部に多く南半よりに減少するかたちに密度の差が認められる。第 2 層上層は 10 ~ 15 cm、第 2 層下層は 15 ~ 25 cm の厚さを測る。暗褐色ブロック状土を含む第 2 層下層は硬く引きしまった土質である。第 3 層は第 2 層に認められた暗褐色ブロックが消失した段階から花崗岩盤の風化土の地山までの約 30 cm の厚さを測る花崗岩風化レキを含む砂粒の目立つ黄褐色で比較的軟質である。第 3 層の底面は地山と複雑に入り組んでいて、地山の風化土層であること明らかである。

遺物は、第 1 層、第 2 層上層、下層に認められるが、第 1 層と第 2 層上層の 1 部は旧耕作土層で、攪乱を受けていないのは第 2 層上層と下層に限られる。

遺物は大半がサヌカイト製品で、縦長剝片・翼状剝片・横長剝片・ナイフ形石器・小型ナイフ形石器・幾可学形石器・削器・彫器・ドリル・ポイント・細石刃・細石核再生剝片・石核が出土し、石質変化の大きいものが多くなったが、定型的な石器類は比較的風化が少なく、保存状態の良いものが多い。サヌカイト製品の他に、黒曜石製ナイフ・石刃・叩石、砂岩円礫焼石等が出土した。



第5図 標Ⅱ-3-H調査グリッド実測図

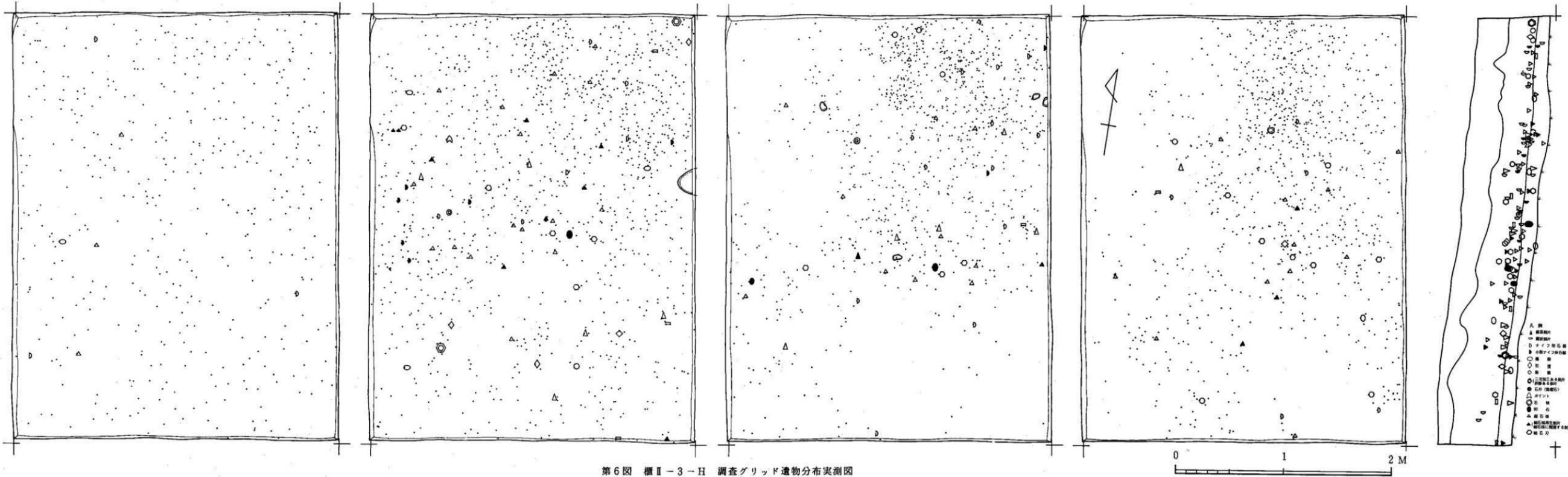
これ等の遺物の垂直分布状況は別表に示すとおりであるが、平面的な広がりは調査範囲が限られているため明らかではないが、層序ごとにその出土状況を説明する。第1層は剝片、細片に混ってナイフ形石器3、細石刃3。

削器1が検出されただけであったが250点を越える点数のサヌカイト片を検出した。第2層上層では、細石器製作にかかる遺物がグリッドの周辺を除いた全域から、ナイフ形石器は比較的散漫な形で北半寄りに、小型ナイフ形石器と一部の二次加工ある剝片は、北東隅部と南西隅部からグリッド西辺の中央部にかけて分布していた。縦長剝片はそれらの石器群と混在して検出された。第2層上層で検出された遺物総数は1,100点余りで、それ等の中には他に叩き石、削器、ドリル、黒曜石剝片ブレイド、ポイントが含まれている。第2層下層は便宜的に上層と下層に分けてその出土状況を説明したい。第2層下層上半を検出しはじめた頃から先述の暗褐色ブロックが検出され始めると同時にグリッドの遺物分布が北東隅に稠密で距離を隔てることにやや散漫になるという変化を示し出すのである。暗褐色ブロック塊は南東隅から北西隅にかけて散在の主流が認められる。遺物毎分布は、ナイフ形石器は北東部分に、小型ナイフ形石器もやはり北東隅部にナイフ形石器とともに検出され、細石器関係遺物はグリッドの中央部や南東寄りを中心とした分布状態で検出されるというまとまりを呈す興味深いものとなる。なお、出土遺物の総数は1,050点程である。第2層下層下半は暗褐色ブロックの下半部にあたるが遺物の分布状況は下層上半部と余り変化しないが、ナイフ形石器、小型ナイフ形石器の分布が散漫になる反面、細石核関係の遺物分布がまとまりを良くし、細石核が細石核形成にかかる自然面を残す角礫と細石核調整の剝片とともに出土するという良好な出土状況で検出された。第2層下層下半出土遺物の総数は1,000点余りである。

次に断面図と見合せながらその分布状況を総合すると以下の事が言い得る。第1層耕作土層および第2層上層に於いては種々多彩な石器群が相互に混合して、まとまりを欠く状態でグリッド全域に散漫に分布する。第2層の中位あたりから遺物の分布はまとまりを呈するようになり、ナイフ形石器もその極一部が南半に出土するだけで残りの大半は第3層無遺物層に密着して北東半に片寄って出土するようになる。一方、細石核、細石刃の分布はグリッド中央部、断面図によればナイフ形石器の分布域が終えると同時に非常にまとま

各層別の出土遺物

遺物 番号	石 英 鉄 鋸 片	紙 鋸 片	刷 鋸 片	テ イ フ ス 形 石 器	小 型 ナ イ フ 形 石 器	機 可 学 形 石 器	二 次 加 工 あ る 剝 片	削 器	刀 刃	鉄 刀 刃	印 刷 器	内 部 サ ス カ イ ト	石 材 サ ス カ イ ト 石	
I	1	2	2	2	2	2	2	1	1	13	3	59	176	262 1
II-上	2 - 7	3	7	4 - 2	7	3	1	3	1	5	2	33	16	140 889 1 4 1,118 5
II-下-1	1	5	2	13	4	5				3	2	8	13	81 911 2 9 1,044 4
II-下-2	1	2	1	6	1	4	1	1	6	3	26	11	48 884	6 905



第6図 案II-3-H 調査グリッド遺物分布実測図

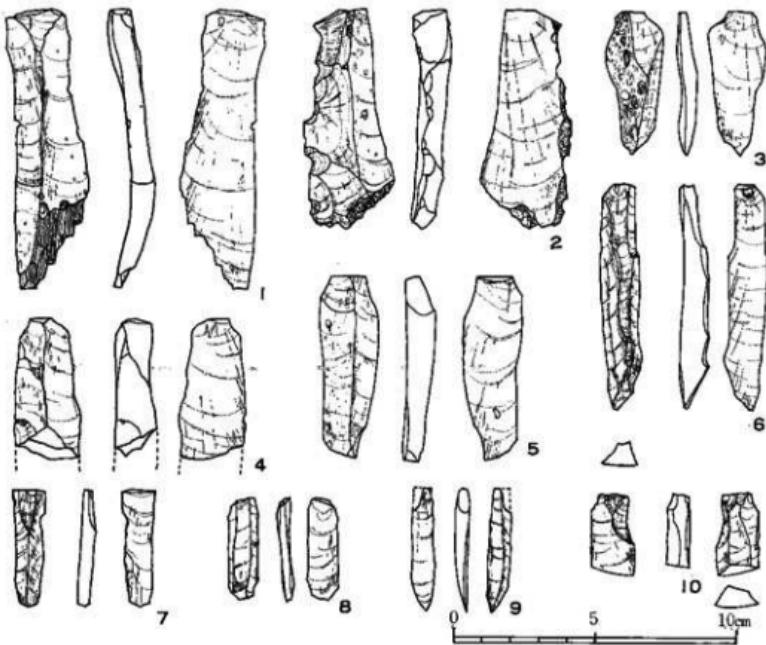
りよく出現し、地形の低い南東部ではその上部に逆転した形で僅かのナイフ形石器の分布を認めるようになる。またナイフ形石器は、國府型ナイフ・宮田山型ナイフに入るもの、井島I文化期に入る小型ナイフ形に大別され得るが、断面やその分布に於いては顕著な差を認めることはできない。ただ、小型ナイフ形石器は北東隅に前二者よりもやや狭い範囲に検出され、常にそれ等より上部に検出されていることから、細石刃技法関連のものとの中間的なレベルにあることは銘記しておかねばならない。

遺物の観察

縦長剝片（第7図） 縦長剝片は第2層を中心としてすべての層から出土した。長さ8cm前後の大型縦長剝片と6cm前後の中型品と4cm前後の小型品とに分けることができる。これら図示した縦長剝片は程度の差はあるがいづれもが1条から2条の平行する稜を持っており、断面が台形もしくは三角形を呈するものであり、石刀とすることができるもの（8・9・10）があり問題を孕んでいる。石質は朽木状の風化面が残るものと、虫喰状の風化面を残すものがあり、後者のものが風化が大きい。4は安山岩の一種であるが、結晶構造が粗いものである。図示した縦長剝片の打面はいづれも平坦打面である。これらの縦長剝片の長幅比は3前後で、图表化してみると大型～小型剝片のいづれもが一直線上に段階的に分布する興味ある結果を得た。これ等剝片のうち二次加工のあるものは2と10だけで2は主要剝片離面と直交する方向からの打ち込みがノッチ状に認められる。10は平坦打面部の隅から調整剝離が3ヶ所施され、彫器に加工されているものとも考えられる。6は長さ8cm・幅14cmを測る細長いもので、その断面は背高の台形を呈し、台形の平坦部分に4個の先行する剝離面を持つ。

翼状剝片（第9図、36・37・39・46） 翼状剝片として完全に図示し得たものは36・37だけで、他の10点近くは、折損していたり、他の石器（ナイフ形石器等）に加工されていたりするものである。36・37は長2cm・幅6cmを測るやや小さい部類に入るもので、36から37への加工工程を示している。37は打面側と側辺にプランティングを認めるもので、半折されて出土地点を異にして検出されたものである。39・46は、36・37よりも厚さ・大きさの点で優るものであるがともに破片である。36・37・39・46共に打点は同一でネガティブな面とポジティブな面が対称するが、36・37は打面の調整は無く二面の大剝離面の棱線上にあるのに對し39・46は細かい調整を施した打面である。翼状剝片はナイフ形石器にも認められ（國府型ナイフ）、別項で述べるナイフ形石器の中にも翼状剝片を素材としたものが認められる。また、図示することのできなかったのもかなりあるが、36・37のような整った例は少ない。

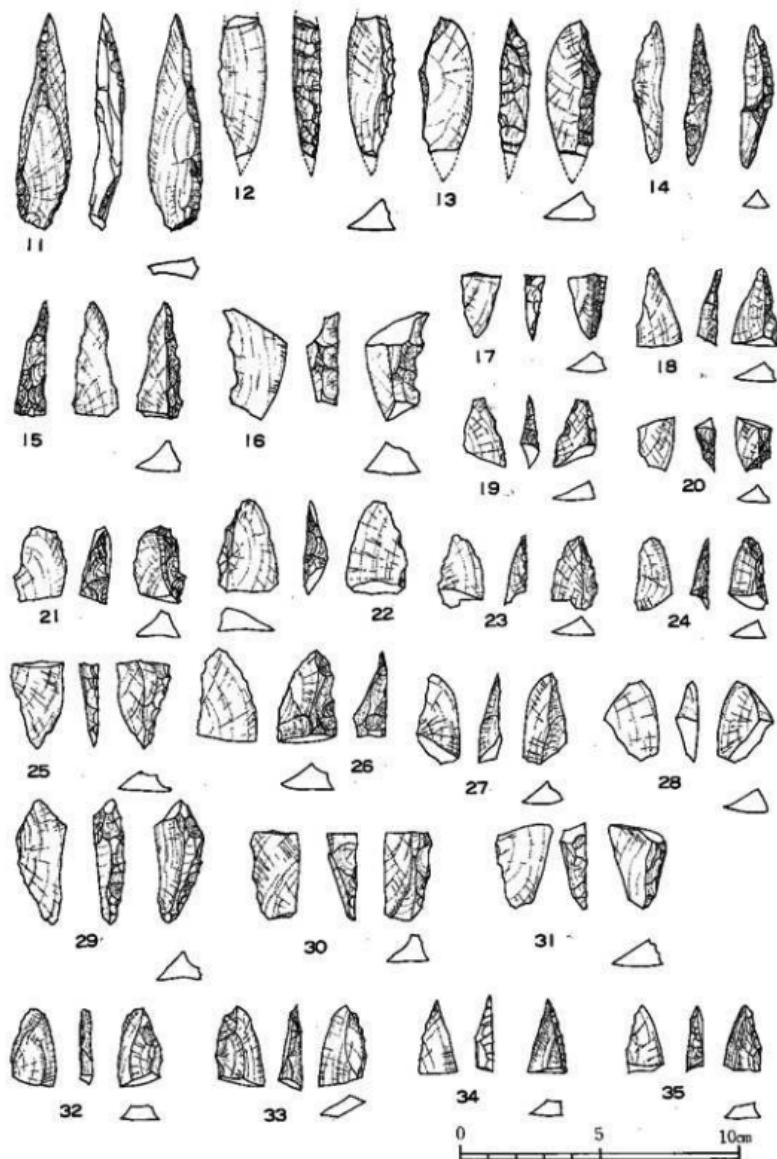
ナイフ形石器（第8図、第9図） ナイフ形石器と認められるものは36点出土したが、黒曜石小形石刀の背部をプランティングした小型ナイフを除いて他は全てサヌカイト製で



第7図 棚II-3-H調査グリッド出土遺物実測図-1

ある。しかし、それ等の形態は変化に富み完成品の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ の大きさに折れたものが多く全形が不明であるため分類に苦慮するが、国府型、宮田山型、井島I型と從来呼称されてきたものが主勢で縦長石刃を用いたナイフ形石器は黒曜石の小型ナイフを見るだけである。國府型ナイフは翼状剝片の打面部を取り去ったものとする説に対し翼状剝片の背面のネガティブな剝離面をも取り去り底面のみを残すものまでを含むという説が呈示された。原材から特定の石器を取り出すまでの体系に於いて最終段階の成形の際、素材として形成された翼状剝片をどの部分までトリミングするかによってI型～IV型までが呈示され、從来、宮田山型とされてきたものや、大型半月形石器とされてきたものが、國府型ナイフの範疇に包摂される可能性があるということである。

完形、もしくは完形に近い状態で出土したのは11・12・13・14・29と小型ナイフ9点にすぎない。11は長さ7.7cm、幅1.8cmを測る先端の鋭いもので、中央部の断面は五角形、先端部はやや肥厚して三角形に近い方形を呈し、ポイント状の用途が推定される。基部から中央へ $\frac{1}{6}$ 程と先端から中央への稜とかトリミングされている。重量は12gを測る。2は両端を夫々少しおくが、幅1.75cm・現存長5.1cm、断面二等辺三角形の紡錘形を呈するもので背



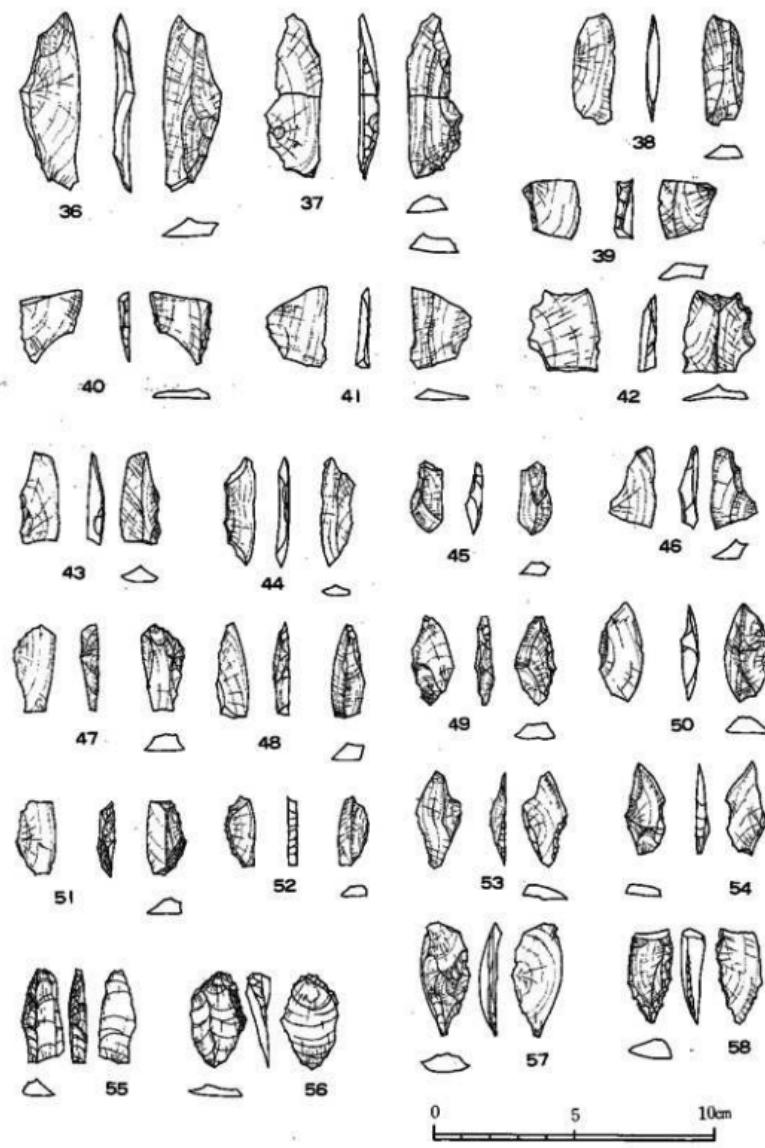
第8図 横Ⅱ-3-H調査グリッド出土遺物実測図-2

面のトリミングは鋸歯状である。13は12と同様の形状を示すが長幅比がやや小さく、刃部の彎曲が大きい。背部の加工はやや12よりおおまかである。14はやはり横剥ぎ剥片を使用したものであるが、縁辺は背面の階段状剥離痕のためくびれる。背部の二次加工は、主要剥離面と背面の両側から施されていて、基部近くの稜にもトリミングが認められる。長5cm・幅1cm、断面三角形の小型品である。宮田山遺跡等に出土例がある。29は先端部の4程を欠くもので、刃部は内彎している。背部の2辺と刃部の下端にかけて二次加工が認められるが、背面には4面の小さな先行する剥離面を残す。断面は三角形に近い方形で腹面が広い。65♀を測る。

15~28 30~35は完形のないし1/2に折損しているものであるが、その推定復原長は小さくとも4cmが最小で10cm以上になるものはまずなく、5~6cm大にその主体があるものと考えられる。断面は腹面の広い三角形かそれに近い方形のものが大半で、背面と腹面の打撃方向がほぼ同一であるものを摘出すれば先述の12・13・15・16・21・23・24・27・28・30・31が上げられ、打撃が対向するものとしては、17・19・25・26・29がある。また背面に鋸歯状の調整痕のないものとして27・28が摘出できる。しかし若干の程度の差が認められるとしてもこれ等のナイフ形石器は安定した横剥ぎ技法によって意図的に作出されたものと考えられる。

32~35は細部では多少の差は否めないが、長さと厚さの比率が2~3倍の範囲内に納まるもので背面にネガティブな剥離面と側縁に鋭い刃を持つもので翼状剥片を加工しているものと考えられ国府型ナイフと見做される。34はその典型で背面の打調は細かく丁寧である。

小型ナイフ形石器(第9図) 43・45・47~54は井島下層や鷺羽山遺跡、宮田山遺跡等備讃瀬戸の多くの遺跡に認められる石器類で、柳葉形・切出し形等幾可学形を呈するもので、小型横剥ナイフを中心としたもので井島I文化期として宮田山型に次ぐものとして編年されているものである。43は基部を欠くものであるが、これ等の内で最大の長さを持つ長32cm、幅14cmを測る断面三角形の柳葉形を呈するナイフ形石器である。45はペン先形を呈するもので、全周の約1/3に鋭い縁辺を持つ、長15cm・幅12cm、断面はひずんだ台形を呈する。基部と側縁の下半部にトリミングが施されている。47は背部が山形を為すように打調されたもので、先端部と縁辺に橢状剥離が認められ、彫器様の用途が意図されたものだろうか。48は43と同様柳葉形のものであるが、断面は肉厚の平行四辺形を為し、細部加工は背面の先端部に集中して行なわれている。49は菱形のもので、底辺の上半部を刃部にする。断面は鋭い合形状を呈し、長32cm・幅14cmを測る。背部の打影は粗い。51・52は半月形を呈するもので、51は52の大型品と考えられるもので背部の下半に朽木状の自然面を残すが打痕は切り取られている。52は長24cm・幅10cm・高0.35cmを測る。背部のトリミングは背面から打調するもので、弧状に細かく施され腹面の主要剥離面は狭くなっている。半月形細石器とすることができる。45・47~49・51・52は幾可学形に外觀を整えているが、それ



第9図 標Ⅱ-3-1調査グリッド出土遺物実測図-3

等の素材とされている剝片は横剥ぎ技法によるもので、半月形とした51・52はいづれも翼状剝片の剝離技術を残しているものと考えられる。53・54は2辺に加工を認める切り出し様の刃部を持つものでやはり横剥ぎ剝片を利用している。

55・56は黒曜石製品である。55は基部を欠くかほぼ原形に近いものと思われる。長32cm・幅12cm。断面が台形を呈する小型ブレイドの背をつぶした小型ナイフ形石器であるが、さらに1条の新たな槽状剝離が背部に施されている。56は石刃剝離痕を背面に2面持つ剝片の側縁の1辺を主要剝離面側からプランティングしたバックブレイドである。基部は厚く広い打面を残しているが、さらに細部をトリミングしている。刃縁の2辺ともに非常に細かい刃こぼれが認められる。

その他の石器(第9図、第10図)

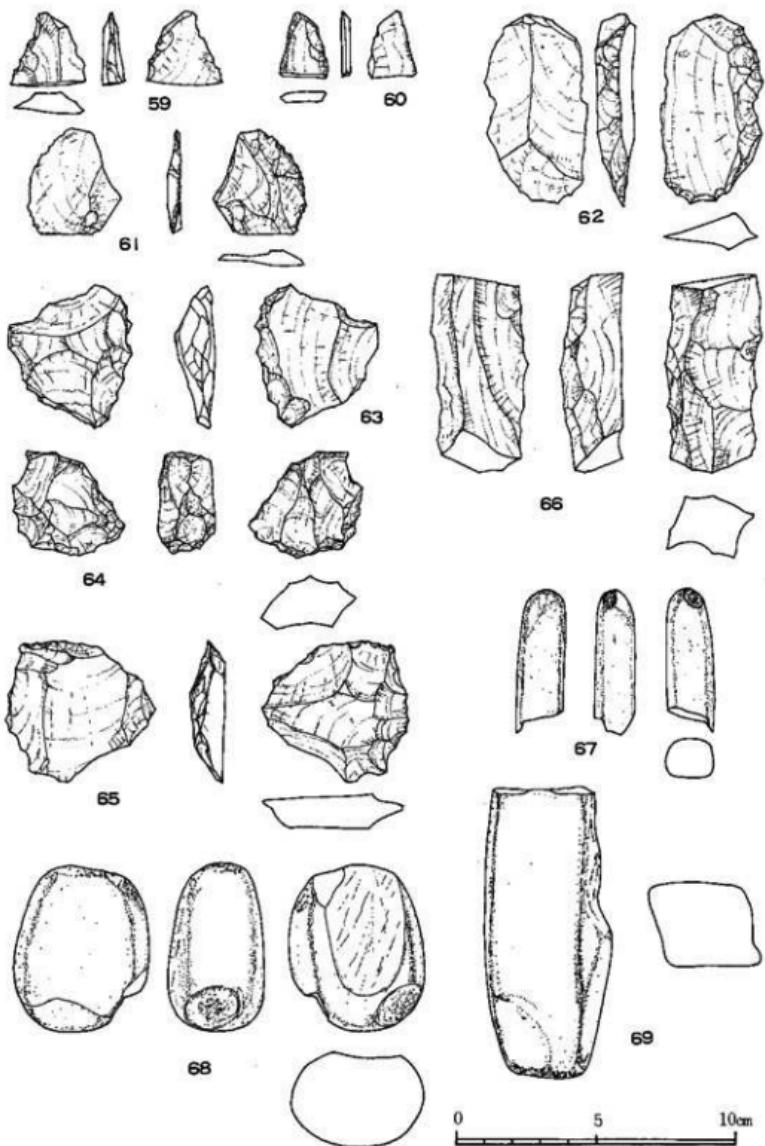
二次加工ある剝片 1部にトリミング等の二次加工を施した剝片は第1層から第2層下層まであまねく存在するが、38・40・41・42・44は剝片剝離方法に類似点があるもので、40は表側、41は打点側、42は打点側と先端部に細かい打調を認める。また44はナイフ状の形態に刃部を残して周辺が折取られている。41・42・44の鋭い縁辺には刃こぼれが認められる。

削器(61・62・63・65) 61は第1層耕作土中から検出されたもので、最大厚0.5cm・長4cmの非常に薄い削器で曲刀の部分と平坦な他の辺に微細なトリミングを認めるもので、玻璃質の緻密なサヌカイトを用いている。細石器と共に伴するものと思われる。62は第2層下層から検出されたもので、長6.7cm・幅3.5cm・厚1.1cmを測る。長側辺の1辺は鋭いエッヂを残していく1部に使用痕と思われる刃こぼれも認められナイフとしてもできるが、短辺の1方に丸く弧状に調整が施されていること等から削器とした。また側縁の中央部に深い抉りが施されている。63・65は円形削器でとともに第2層上層から検出された。63は玻璃質のサヌカイトを母材とした円盤形石核の1辺に背腹両面から調整を施したものである。65は石質変化の激しいもので63と同形同大で5cm前後の大きさであるが調整は片面だけに行なわれている。

彫器(59・60) 59・60は三角形を呈するように下部を折損するが左上方から斜めに槽状剝離が施されている。59の側縁は左右両辺とも調整が施されているが、60は1側縁のみに調整が認められる。いづれも横剥ぎ剝片を素材としている。

石錐(57・58) ともに第2層上層から検出されたもので、意識的に蝶番剝離状に剝離した横剥ぎ剝片の先端を丸く加工したもので断面は半円形を呈する。57は長41cm・幅1.8cmを測り打面側のみを調整している。58は長3.4cm・幅1.5cmを測るもので打面側、縁辺側両辺にくまなく調整が施され基部は折り取られて作られている。

石核(66・69) 66は長6.7cm・幅2.7cm・厚2.3cmを測る横剥ぎ剝片の石核で断面は菱形を呈す。実測図右面は調整打面で中央に稜線を為すように長側周辺から調整が施されている。



第10図 植II-3-H調査グリッド出土遺物実測図-4

左面の中央寄りの左寄りに稜線が認められ、左の主要剝離面は右面の主要剝離面と切り合っている。これ以上の剝離を続けることが出来ないため放棄されたものである。最終剝離痕は階段状剝離になっている左面の右側のものであろう。64は長4cm・最大幅4cm・厚2cmを測るずんぐりとした円形石核で剝離方向面はすべて周縁部から中央に向うものである。調整石核とすることができるが性格は明らかでない。

叩石(67・68・69) 67は長5cm・幅1.5cm・厚1.4cmを測る人差指大の細長い円礫を用いている。先端部の一点に使用痕が集中し、軽く打つもので重量は18.5gを測る。68は泥岩の円礫で、上下に打痕が認められるが下部の隅に集中的な打痕が認められる。69もやはり泥岩の長さ10cmを測る角柱状の転石で先端部に打痕を残すが、67・68程顕著でない。

細石刃、細石刃核、その他(第11・12図) 細石核は14点検出された。いづれも玻璃質のサヌカイトを原材としたものである。細石核は第2層上層に5点、第2層下層上半に3点、第2層下層下半に6点と散漫に出土したかのようであるが、その平面的分布を重ねると極めて特徴的な出土状況を呈する。グリッド中央部やや南東寄りの0.5m²にも満たない極めて狭い範囲のうちに6点が出土し、周辺に4点が散在的に出土した。そして、その側近や周辺から石核の母岩の残片と考えられる調整石核108・109・111・112・117等数片の細石核再生剝片や母岩から剥出されたものの目的にかなわず捨て去られたと考えられる加工の顕著な剝片113～116他20片近くと叩石68(これは第2層土層上半で細石核の中央部に明らかに共伴の状態)が限られた1点を取り囲むような状態で出土した。細石器製作の様々な遺物がグリッド中央部に集中的に検出されたのである。

細石核の形状はいくつかのバラエティがあり変化に富むが打面・側面・細石刃剝出面等の特徴から大まかに4類に分類することができる。

A類(97～99)

打面は長い多角形で周囲から丁寧に打調された調整打面であり、側面および細石刃剝離面の状態はともに円錐形で、打面部と細石刃剝出面の為す角度が65前後であるもので、97・98、やや特異なものであるが99もこのタイプに入る。97は細石刃剝離が短側面の両側から為されていて9条の槽状剝離痕を認める。打面は平坦でなく起伏が激しい。得られる石刃の長さは18mm・幅は4mmが最大である。98は打面が横長の5角形を呈し、やはり周囲から打面調整の為された石核である。細石刃剝出面は幅広い短側面に3条認められ打面全周の35%程度であるが、長側面の一方にも短い槽状剝離痕3条が認められる。これをも入れると55.2%になり97と外形ともに類似するものになる。右の側面には下部からの二次調整痕が数個認められる。この石核から得られる細石刃は長17mm・幅5.5mmのやや幅広の觀を呈するものである。99は打面長22mmに対して高さが著しく低いものであり得られる細石刃の大きさもすこぶる小さいものである。打面はやはり周囲から調整されている。

B類(98)

98一例のみで打面は広く平坦に近く打面形成の主要剝離面を多く残し周辺

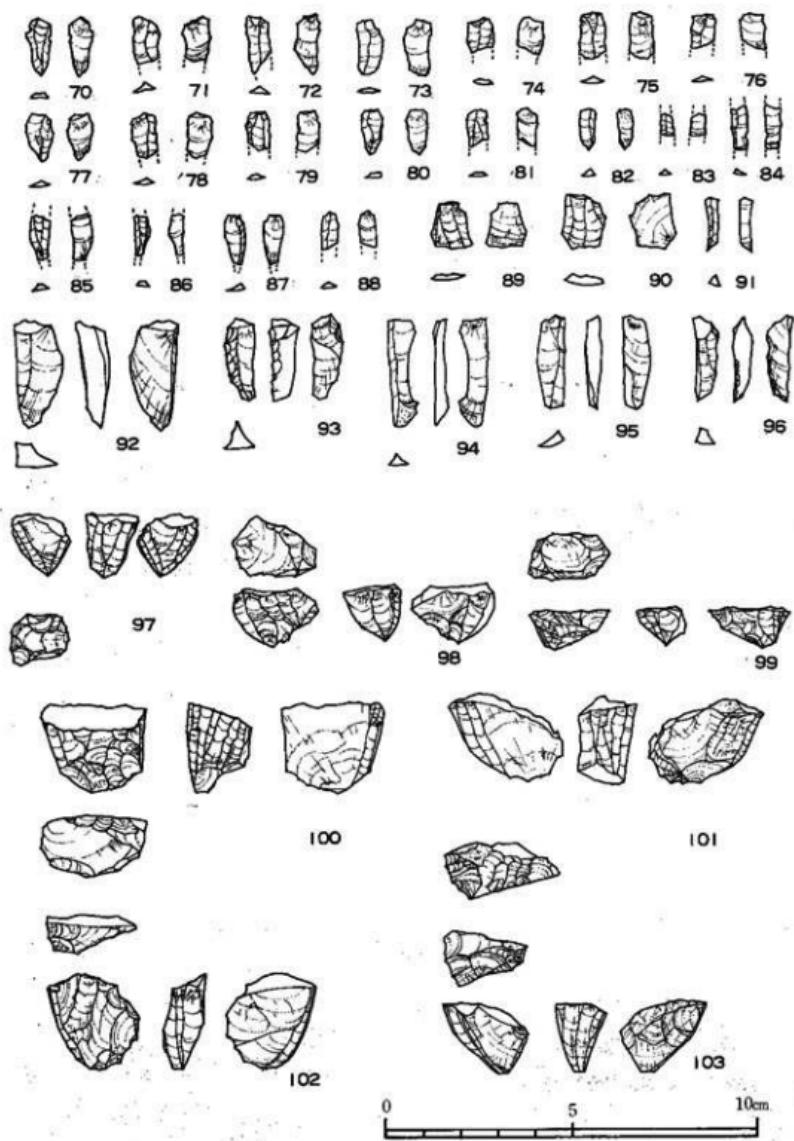
からの打面調整は全面積の30%にも及ばない。側面は半円筒形であるが、一方は下部から数回の二次調整を施してある。他方の側面は原石から石核を奪取した際の剥離面の一側で二次加工を認めない。細石刃剥出面は短剣縁の一方にのみ認められ不整な半円筒形を呈し、最終剝離痕は階段状剝離となっている。他方の短側面は角礫の自然面のままである。

C類(101・103・106) C類としたものは打面が変形した長五角形を呈するもので、その調整も石刃剥出面と長側面の片側だけから粗く打調された程度でA類ほど顕著ではない。101・103・106ともに細部での変化が多く全体を1くくりにするのは困難であるが、打面の形状と調整の在り方、石刃剥離角の近類性から1類型に分類したものである。101にはさらに別個の石刃剥出面が残されている。実測図の右面左下の部分に4条の短かい縦状剥離痕があり、左面の下部からの大剝離面を打面としたもので、A類の99に近い形状を呈する。103は石刃剥離面の傾きが検出された10点の細石核のうち最も大なものであり、石刃剥出面の在り方は石刃長とともにD類とするものに近似するものである。106は細石刃剥出のかなり進行したものであり、認められる3条の剥離痕はともに下半で階段状剝離になっている。長側面の一方には自然面を残す。

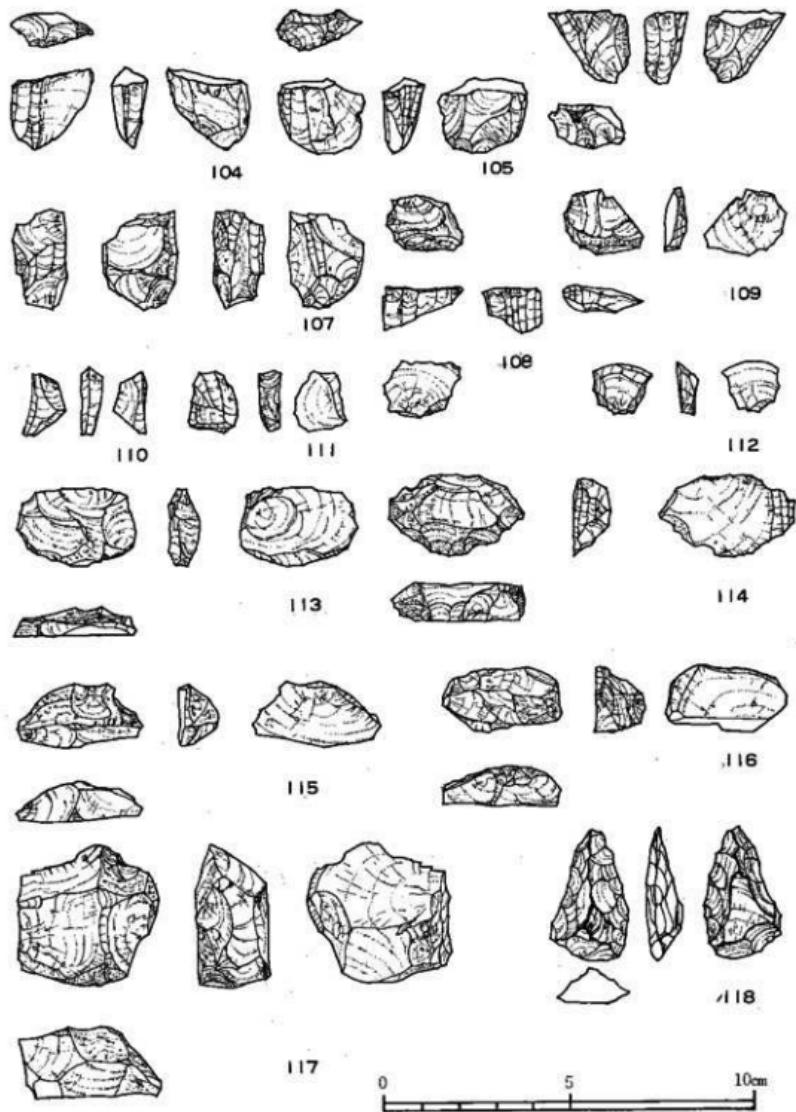
細石核の観察

項目 番号	打面長 mm	石刃長 mm	右刃削除 率	打面 今度 mm	石刃剥出 面長 mm	石刃剥出 面長/打面 今度率	打面と石刃 剥離面のひ ず角度*	打面上 丸味有無	打面調整 方法	長側面 形状	側面剝離 痕の位置 占合の百分比	面積 %
97 15	15	(13)	(5.4)	47	26 (13.5)	55.3	65	丸味有無	丁寧	円錐形	円錐形	3.2
98 23	23	17	6.3	58	32 (20+12)	55.2	65	偏円形	*	*	*	4.8
99 22	22	9	4	54	13	24.1	69	長円形	やや丁寧	*	*	2.0
100 29	29	22	6	78	20	25.6	70	偏円形	多く残す	半円錐形 (自然面を残す)	12.8	
101 32	32	19	5	74	15	20.3	65	偏円形	粗い	半舟底状	半円錐形	8.8
103 23	23	24	4	62	15	24.2	60	偏四角形	粗い平坦	長底合形	4.5	
106 21	21	22	3	52	12	23.1	60	偏五角形	*	(自然面) を残す	*	3.4
102 21	21	24	3	50	10	20.0	70	横形	*	*	横形	3.7
104 21	21	18	3	45	9	20.0	115	*	*	(自然面) を残す	*	3.4
105 23	23	17	5	55	14	25.5	85	*	*	(*)	*	3.7
108 23以上		6	以上	23	39.6	92	長円	やや粗い				
109 22以上		5	以上	22	37.9	75	*	自然面				

D類(102・104・105) Dタイプとした細石核の顕著な特徴は打面の作成と石刃剥出面に表れる。打面の調整は石刃剥出面と側面の一方の両面から行なわれるが粗く簡便なものである。打面の上面プランはいづれも楔形に形成されていてその先端は尖り気味である。石刃剥出面は打面と同様楔形を呈し、石刃の縦状剝離は全般に長く棱が整ったものになるが3条前後で多くとも5条を数えるだけで石刃剥出面の打点部分の長さは10mm前後の非常に狭いものとなり、打面全周の20~25%以内に納まる。側面の調整は簡易なもので上方から軽易な調整痕を認めるだけで、104のごとく自然礫の表面をそのまま側面とし



第11図 横II-3-H調査グリッド出土遺物実測図-5



第2図 横II-3-H調査グリッド出土遺物実測図-6

ているものさえある。側面の形態は船底形に近いものであり福井2・3層の細石核に類似する点がある。石核形成に於いて効率の高い製作体系の確立があったものと考えられる。

その他の細石核(107・110) 107は細石刃削出痕のような極状剥離痕が4条認められるものであるが、ともに実測図右面の水平方向からの石核再生のニュアンスの強い1回の打撃によって打点部分が除去されている。いづれにしても細石核調整の初期の段階に属するものと考えられ最終段階では106のタイプの石核になる可能性があると思われる。110は石刃削出面の長さ19mmを削る側面が台形状の残核であるが、打面はD類とした石核群のように傾きがあり、上面形が楔形を呈するものである。その他に図示出来なかったものも3点程あるがともに15mm前後を測る小石核である。

石核再生剝片(89・90・108・109・111・112) 石核再生剝片は図示したものの他に1例検出され7点を数えるが極状剥離面に対して水平に剥離されたものと側面から直交して打たれたものの2種類がある。108は打面全周58mm、石刃削出面23mmを測る円筒形もしくは半円錐形の細石核の上端部を側面から水平切りしたもので極状剥離痕を6条認める。109は打面部の全周58mmに対し5本の極状剥離痕を残すもので、石刃削出面の割合は37.9%でA類としたものに近い比率を得るが打面の調整は進んでおらず自然面を20%程度残す。現在する上面形は長円形である。108・109は標Ⅱ-3-H出土の細石核のうちではA類に近い形状を呈するが、打面上面形が長円形であることや石刃削出面と打面の角度が大きいこと等から、むしろ標Ⅱ-2-Cで出土した半円錐形の細石核と鑑りが深いと考えられる。111・112はともに極状剥離痕のある細石刃削出面に対して横方向から剥出されたものである。第11図、89・90は背面に3条ないし4条の極状剥離を数えるもので、89の腹面の剥離方向が極状剥離方向と同方向であるのに対し、90は斜下方からの剥離痕が認められるもので、89は細石刃の剥離ミスと考えられるが、後者は厚みもあり細石核再生剝片であり、細石刃削出面を再生したものと推定される。

細石核製作と関連する剝片(113~117) これらは別項で述べた細石核製作に関連するサヌカイト製剝片石核で、細石核作出の第1工程に於いて原石サヌカイト角礫から打ち出されたものである。117は長幅とともに4cm前後、厚2cmの角礫残片であるが実測図中央の調整された平坦面を打面として表裏の大剥離面が剥出され、次いで各方向からの剥離が為されている注目すべきものである。113・115・116はいづれも背面に自然面を残すものである。113・115はそれが剥出される以前の先行する不定方向の剥離痕が認められるものである。116は腹面の剥離作業によって作出された後、更に二次的加工が施されたものである。114はこの剝片の作出に先行する主要剥離面を背面の中央部に残すもので、さらに剝片剥出の腹面から背面の中央に向って同辺が二次加工されている。これ等の残片は細石核素材を1個のサヌカイト角礫から作出して行く過程を明らかにするための貴重な遺物で、他に顕著な剝片だけを取り出しても背面、腹面の主要剥離痕が平行するもの5片、

直交ないし斜交するもの4片、剝片作出後分割されているもの4片、分割の際に打ち剝がされたスパール2片、背面の全体を礫面とするもの4片が数え上げられる。また、107の例のごとき段階には達していないものの僅かの二次調整を加えるだけで、細石核となる資料が3点数えられる。

細石刃(70~96) 細石刃は50点余り出土した。石核や石核調整にかかる剝片の出土量からすれば、少なすぎる観がするが、充分な注意のもとで精査した結果である。これ等の細石刃は長12~25mm・幅25~7mm・厚1~25mmの中に入るもので、長15~20mm・幅4mm・厚15mm前後のものが標準的なサイズである。形状はやや不規則で、平行する棱と縁辺を持つものは数少なく、大半のものが断面三角形を呈し、2枚以上持つものは稀である。出土した細石刃の中で全形をとどめるものは図示した70・73・77・80・82・87だけでこれ等に共通する特徴は両側縁が平行せず長さが短く、先端部が急に幅狭くなるというところにあり、細石刃としては劣悪なものとすることもできる。折断されているものが大半であるが打面側を折断するものは少なく先端部を切断する例が多い。石材は玻璃質のサヌカイトである。

細石刃と関連する剝片(93~96) この欄II-3-Hグリッドより検出されたこの項でまとめている石器は細石刃よりは長・幅・厚のいずれを取っても2倍わり大きいものばかりであり、背面や腹面の一部に縫状剝離痕の他に別方向の小剝離痕を認める93・96、腹面が内弯する93・96という特徴が認められるものである。こうした特性を示す石器群は細石核から石刃を連続して剝離する前段階に於いて、その剝出面を整えるために意図的に打ち出されたものと考えられている。また、96のように二次的に微細な調整痕が認められることが多いため他の石器に転用されたと考えるむきもあるようだが、接合資料が得られない限り、可能性をあげておいて今後の調査に期待すべきである。92は玻璃質のサヌカイトを原材とするもので小石刃剝離に近い状態に剝離されたもので、或いは図版にだけ掲載した一群と関係あるものと考えることもできる。しかし、小石刃文化の存否は限られた範囲、この調査区だけからは断定的なことは言えないが、別項でふれた黒曜石製のナイフが小石刃を素材としていること等からこの種の石器が存する可能性があることを付記しておく。

ポイント(第12図、118) 変形気味の三角形を呈する長36cm・幅2.1cm・厚0.8cmを測り、断面が三角形に近いものである。同類のものは高知県不動岩屋洞発見の大型二等辺三角形石器として報告されているものと類似するが、その断面形が薄い杏仁形であるのに対して事例は肉厚のやや不整な三角形を呈する点で問題があるものの、石器とせずにポイントとしたものである。素材には流理の粗いサヌカイト片を用いて虫喰い状の自然面を僅かに残している。実測図右の主要剝離面を4程残すやや平坦な面と左側の山形に肥厚する面とともに左右の側面と底面から中央部に向けて行なう調整剝離によって細部が形成されているが、左面の方が剝離が緻密である。

ま と め

(1) 石器群の出土状況について

標Ⅱ-3 調査地点は櫛石島のはば中央部にあたる標高56m前後の花崗岩を母岩とする丘陵状尾根の基部に立地する。尾根の基部は幅約20m・長さ約40mの比較的広い平坦地形を有していて、ここからは櫛石島北端の「かいとく鼻」や「薺ノ巣」や標Ⅲ-2 調査区、さらに王子神社を経て宮崎鼻のいづれにも尾根づたいに容易に往来することができ要地である。

この調査地点では、10グリッド54m²の試掘調査を実施して、サヌカイトを原石とする縦長剝片・翼状剝片・横長剝片・ナイフ形石器・小型ナイフ形石器・幾可学形石器・小石刃・削器・彫器・石錐・ポイント・細石刃・細石核再生剝片・石核・細石核・性格不明の土器片が無数の剝片、碎片の中から検出された。また、他に二次加工の施された性格不明の石器片も数片認められた。標Ⅱ-3-H調査グリッドに於いてはこれ等の石器群の大半が重層して検出された。それ等の出土状況は先述したとおりであるが、資料の整理が進んでゆくにつれて、尾根上に立地することや畠地耕作のために旧石器時代の遺物・遺構の大半が破壊されていて、層位的な出土状況やまとまりのある分布状況は期待できないと半ば諦めていた想念が覆されていった。小範囲の調査に限られているためなお問題は残るもの、次のような層序と遺物分布状況をみた。

出土遺物の層位ごとの内訳は表示したとおりであるが、北から南西寄りに傾斜する地形を勘案してみると、畠作の遺物の搅乱は第2層下層以下には及んでおらず、地形が高いためにいくらかは深く掘り起こされた部分があるにせよ、この地点での遺物の分布は比較的良好な状態であるものと考えられ、ナイフ形石器と翼状剝片は第2層下層上半下半とともに出土したが、グリッド北東寄りにその分布の中心があり、小型ナイフ形石器（一部には美事な幾可学形に整形されたものもある）や小石刃とともに検出されたが、断面図に図示したとおり全体的にみればナイフ形石器・翼状剝片はそれより下位に第3層と密接して分布し、その数もはるかに多い。これら的一群に混じって縦長剝片・石核・縦長剝片・削器・彫器が検出された。小型ナイフ形石器は小石刃、二次加工ある剝片の一部とともにやはり第2層下層上半と第2層下層下半に出土した。第2層上層に於いては細石刃と混合した状況で検出されたが第2層下層に至ってはこれ等の石器は数少ないがやはり北東寄りに分布の中心を持ち、細石刃の出土が稀になり明らかに層序を分かち、むしろナイフ形石器に接触するような状況であった。細石刃関係遺物の出土は第2層上層ではグリッド北東半を除いて全域に分布するが第2層下層上半以下に於いてはその分布はグリッド中央東寄りに集中し、細石核・細石核再生剝片・細石核素材の分布が顕著となる。

第1層と第2層の一部の遺物出土状況は明らかに後世の搅乱であり、断面図からこの第1層と第2層の出土遺物を消去し、東北から東西に傾く地形を勘案して、第3層の上面の

ラインを投影すると、まとまりの良い出土状態が明らかになる。ナイフ形石器の分布域はグリッド北半に片寄り、その上面に密着して小型ナイフ形石器が重なり、さらにその上部に細石刃関係石器群が被さるという整然とした垂直分布状況が復原される。こうした分布状況は夫々の他の遺跡に於ける編年体系に矛盾することなく、整然としているばかりでなく、夫々特徴的な文化期のまとまりをユニットとして把え、各ユニット群が時期を隔てて重合していると考察することが出来る。また、普通こうしたユニットは数m前後の規模を持ち、限られた立地条件のもとに関連する他のユニットとともに特定のまとまりを示す状態で所在すると指摘されていることから、標II-3調査区一帯にはこうしたユニット群の存在が予期される。同じ島内の旧石器時代の遺跡の在り方と、関係を持つものか重大な問題が今後実施される本調査の課題として残されたのである。

(2) ナイフ形石器と縦長剝片などについて

断面が三角形を呈するナイフ形石器は從来宮田山型と名称され国府型ナイフに後続するものとされて来たのであるが、奈良県と大阪府にまたがる二上山の集中的な踏査等の新たな成果が蓄積され、宮田山型とされているもののうち、柳葉形を含し、鋭い縁刃を刃部とし、背部を打調したもの（紡錐形、半月形とも述べられる）は先項で触れたように、国府型ナイフの1タイプに入るものと考えられるのではないかという意見が提出された。また瀬戸内技法による石器群の出土する遺跡からは縦長剝片の出土例が多くナイフとして二次加工されているものが認められるという意見も出されている。本調査地に於いて第2層下層から翼状剝片折損品とナイフ形石器、縦長剝片が検出された。翼状剝片石核は出土しなかったものの第2層上層と第2層下層上半から縦長剝片の石核が夫々1点づつ検出され、その石核にみる剝片剥出痕が長3~4cm・幅1.3~2cmを測り、本遺跡出土の小型品がこれとほぼ同大であり、石目の構造と自然面の風化状況が類似することから、本遺跡に於いて縦長剝片が製作されたと考えられ翼状剝片など瀬戸内技法による石器とが共時に存する可能性が認められる。ナイフ形石器のうち背面にネガティブな剝離面を持つものは国府型ナイフの典型とされてきたもので本遺跡に於いても數こそ少ないが（全体の20%）、柳葉形のナイフ形石器と併出している。ナイフ形石器の項で述べたように長さ4~10cm大を測るそれ等の柳葉形を呈するナイフ形石器の内訳は①打点が対向するもの5点、②打面が同一線上にあるもの10点、③打面が背部にあるが必ずしも同一線上ではないもの2点、④打面が背面中にあるがリングの大きさの異なるもの1点、と4類に分類できるが、打面側から縁刃までを幅とし背部の厚さとを比較し幅/厚を取ると、b類のものは1.5~2倍のうちにその主体があるので対し、a類のものは1.5~2.5倍の間にばらつき、数少ないc類は2倍前後、1点しか出土しないd類は25倍となり、それらのいづれもが1.5~3倍の範囲に入るという結果を得、これ等の石器がかなり安定した制作技法に依るものと見為すことができる。打点の対向するもののうち内骨刃のものが「ふたがみ」に指摘があるように翼状剝

片の底面がネガティブなものであるとすればa群との関係が理解でき、また26のごとく底辺にあたる部分に3面以上の剥離面を持つものは底辺の再生が一度ならず実施された結果とすればやはりa群との関連が理解できa類の亜流とされ、まとまりのあるa類を国府型ナイフとすることが可能であるならばその他のものが、従来国府型ナイフとされてきたものと、新たに国府型としたa類とのうちに包摂されることになる。さらに従来国府型ナイフとしたものは背部のトリミングが紡錐形のものより少ないので自明の理と考えられ。厚みのある翼状剥片の底面部を残すだけに加工したものがa～d類のナイフ形石器を作成材とされたと考え。比較的薄く剥離することの出来た翼状剥片が本遺跡に於いては狭い意味の国府型ナイフに加工されたと考えることができる。

ここで先の項で横剥削片の石核とした石核66(第10図)が問題になるのであるが、この石核は先述したとおり最終剥離が階段状剥離となり廃棄されたものであるとともにこれ以上の剥片の採取は不可能である最終形態であり、その最終剥離面の法量が長24cm・幅7cmになり、本遺跡に於けるナイフ形石器の主体を占める石器群の法量と矛盾する点がなく、やや異形といった観を呈するこの石核をこれ等のナイフ形石器の石核と見做すことができる。この石核の形態的特徴をさらに細かく観察すれば、背面の中央の稜線部分は左右の側縁からする同規模のやや細かい剥離痕によって形成されたものであるが、自然面と考えられる一面を残していることに気付く。また、石核の短側辺はともに菱形に近い平行四辺形を呈するが、一方の短側辺は背面の稜線上から小口切りされている。さて、こうした石核を翼状剥片探出のための定型的な調整石核とができるか否かが問題となるのであるが「ふたがみ」によれば同一打面に2枚の翼状剥片剥離痕があるもの、相対する二辺から剥片が剥出されているもの、同一剥離面の上下から打撃している、錐向状の剥離痕が認められるもの、さらに打面転移の認められているものが特異な例として示されている。また、倉敷考古館研究集報4の「香川県坂出市櫛石島採集の石器」に図示された打面と剥離面が交替するもの、石核の上下両方向から剥取したものとされるやや不定型な石核や同集報6「鷲羽山採集の石器と土器」に図示される、同類型の石核がナイフ形石器の石核として示されている。本遺跡発見の石核がどのものと深く関連するかが問題であるが、全体的な印象や外形は同じ備讃瀬戸の鷲羽山、櫛石島の例の方に近似した外形を示すため、不定形横剥削石核とができる。しかし、本遺跡出土の石核は明らかに打面調整と考えられる同規模のやや小さい調整剥離を腹面の2個の大剥離痕の打点側に認めることが出来るため実見して比較した結果によるものではないが、やや不規則な他の備讃瀬戸の石核類よりは、より整えられた石核とすることが出来る。また、先に引用した「ふたがみ」の翼状剥離石核でも9cm前後の法量を測る小型の類型に入るもののうちにはかなり剥片剥離の進行したものは本例と類似した外形を呈するものがあり、それ等小型類型に入る一群との関連も全く否定されるものでなく、特に相対する2辺から剥片が剥離されるもの等や特異

な例等に於いては、備讃瀬戸の不定型石核とされてきたものとの類似性が高いものと言うこともできるのではないかと思われる。

瀬戸内技法をいま仮りに翼状剥片剝出の前段階に於ける盤状剥片作成、盤状剥片から翼状剥片石核の調整という段階までの広いものにその範囲の内包を拡大すると、翼状剥片石核と備讃瀬戸の不定型石核はかなり親近性を持つものとなるのではないか。つまり、同一線上に打点として剥片剝離が進行する典型的な瀬戸内技法と、それ以外に認められる変質的な剥片剝離の為されたものとの差位が残るだけである。二上山に於いては石核が未だ剥片剝離の充分可能な段階に於いて廃棄されていることが多いこと、盤状剥片の11~15cm大のやや大きいもののブランクが認められること、翼状剥片の類型に最大幅の長さに優る一群の存すること等の翼状剥片素材の盤状剥片や翼状剥片石核のバラエティと備讃瀬戸の諸遺跡に認められる不定型石核の中に問題がいまなお残されているように考えられる。

例えは、翼状剥片石核からの翼状剥片剝出がもはやこれ以上できない最終段階に達したものの形態、翼状剥片石核を翼状剥片から作出する過程に於ける半割および翼状剥片石核として選択される部位とその他の切り捨てが可能としてあること、翼状剥片石核から翼状剥片作出過程の中程に於いて打面の転回が可能として残ること等であり、これ等の可能性と、サヌカイト原産地に於ける素材となる大型剥片と石核の形状や出土状況と、それを搬出し使用する原石産地と距離を持つ一般的の遺跡に於けるそれ等の形状・出土状況は変化を持つのではないかという問題の相関をあげることができる。櫛石島・鷺羽山・宮田山・井島等備讃瀬戸に面する遺跡は、サヌカイトを産出する、国府台・坂出市金山・同城山等の遺跡と一定の隔たりを持っていて、それ等の問題を考慮に入れなければならない遺跡である。

概II-2-H出土の問題の石核がかなりまとまりのあるナイフ形石器の石核であることか正しいとすれば、この石核は、同質的なこれ等の石器を整然と剝出した石核であり、先述の翼状剥片石核の諸問題と考え合せれば、この石核を翼状剥片石核の最終段階のもので、もはやこれ以上剥片奪取が不可能であるまで、徹底的に剥片が剝出されたものであるとすることができる。そしてこれ等概II-2-H出土のナイフ形石器の主体を為す石器の断面が多少の差はあるがおおよそ三角形を呈し、4~6cm大の長さを測るといふまとまりのよいナイフ形石器の所在により、従来宮田山型とされて来たものと国府型ナイフとの隔離が取り除かれることになるのである。

断面形が菱形に近い平行四辺形を呈する本地点出土の石核と類似するものを先述の鷺羽山採集のものや同櫛石島内採集品の中にかなり見い出すことができることから、必ずしもこれ等の石核を不定型石核として宮田山型ナイフの全てを不定型としているのは問題で、少なくとも半円形(紡錘形・柳葉形)として分類されたものは定型的なナイフ形と/orすることができ、狭い意味の国府型ナイフとの親近性が強く、国府型ナイフを4類に分類する「

ふたがみ」の分類に従うならばこれをも国府型ナイフとすることが出来るのである。

ここで、本報告に於いてなお多くの問題の残ることは否めないが、広く瀬戸内技法のナイフ形石器とされるものを出土する2つの遺跡を対比して、国府型ナイフと、かなり変化に富む宮田山型ナイフの差は原産地を中心とした2つの分布域の地域差とすることが出来るのではないかという事を提案しておきたい。また、本地点に於いて定型的なまとまりを呈して出土したナイフ形石器の大半が既に折損して出土したことは、やはり他遺跡に於いて指摘されるように問題であり、意図的に折断が為され、その残部が遺跡外へ排出された可能性が大きいとの結果と指摘することもできる。1点ではあるが7.7cmを測り先端断面が三角形に近い方形を呈する横剥剝片の基部と先端に近い1部分をトリミングして成形された横剥剝ナイフ形石器は、他の半月形を呈するナイフ形石器とその性格が明らかに異なり、最近指摘されているようにナイフ状ポイントとすることが出来、東日本地域に於ける類似の加工の認められるものとの関連があると推測される。

(3) 細石核とそれに関連する問題について

本地点に於いて検出された細石核は、先述したように4類に分類できるが、さらに視点を変えることによって多くの問題が浮き彫りにされ、細石刃文化の類型や空間的、時間的問題と深く連絡するものであることが明らかになる。

打面の調整と細石核の外形との繋がりについてみると、調整のゆきとどいたA類のものは打面の側面観が円錐形、もしくは半円錐形を呈し、打面部は水平的であり、B類は打面調整こそ大まかであるが、その側面観はA類に余りかけ離れることのない半円錐形を呈し、打面部は同様に平坦で水平であり、C、D類とは大きく異っている。C、D類としたものについては同様の観点から観察を試みてみると、D類はいづれの打面も僅かな調整だけによるもので、その上面形は打面と剝離面の為す角度のバラつきにもかかわらず背幅の狭い楔形を為し、先端部に狭い側面を持つことは決してないのに對しC類は同様に打面調整が粗く上面形が楔形に近い形状を呈するものの、その楔形の先端部にあたる部分には短側面を有し、D類との間に若干の変化する点がある。しかし、C、D類の細石刃剝出面をみるとともに数少ない橋状剝離痕を認め、長側面の外形が舟底状を呈することや、打面全周に対する細石刃剝出面の打点部長の比率がいづれも $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{1}{4}$ の範囲にはば納まることなど類似点が多く、A、B類と大きく変化している。また、これ等の細石核の出土状況を比較すると、A類（B類を含めて）は細石核再生剝片、細石核の作成に關連する剝片類の分布は中心の長径70cm前後の長円形を呈する範囲内から出土したのに對し、D類・C類はその範囲内に重なるものも認められるが、南東、南西に飛散して検出されるという出土状況であり、A・B類がほぼ同一時期に於いて同一地点で細石刃を剝出している可能性を示すのに對し、C・D類はその可能性に疑いを持つことを否定するような在り方では出土しなかった。

以上指摘したような変化と同似性がA・B類、C・D類に観察されたのであるが、使用された石材、剥出された細石刃長（燧状剥離痕の長さ）に於いては余り変化することなく、ともに例外を除いて玻璃質の結晶の緻密なサヌカイトを用い、長17mm～24mmの範囲にはいるやや短い石刃を得たものとすることが出来る。サヌカイト角礫を素材とするところからくる石刃の長さに対する制約が厳然としたものであったことは否めない。

さて、こうして大略2類型、細分してA・B・C・Dの4類に分類することのできる細石核群と細石核再生剥片、細石核の祖型作出を作出する過程の剥片類との関連に於いて本地点の細石器文化をみてみると、検出されたいづれの細石核再生剥片もC・D類に入る可能性が少なく、A・B類型に属するものと判明する一方、やや詳細に紹介した細石核に関連する剥片類はむしろC・D類の細石核群と関係することが明らかになり両大類型の間に細石刃製作に於いて、かなり隔りのあることが判然となってくるのである。細石核再生剥片（108・109）は半円錐形を呈する細石核B類（100）に近似し、A類・B類が併存する遺跡の認められることから、B類の細石核からの細石刃奪取が進行する過程に於いて108・109のような打面に平行して打面を取り去った細石核再生剥片や90・111・112のような燧状剥離面を取り去った細石核再生剥片がそれぞれ必要に応じて除去されていく、A類のごとき小型の円錐形を呈する石核が最終的に残されることになるのではないかと推測される。一方細石核に関連する剥片としたものには側面形が舟底状を呈するC・D類と関連の深いものが数多くあげができる。これ等の剥片の種類は千差万別であるが、先述したような数類に簡約でき、それ等がかなり密接に関連していることが、接合例をみない現段階に於いても指摘できる。そこでやや早計であるが、C・D類の細石核の祖型の形成過程を復原すると次のようになる。

①、117にみるように玻璃質の径数cm前後のサヌカイト自然礫を原材に求め、不整形な突出部等を任意な方向から打ち取り、外観が球形に近いものを作り出す。②、面取りによって打撃面を得る場合とそうでない場合の差が考えられるが、117について復原すれば、全体の1/6前後の長さを横から水平切りして広い打面を形成する。③、この打面から厚さ1cm～1.5cm大的舌状の剥片を剥出する。この剥出は打面を反対側に転移して続行される。④、③の段階の後円礫は底面及び側面の一部に自然面を残す不整な多面体になるが、再度突起する部分を打ち欠き形を整え、前の①に於けるようにもはや自然面を多く残すものは認められなくなる。求める細石核の祖型の理念にかなう部位を選定し、その第2段階の多面体を打削する。⑤、不要な細部を打ち取り素材を調整する。⑥、打面を平坦に調整するがさほど丁寧に行うものではない。⑦、打削された残部がさらに意にかなうものであるときにはさらに周辺を切り最終段階の素材を形成する。大略の階梯を推定したが、③段階以後、異なる2方向への過程が展開されるが、得られる細石核はその側面形が舟底状を呈しその上面觀は概、楔形を呈するものが意図されているようである。⑧の段階によって得られた

舌状を呈する長円形に近い準備された礫の表面部から得た素材剥片は側辺の片面に自然面をかなり残し、裏面は剥離の際の1回の剥離面だけであることさえある。⑥、さらにこの剥片は半割され、打面が形成される。④段階以後に於ける石核形成に於いて、②で得た打面から③に於けると同様に輪切状に打ち出す場合と②の打面に平行するように次の剥離が行なわれる場合の2例があり、接合によらなければこれ以後の過程の推測は困難であるが以後⑤、⑥、⑦の階梯が踏まれるものと考えられる。

②の打面形成後、縦割に打割してそれをさらに上下に半割することによって得られた最終素材の打面部を調整して作り出されたものがD類、⑦のような段階を経て作出された細石核がC類であると考えられる。C・D類に於ける長側面や打面上面觀にみられる共通性はこのように同一素材から2種類の工程を経て同一時期に於いて作出された兄弟関係にあるという仮定によってかなり明解に理解でき、接合資料を得ない段階に於いてではあるが、こうした細石核の製作体系が考えられることを紹介しておきたい。さらに、このような製作体系によるC・D類の石核形成に於いてこそ先述した細石核スパールや細石核製作と関連する剥片の様々な形態が理解されることになるのである。なお、このような製作体系によって得られる細石核の数は1個の数cm大の自然礫から、少なくとも数個、多ければ10個以上が数えられ、驚異に値する製作技術としなければならない。

(4) 石器の編年的な問題について

(1)(2)(3)に於いて横石島中央部に位置する本地点によって明らかになった石器の出土状況やナイフ形石器・細石核製作の問題についてやや急な感はあるものの、気付かれる諸々の問題点を略述し、本遺跡の性格の一端を明らかにしたが、これ等の複合する各石器の編年上の問題と、分布地域の問題について気付いた点を記す。本地点に於いては縦長剥片・ナイフ形石器・小型ナイフ形石器(幾何学形に近いものを含めて)・小型石刃・円錐形ないし半円錐形細石核・半舟底状ないし舟底状細石核がまとまりを持つ状況で出土し、夫々の石器文化のユニットが重複して所在するのである。その他に、搔器・彫器・石錐・最古段階の土器を伴出する尖頭器、二次加工ある剥片等も出土し、それ等各期の石器文化との関連も問題になる。ナイフ形石器の編年は国府型から宮田山型、井島I型が人綱として立てられているようであるが、最近、国府型ナイフと宮田山型ナイフの編年上の問題について必ずしも前後関係にあるものではなくて、同時期にあるのではないかという意見が提出され、新たな波紋を呼んでいる。本地点に於いても翼状剥片と狭義の国府型ナイフとともに半月形(紡錘形)のナイフ形石器が検出されて其時態であることが明らかになり、さらにそれ等定型的ともいえる半月形のナイフ形石器の石核と瀬戸内技法の問題との絡みから、宮田山型とされて来たもののうち、この半月形の石器は「ふたがみ」にあるように国府型ナイフの一類型に含まれる可能性が大であると考察した。しかし、備讃瀬戸の諸遺跡の宮田山型ナイフの中の背部のトリミングのある石器についても、必ずしも底辺が大きな1回

だけの剥離によるものでないかなり不整形なナイフ形石器や、打調が主要剥離面の打点側のみならず、先端部、さらに刃部に及ぶものもあり問題は残るようである。例えば「香川県坂出市横石島採集の石器」や「鷲羽山採集の石器と土器」に於けるものの中にも井島I型の小型ナイフに相似する2辺にトリミングのある石器や切り出し状の石器・縦長剥片を素材とするもの等がむしろ主体と為すような状態で、不定型なる石核とともに出土している。仮りに(2)に於いて先述したようにそれ等の石器の大半が必ずしも不整形でなく、石核にも断面が菱形に近い平行四辺形のもののようにまとまりのあるものがあること等から、それ等を瀬戸内技法による国府型ナイフの一類型であるとしても、未だ問題が残るのである。大阪府に於ける調査に於いては、国府型ナイフと宮田山型ナイフ（塚原型とされる）の層位的序列は得られないが分布域は後者の例が2例と数少ないものの、かなり異なることが指摘されていること等から国府型ナイフと宮田山型ナイフが同時期のものであったとするにも問題があるのだが、本地点に於いては、国府型ナイフと從来宮田山型としていた半月形ナイフとの間に年代的な隔りを認めることは不可能であることを指摘し、むしろ地域的な変化であることと考えられることを記しておきたい。しかし、国府型ナイフとみなした本地点の半月形ナイフや本地点出土の国府型ナイフはともに3~6cm前後の小型品であるため、逆に国府型ナイフから宮田山型ナイフの変化を推考しうる余地もあり、即断を許さないような現状であるとも言える。

井島I型に属するナイフ形石器は国府型ナイフとした半月形（鉤錐形）ナイフの分布に重なるような状況で検出された。横II-3-Hに於いて小型ナイフ形石器としたものの中にはかなり整った菱形、半月形を呈する小形ナイフもみられる。これ等の幾何学形に近い石器文化の祖源が備讃瀬戸内部に求められるのか或いはそれ以上に広範な地域が求められなければならないのかが問題となるが数少ない出土例しかみない現段階に於いては何とも言いうが無い。その他の小型ナイフは小型柳葉形を為すものや切り出し状のもの、ベン先形のもの等があり概、井島I文化と同一であり、出土状態に於いて先述のナイフ形石器と密着するものの明らかに1時期に割ることが出来ると言ってさしつかえない。また、井島I文化期に入る石器群と国府型ナイフの一類型に入るとしたナイフ形石器の分布範囲の相重なることから、前者と後者の間に余り長期間の年代差を置くことはできないとしなければならない。

また第9図38・40・41・42・44に示した二次加工ある剥片は横剥片を切断したものと考えられ。トリミングなり切斷によって作出された背部の反対側の縁辺には使用による欠損と考えられる刃こぼれが認められる。これ等は備讃瀬戸の遺跡群からは未発見であるが、台形様石器としてさしつかえなく、九州諸地域（宮崎県船野、佐賀県馬渡島切立、長崎県堂崎、福岡県諸岡、長崎県百花台等）の遺跡群との深い関連が問題になる。ナイフ形石器から細石刃文化への変遷過程に於ける重大な問題点とされて、その伴出品や形状等について

の研究が進行しているが、本遺跡に於ける出土状況はナイフ形石器（国府型、井島型）との繋がりを示しているようであるが後者の文化期に属する可能性も否定し去ることも出来ない。用様にその組み合せが問題となる石器として黒曜石製の石刃を加工したナイフ（バックブレイド）と石刃の基部周辺をトリミングした石器がある。これ等は小形石刃とされているものを素材としていて、四国にはその产地の見い出せない黒曜石を石材としていることからも明らかに九州地域との関連が考えられる。百花台Ⅳ層文化や鹿児島県上場遺跡、熊本県石飛分校、佐賀県原等の文化層との関連が考えられ。長崎県福井7層や上場に認められる横剥ぎに近い剥片とも関連し、瀬戸内遺跡群の石器文化と九州諸地域の石器文化の細石器文化以前の深い繋りを台形様石器とともに示すのである。この黒曜石製の石刃と出土状況に於いて最も関連するのは、前掲の台形様石器とした二次加工ある剥片であるが、井島I文化にこの台形様石器を介して繋るものと考えられる。

削器・彫器および石錐はナイフ形石器の2類型のいづれかに属するものであるが、その分布状況からみるとそのいづれにも組み込むことが可能であるため、現段階に於いては判断を保留しておかざるを得ない。

ついで問題になるのは細石刃文化であるが、標II-3H調査地点に於いては、A～D類の4類の細石核が検出された。また、それ等とどのように関連するか明らかでない小型の細石核も検出された。從来備讃瀬戸に於いて紹介されている細石核の類型は玉野市出崎の半円錐形を呈する細石核、井島・鷲羽山の半舟底状の細石核（石刃剥出面は一辺のみ、或いは板状細石核と呼ばれるもの）、小形の不整型な細石核の三種類である。

A類は円錐形の外形を呈する細石核で2辺に打面全周の55%を占める網石刃剥離面を持ち、半円錐形を呈する出崎出土のものとはやや様相を異にする。むしろ九州地方の出土例や（野岳、原、唐津周辺遺跡）、はるか離れた中部地域の長野県矢出川遺跡のものに類似する。B類は長側面裏側が一回の剥離によるまで調整をみず、打面が平坦なもので打面調整痕は全体の1/4程の半円錐形を呈する石核で下部から長側面に対する調整が顕著である。福井4層と類似するが、同例のものは原。さらに矢出川に於いて見い出される。なお鷲羽山上層出土の板状細石核とも関連があるとも言えるが定かでない。C類は橢状剥離痕の少ないもので打面は下傾気味のもので、D類とも深い近親性を持つものである。類似する形態の石核は、板状細石核とされた備讃瀬戸の各地域の石核と類似するとともに九州（百花台、原、上場、門田、諸岡、唐津周辺遺跡）の半舟底形石核と呼ばれるものに酷似する。D類は準備された石核を縦割に分割してできる舌状の偏円形の素材を半割して製作されたもので、細石刃剥出面と打面全周の比が20～25%に入るものであり、福井2、3層に於けるに変らぬ整然とした技法によるもので細石刃剥出の効率の最も高いものと考えられる。

以上、A～D類の各細石核の類型を再述し、それ等と他遺跡に於ける細石刃文化との関連をみてきたのであるが、A～D類への変化は石核製作の単純化と、細石刃剥出の能率化

をその背後に感じさせるものがあり、それ等の変遷過程が他遺跡の層位的発掘事例によって推測されはするが、本調査地点に於いては相互に密接して重複した状況で出土したため明らかにすることは出来ない。ただ、円錐形および半円錐形を呈するA・B類と、半舟底状、舟底状を呈するC・D類は明らかに技法的な差が認められると共に、前二者の出土状況と後二者の出土状況が重合するにしても、相異なることによって若干の時期差を予測することも可能であるといい得る。また、從来半舟底状或いは板状の細石核とされたものとC・D類の類似性は、打面全周と石刃剥出面の比率やそれ等の外形に於いて明らかである。このように備讃瀬戸の1調査地点の細石器文化を考察するとき円錐形・半円錐形細石核と半舟底状・舟底状細石核の性格の差は、漸進的な文化の発達から説明されるよりも、むしろ外部からの強い影響によるものとする考察の妥当性を示すものであると考えられるのである。

以上のまとめによって必ずしも層位的出土状況を示した遺跡とすることはできないにしても、本調査地点に於ける石器時代の変遷を次のように示すことができる。縦長剣片、翼状剣片、國府型ナイフ（宮田山型ナイフとされていた小型半月形ナイフを含めて）➡井島I型ナイフ➡A・B類の細石核による細石刃文化、C・D類の細石核による細石刃文化。そしてこの変遷過程はさらに細分される可能性を本調査地点それ自体に於いて挙んでいること、井島I型ナイフに小石刃、台形様石器が伴なうことが指摘され。ナイフ形石器文化から、最終末の細石刃文化までの編年の大綱が認められる。また、各地の洞穴遺跡出土のポイントが最古の土器文化と深く関連することから、今後備讃瀬戸の旧石器時代遺跡の中から土器文化が検出される可能性が大きいことも指摘することが出来るのである。

今回の調査は瀬戸大橋架橋に伴なう埋蔵文化財の予備調査の一環として行なわれたもので、発掘面積が限定された小範囲に限られているため多くの問題点を残すのは事実である。今後、瀬戸大橋架橋工事も行なわれることや、工事に伴なう埋蔵文化財の本格的な調査を前にして概II-2-H地点の旧石器文化の様々な問題をとりまとめたものである。

6. 遺跡の範囲

・ホウロク石遺跡 1

石植大癡現の所在する標高 67.3m の稜線上平坦地からホウロク石周辺の比較的平坦な丘陵地に立地する。遺跡の面積は約 10,000 m² で、ホウロク石周辺に特に濃密な分布が確認され、旧石器製作遺跡としての可能性が高いと考えられる。またホウロク石から宝珠寺を経て櫛石小学校に向う低丘陵状尾根にもサヌカイト片が認められ注意を要する。

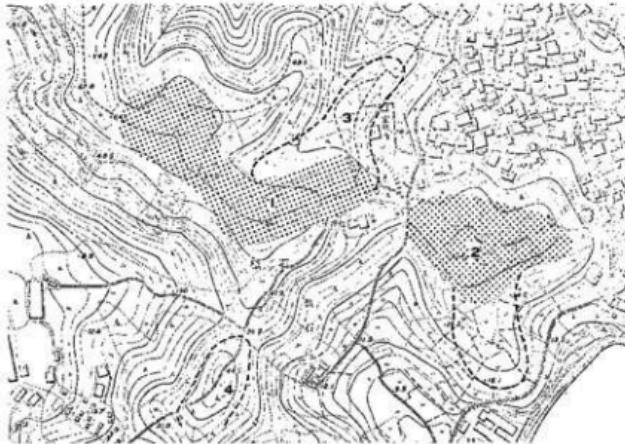
・王子神社東遺跡 2

王子神社と 1 つ鞍部を隔てた標高 35.1m を最高所とするなだらかな低丘陵の平坦地に立地し、約 10,000 m² の広まりを持つ遺跡である。ホウロク石周辺と同様最高所周辺には多量のサヌカイト片の散布が認められ、やはり旧石器製作遺跡の可能性が高い。またこの遺跡から南方に伸びる低丘陵状尾根にもサヌカイト片の散布が認められる。

・その他

宝珠寺背後のホウロク石北裾の谷状部は表土下数 m 以上が流土による埋積谷であるが、その堆積土層中に平安期と思われる遺物包含層が埋蔵されているところから、この谷状地のいづれかに当時の遺構の所在が予測される。 3

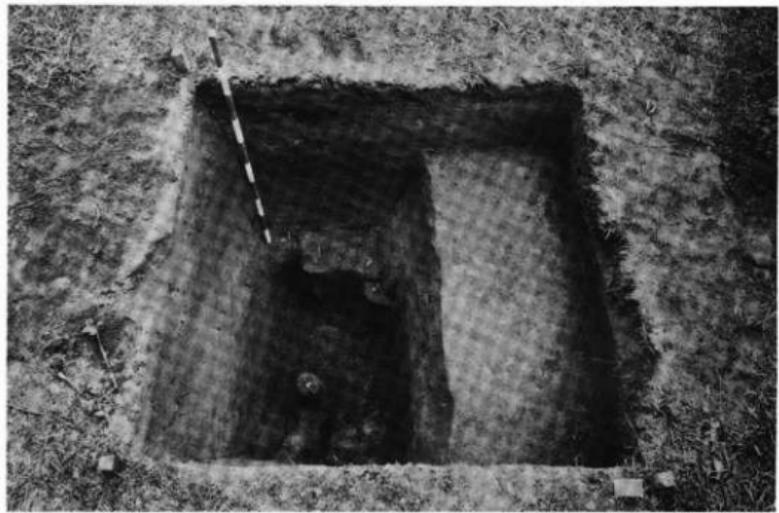
また、ホウロク石遺跡の南方約 300m の地点は標高 45m 前後の丘陵高所であり、比較的平坦部も広く東に第Ⅲ調査地区の第 1 小区、南に第 2 小区が続き、各々に旧石器包蔵が確認されているため注意を要する箇所である。また、この高所北西部には方形壇状に築かれた社が所在する。 4



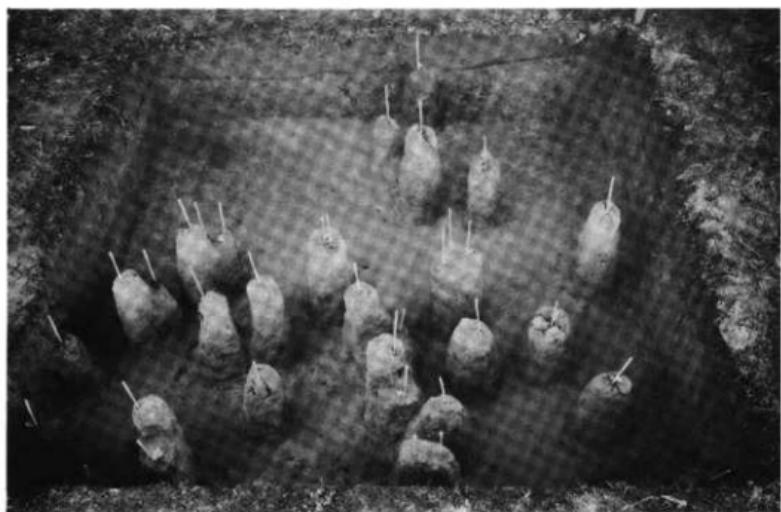
第13図 櫛石島第2調査区の遺跡の範囲



(1) 横Ⅱ-1-D調査グリッド(北より)



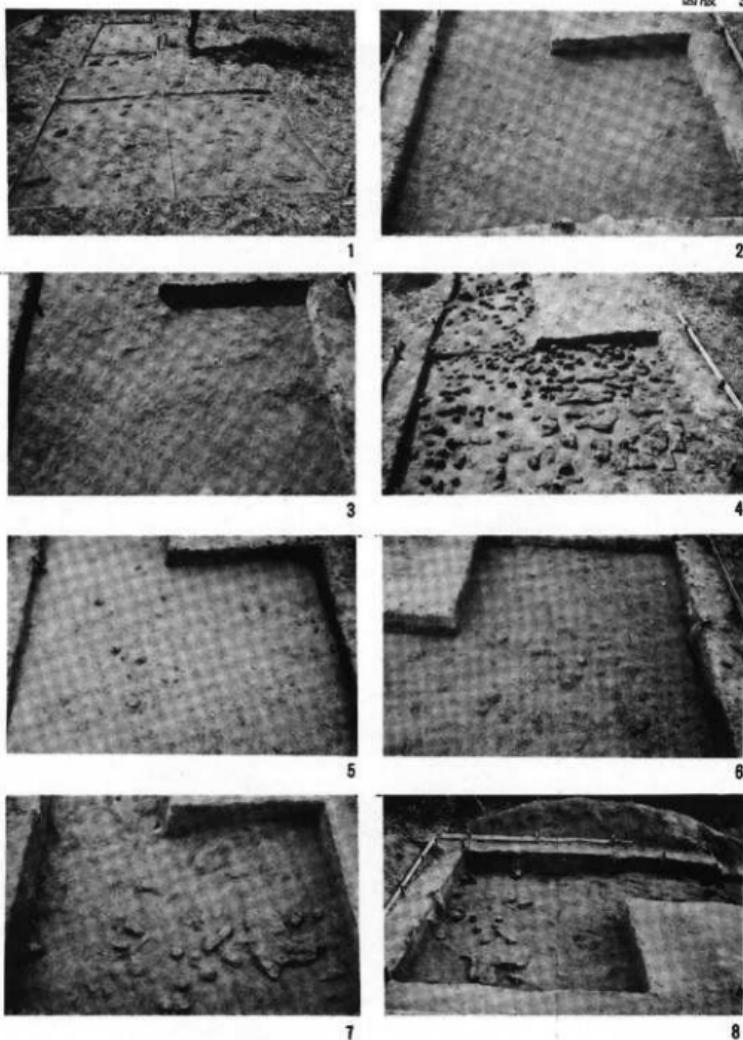
(2) 横Ⅱ-2-A調査グリッド(西より)



(1) 横II-3-C調査グリッド

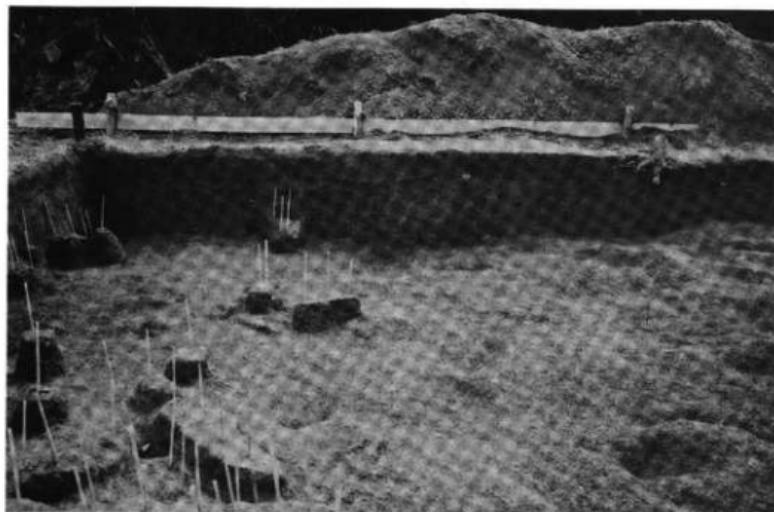


(2) 横II-3 調査区発掘前景



1 第1層遺物分布状況 2.3.4 第2層遺物分布状況 5.6.7.8 第2層下層遺物分布状況

柵II-3-H調査グリッド



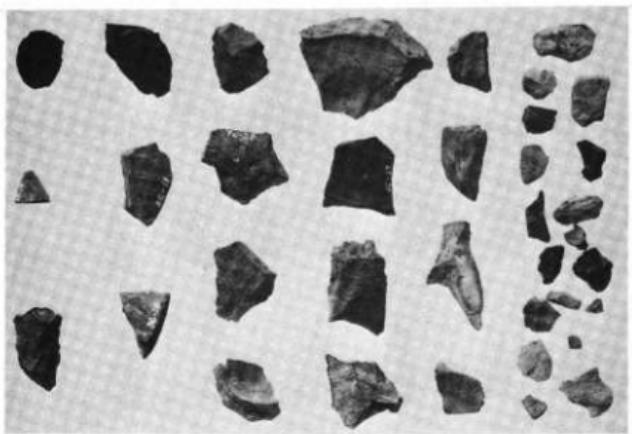
(1) 横II-3-H第2層下層(北から)



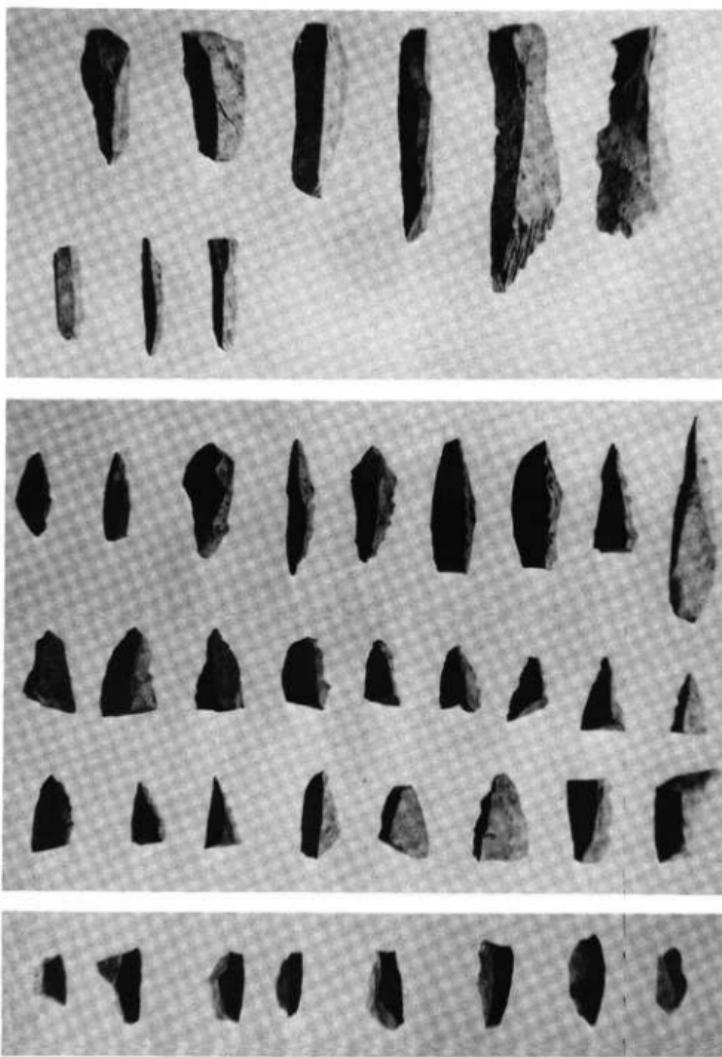
(2) 横II-3-Hグリッド全景 対岸は駿羽山遺跡



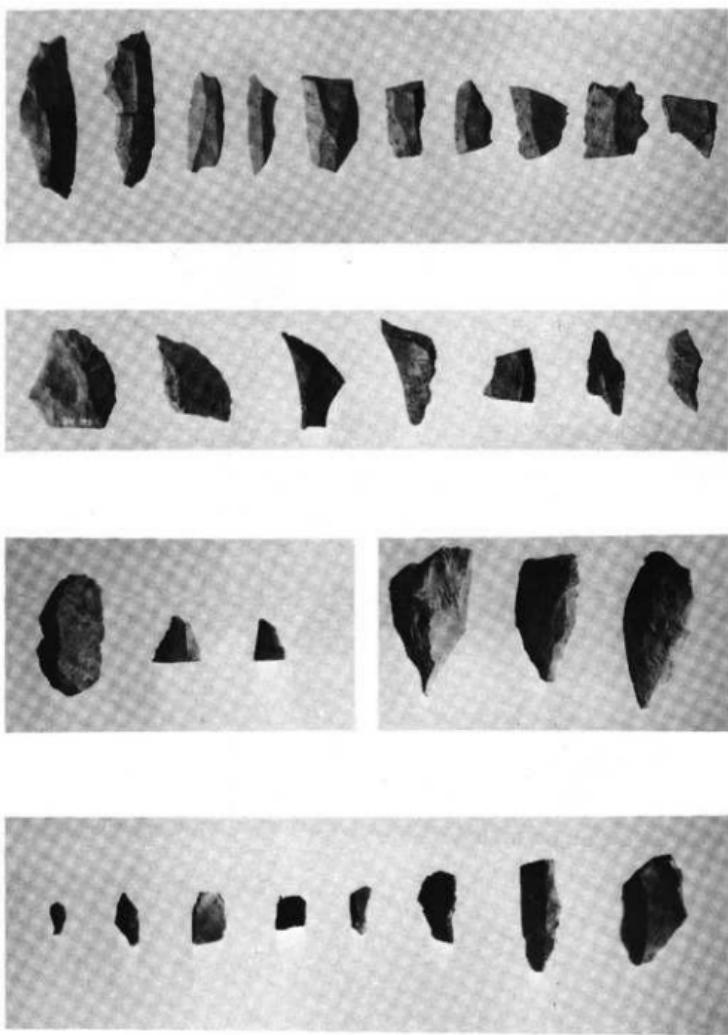
(1) 横II-2-Aグリッド出土遺物



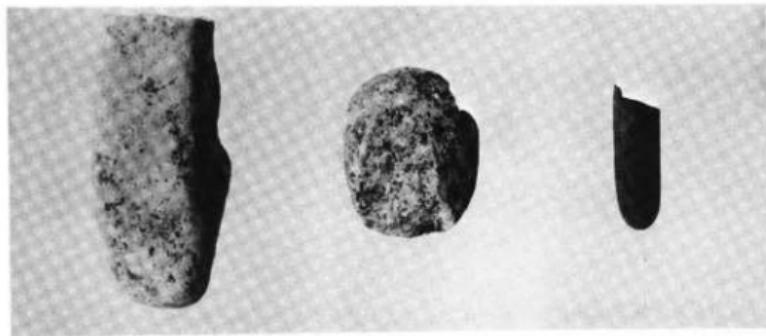
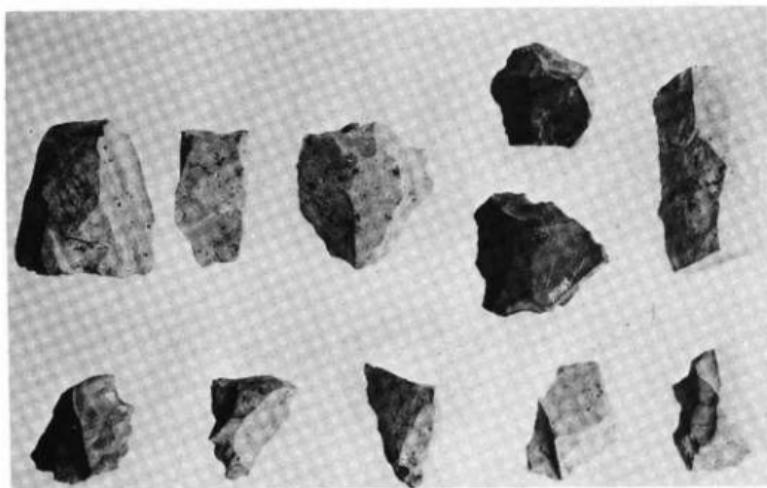
(2) 横II-3-Cグリッド出土遺物



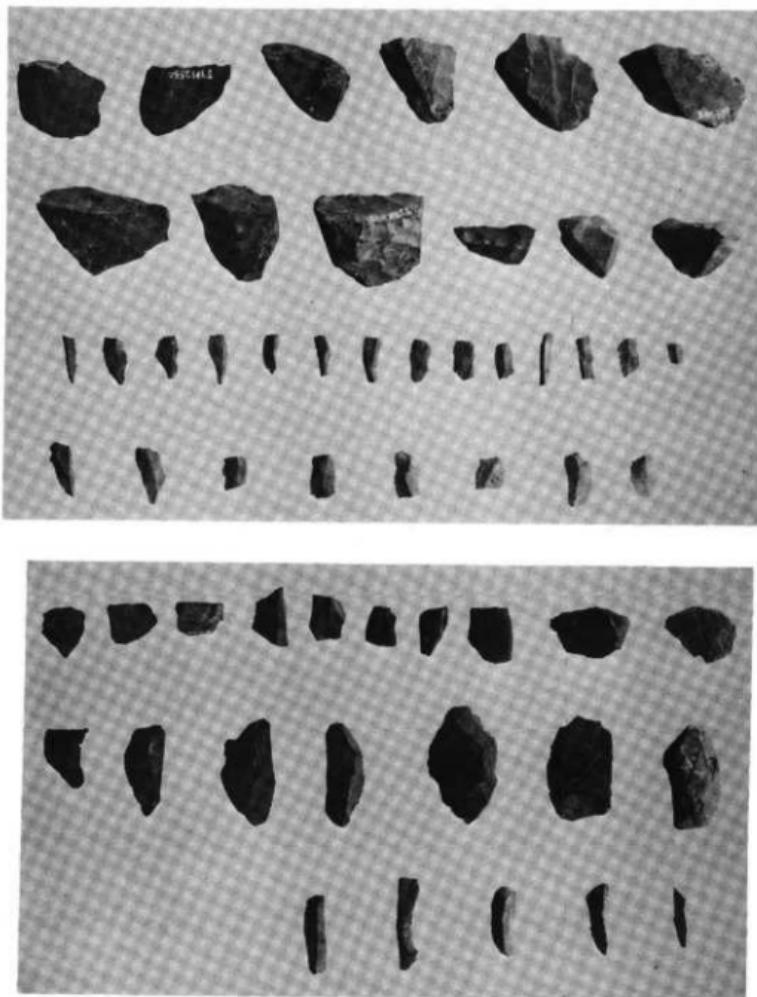
図版 6 - Hグリッド出土遺物 - 1



概 II - 3 - H グリッド出土遺物 - 2



櫛II-3-Hグリッド出土遺物-3



図版 9 - Hグリッド出土遺物 - 4

櫛石島第Ⅲ一北調査区（大浦浜）

目 次

1. 立地	85
2. 調査の経過	85
3. 調査地区の設定	87
4. 調査の概要	89
5. 主たる調査区	92
(1) 櫛Ⅲ-1-K	
(2) 櫛Ⅲ-2-C-E-F	
(3) 櫛Ⅲ-5-B	
(4) 櫛Ⅲ-6-C	
(5) 櫛Ⅲ-8-A	
(6) 櫛Ⅲ-9-A	
6. 遺跡の範囲	115

插 図 目 次

第1図	櫛石島第3調査区位置図
第2図	櫛Ⅲ-1-K調査グリッド実測図
第3図	櫛Ⅲ-1-K調査グリッド出土遺物実測図
第4図	櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド実測図
第5図	櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド出土遺物実測図-1
第6図	櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド出土遺物実測図-2
第7図	櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド出土遺物実測図-3
第8図	櫛Ⅲ-5-B調査グリッド実測図
第9図	櫛Ⅲ-5-B調査グリッド出土遺物実測図
第10図	櫛Ⅲ-6-C調査グリッド実測図
第11図	櫛Ⅲ-8-A調査グリッド実測図
第12図	櫛Ⅲ-8-A調査グリッド出土遺物実測図
第13図	櫛Ⅲ-9調査グリッド実測図
第14図	櫛Ⅲ-9調査グリッド遺構実測図
(1)	縄文時代十坂状格子込み実測図
(2)	土器棺実測図

第15図 櫛Ⅲ-9石鏡

第16図 櫛Ⅲ-9調査グリッド出土遺物実測図-1

第17図 櫛Ⅲ-9調査グリッド出土遺物実測図-2

第18図 櫛石島第3調査区の遺跡の範囲

図 版 目 次

図版1	(1) 櫛石島第3調査地区全景（大浦浜）……………117
	(2) 櫛Ⅲ-1調査区全景
図版2	(1) 櫛Ⅲ-1-K調査グリッド（西から）……………118
	(2) 櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド-1（西から）
図版3	(1) 櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド-2（西から）…119
	(2) 櫛Ⅲ-5-B調査グリッド（西から）
図版4	(1) 櫛Ⅲ-6-C調査グリッド断面図（東から）…120
	(2) 櫛Ⅲ-8-A調査グリッド（西から）
図版5	櫛Ⅲ-9調査グリッド各景……………121
図版6	(1) 櫛Ⅲ-1-K調査グリッド出土遺物……………122
	(2) 櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド出土遺物-1
図版7	(1) 櫛Ⅲ-2-C-E-F調査グリッド出土遺物-2…123
	(2) 櫛Ⅲ-5-B調査グリッド出土遺物
図版8	櫛Ⅲ-8-A調査グリッド出土遺物（縄文式土器）…124
図版9	櫛Ⅲ-9調査グリッド出土遺物-1……………125
図版10	櫛Ⅲ-9調査グリッド土器棺を構成する土器……126

大浦浜地区

1. 立地

横石島第Ⅲ調査地区の大浦浜地域は横石島東岸に発達した大浦浜浜堤部とその後背湿地、および、それ等を取り囲む低丘陵といった変化に富む地形を呈する。

大浦浜は約1kmを測る南北に弧状に広がる遠浅の砂浜であるが、その中央部約300mは浜堤状の地形を呈し、その背後に後背湿地を形成する。この浜堤部の一部は大正末期頃のガラス製造原材採取のため削り取られているが、南基部の「たてわ」から「すか」とよばれる中央部にかけて2mの等高線に沿って明瞭な高まりを残している。また横石中学校から「すか」までは明らかな浜堤部は認められず、むしろ、背後の山裾傾斜面からつづく緩やかな傾斜を示す平坦地となっているものと同じく標高2mの等高線をたどると「すか」と呼ばれる中央部の浜堤に接続することが理解される。横石中学校から「かりもし」「すか」「たてわ」にかけてのこの浜堤部一帯には、おびただしい量の師楽式土器の散乱とともに縄文時代から歴史時代にかけての各種の遺物の散布が認められ、浜堤部の生成とともに連続とこの地に生活を営んだ先人の足跡が求められる。

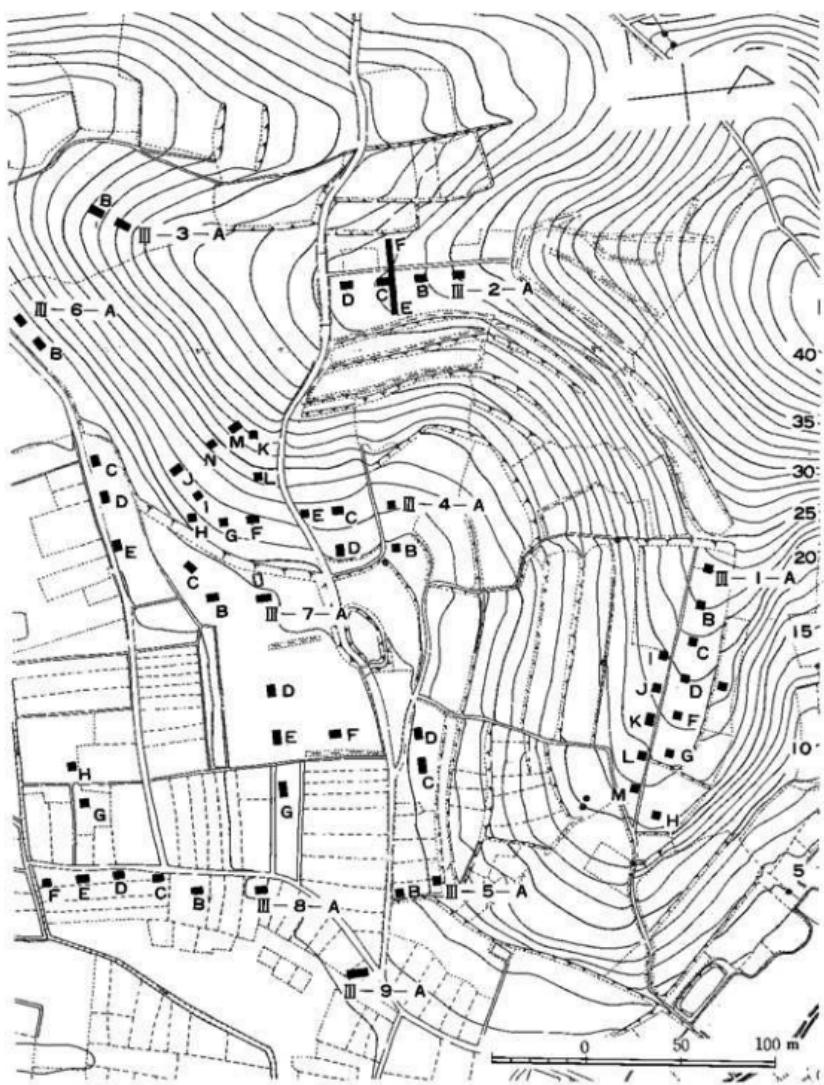
大浦浜浜堤部背後の平地は現在畑地に使用されているが、一度降雨すれば水浸しの状態になる低湿地で、低地奥部の溜池から大浦浜防波堤に抜ける水路の縁辺は常に水はけが悪く畑地の溝などには水溜りが認められる劣悪な土地条件である。後背湿地が畑地に利用され始めたのはさほど古い時代に遡るものではないと考えられる。浜堤部に近接する部分と丘陵裾部には中世土器片、サヌカイト片などの散布が認められるが、低湿地中央部には遺物の散布は認められないこともそのことを暗示していると思われる。

大浦浜地区の丘陵部は大浦浜背後の低湿地を三方から取り囲むように連続する北半の丘陵部はいづれも標高44.5mの高所から派生する尾根状地からなるが、南の丘陵は関ノ浦に通じる標高6.2mの峠を隔てている。これ等の低丘陵地のうち大浦浜に突出する尾根状地には旧石器の散布が知られる。

2. 調査の経過

- 10月 10月中旬にホウロク石地区（横Ⅱ）の調査に平行して発掘地区の下見分を行ない、横Ⅲ-1～横Ⅲ-9まで9調査小区を設定し、調査計画を立案して、10月25日に関係各位に出席を求め調査計画を説明し、承諾を得、翌10月26日から調査を開始した。10月26日～10月30日に大浦浜各区の座標を定め、各小区の杭打ちを行なう。調査面積は327m²である。

- 11月 横Ⅲ-1, Ⅲ-2, Ⅲ-4, Ⅲ-5, Ⅲ-8, Ⅲ-9の各調査小区の調査を実



第1図 檻石島第3調査区位置図

施した。III-1 地区は櫛石中学校背後の東西に伸びる低丘陵地で、13グリッド54m²の調査を実施し、調査区の東半部、つまり丘陵先端のグリッドに多くのサヌカイト片を得た。III-2 地区の調査はIII-4、III-5 地区の調査に平行して実施し、12月6日に終了した。6グリッド54m²の調査範囲全域にサヌカイト片の出土をみた。III-4、III-5 は大浦浜背後の緩傾斜面に設定した調査小区であるが、畠地に開墾されているためか顯著な遺物、遺構は検出されなかった。III-8、III-9 は大浦浜浜堤部に隣接する地所に定めた調査小区で湧水の排除に苦慮しながらの調査であったものの、縄文式土器を伴なう土壌、古式土師器5個体から成る特異な土器群を検出した他多くの成果を得た。

- 12月 III-2、III-3、III-6、III-7、III-8、III-9の各区調査小区の調査を実施した。III-2、III-8、III-9は先月に着手したものとの継続である。III-3はIII-2の尾根先端部の傾斜面に定めた調査小区で2グリッド12m²の発掘面積である。III-6は大浦浜背後の湿地の北奥部の北裾に接する標高2.5～4mの平地に定めた調査小区で5グリッド25.5m²の発掘面積である。表土下1～2mで湧水があった。III-7は標高2.0～2.5mの平坦地に設定した調査小区で発掘着手前から湧水の激しいことが予測されたため、6～8m²の大グリッドによって調査した。櫛石島第Ⅲ調査地区のうちIII-1～III-9の以上の調査は第Ⅱ調査地区的残務（櫛II-3-H）と平行して行なったため調査の配置、作業員の配分とも適宜実情に則した体制で実施したが、予定した工程を12月19日に終了した。

なお、大浦浜調査地区的南半の調査地区は大浦浜後背の低湿地のほぼ中央を貫通し、大浦浜防波堤水門に流出する用水溝以南と対象したもので、III-10～III-12の3調査小区に区分し、20グリッド、129m²の発掘面積であるが、これらの調査の開始は翌52年1月以降に実施した。

3. 調査地区的設定

櫛石島第Ⅲ調査地区は今年実施の調査地区の内で最大の規模と範囲を持つものであり、調査期間も年末・年始にまたがるため、地区を南北に2分する排水路によって南北に区分した。南半部は52年にその実施期をあてた。また調査対象地区の一部を52年度予定であった第Ⅱ調査地区と代替した。

櫛石島第Ⅲ調査地区は丘陵稜線上に2小区、丘陵傾斜面に4小区、丘陵裾から低平地に7小区の計13調査小区に細分した。地形上の特質に見合せて尾根主軸に平行させて設定したIII-1、III-2、III-3と低湿地に隣接するものの丘陵傾斜面のIII-4、III-6は独自なグリッド設定基準線を設けたが、他は国土地理院の座標系に合わせた南北・東西にグリッド設定基準線を置いた。櫛Ⅲ-1調査小区は櫛石中学校西の標高15～23mの丘陵尾根

上の平坦地に設定したもので東西に細長く平行する2条のグリッド設定基準線により13グリッド $54m^2$ の発掘面積である。丘陵稜線上であるが、畠地に開墾されている標Ⅲ-2調査小区は標Ⅲ-1と基部で連結する南北方向にその走向を示す標高20~25mの丘陵尾根上の平坦地に設定した調査小区で南北と東西の十字のグリッド設定基準線によって6グリッド $54m^2$ の発掘面積である。東西軸20mは幅1.5mの細長いトレンチによるものである。

標Ⅲ-3調査小区は標Ⅲ-2と同一稜線上の傾斜面に設定した調査小区で標高12~14mの高さである。Ⅲ-3-A, Bの2グリッド $12m^2$ の発掘面積である。

標Ⅲ-4調査小区は南半部の丘陵傾斜面の東に面する傾斜面に定めた調査小区で、国土地理院の座標系に合わせた南北線を、それに特定の角度で交差させた基準線によって14グリッド $66m^2$ の発掘面積である。

標Ⅲ-5調査小区はⅢ-1と同一丘陵の南傾斜面に定めた調査小区であるが、畠地としての開墾が徹底して行なわれている地点である。東西に3グリッド、南に1グリッド定め、 $20m^2$ の発掘面積である。

標Ⅲ-6調査小区は大浦浜と関ノ浦を繋ぐ通路沿いの大浦浜後背湿地の最奥部に隣接する山裾に定めたもので、5グリッド、 $25.5m^2$ を発掘面積とする。果樹園に使用されている山裾部と低湿地の接する地点である。

標Ⅲ-7調査小区は、Ⅲ-1, Ⅲ-2の丘陵部から集水した水脈が低湿地に流入する地点に定めた調査小区で、地目は水田と記載されているが、現在放棄された荒地である。標高は2.2~2.5mと低湿地にあっても比較的高い地形であるが、水はけは悪く滯水気味である。東西軸と南北軸に沿ってグリッドを設定し、 $48m^2$ を発掘範囲とした。

標Ⅲ-8調査小区は大浦浜堤背後の低湿地に定めた調査小区で標高1.5~2.0mの低湿地である。周辺は櫻石島民の重要な葉畑となっていて表面土の排水は良好であったが、発掘してみると表土下40~50cmで滯水するため調査は難行した。やはり、国土地理院座標に合わせて8グリッド $37.5m^2$ を調査範囲とした。

標Ⅲ-9調査小区はⅢ-1調査小区の定められた軸に走向を示す低丘陵の先端部に接する低地に定めたグリッドで $11m^2$ の面積を持つ。標高は2.3m前後と他の低地に定めたものよりも高い。

標Ⅲ-10, 11, 12は別記するところによる。

4. 調査の概要

各調査区の概要

調査グリッド	面積	出土遺物	遺構	調査の所見
標Ⅲ-1-A	4 m ²	剥片1・碎片1		
B	4 "	剥片1・碎片1・近世土器片		
C	4 "	須恵器・師巣式土器片・近世土器片		
D	4 "	サヌカイト碎片8・土師器片1・須恵器片1・瓦質土器片1・中近世土器片(輸入青磁1)		この調査区は標高15~25mの丘阜状の尾根稜線上平坦部に定めたものである。
E	4 "	サヌカイト剥片2・中近世土器片		A~CとIグリッドは地山が浅く遺物の包含は認められない。
F	4 "	ナイフ形石器2・横長剥片2・翼状剥片1・剥片17・碎片30・中近世土器片		D~H、J~Mへ尾根を下るに従って、堆積土層が深く畑地耕作の過程で平坦化されている。
G	4 "	器1・ポイント1・石核1・使用痕ある剝片1・剝片11・碎片99。(チャート碎片1) 中近世土器片	花崗岩石組み	遺物はサヌカイト製器が多く含み注意を要するが、畑地耕作のため大幅に搅乱されている。出土したサヌカイト製品の多くは風化が大きく二次加工等の観察が困難なものが多い。
H	4 "	剥片11・碎片44・須恵器片・土師器片		また、この尾根の南傾斜面東側部にはサヌカイト剝片や中世土器片の散布が認められる。
I	4 "	鉄片		
J	4 "	剝片4・碎片8・黒曜石碎片1・近世土器片・錢貨(寛永通宝)		
K	6 "	石核1・二次加工ある剝片1・細石刃・砂岩円礫・剝片32		
L	4 "	縦長剝片1・剝片16・碎片22・横剝片1・中近世土器片		
M	4 "	削器1・石核2・剝片9・碎片33		
標Ⅲ-2-A	6 "	サヌカイト円錐2・横長剝片石核2・剝片4・碎片7・近世土器片	自然石が露頭する小ビット	
B	6 "	ナイフ形石器1・削器1・細石刃1・縦長剝片4・剝片9・碎片11・近世土器片		
C	6 "	石核2・縦長剝片8・ポイント1・細石刃2・二次加工ある剝片・削器1・剝片・碎片・円礫・石核2	小ビット	この調査区は標高20~25mの北から南に伸びる尾根の平坦部に定めたものである。平坦部の幅は東西15m前後でゆるくその先で傾斜を変化させている。北半は畑地耕作で削られ気味であるが南半は比較的保存状況の良い包含層が認められる。石器製作窓の残存が期待される。
D	6 "	ナイフ形石器5・ポイント2・細石刃1・縦長剝片16・剝片40・碎片60・焼石1・砂岩円礫1・土器片1	堆積土層4枚を数える	
E		石核4・縦長剝片17・翼状剝片2・ポイント1・削器1・細石刃2・銅片・碎片・黒曜石片2・円礫・焼け石・チャート片	小ビット	
F		石核2・縦長剝片9・ナイフ形		

調査グリッド	面積	出 土 遺 物	遺 構	調 査 の 所 見
標Ⅲ-2-F		石器 1・ポイント 2・細石核 1・細石刃 3・細石核調整剝片 1・削器 2・剝片・碎片・叩き石・円錐・焼石・黒曜石		
標Ⅲ-3-A B	6 m ²	剝片 1・碎片 1 剝片 4・碎片 5		Ⅲ-2 調査区の尾根の先端部傾斜部で定めたものである。 石組みは30~50cm大の花崗岩自然石によるもので、人工のものか、自然のものか問題である。
標Ⅲ-4-A B C D E F G H I J K L M N	4 m ² 4 m ² 6 m ² 6 m ² 4 m ² 6 m ² 4 m ² 4 m ² 4 m ² 6 m ² 4 m ² 4 m ² 6 m ² 4 m ²	サヌカイト片・土師器片・須恵器片・瓦質土器片 サヌカイト片・チャート片・土師器片・須恵器片・中近世土器片 サヌカイト片・土師器片・須恵器片・近世土器片 サヌカイト片・土師器片・須恵器片・土器片・輸入白磁 模様鉄釉陶器塊 1・近世土器片・土錐 サヌカイト片・土師器片 近世土器片 近世土器片 近世土器片 近世土器片 サヌカイト片・須恵器片・近世土器片 サヌカイト片・近世土器片 近世土器片 近世土器片		この調査区は大浦浜背後の低湿地を望む標高 5~10m の南面する傾斜地に定めたものである。谷状地に定めた A・B・D グリッドでは山地の堆積土層が深く、B グリッドの下層は伏流水のためグリル化した土層が検出される。 E~N グリッドにかけては、後世に持ち込まれた近世土器や部分的に散見するサヌカイト片を除けば全く他の遺物は認められず、遺構の所在はないものと考えられる。 J グリッドに認められた石組みは人工のものと考えられるがその性格は不明である。
標Ⅲ-5-A B C D	4 m ² 4 m ² 6 m ² 6 m ²	瓦質土器片 1・不定形ナイフ形石器 1・近世土器 サヌカイト片 16・土師器塊 1・土師器片・須恵器片・瓦質土器塊 1・鉢 1・擂鉢 1・亀山焼 1・土錐 2・焼け石・近世土器片 サヌカイト片 7・土師器塊 12・土師器片 4・須恵器片・輸入青磁 1 サヌカイト片 15・土師器塊 1・土師器片 20・須恵器片・瓦質土器片・土錐 9・輸入青磁片 1・亀山焼	石群落ち込みし字状に曲する落ち込みに 20cm 大の花崗岩を用いた石組状の石群が検出された。 段状落ち込み(浅い U 字溝か) 段状落ち込み(浅い U 字溝か)	この調査区はⅢ-1 調査区の南傾斜面の鞍部に定めたもので標高 2m 前後の大浦浜よりやや高い。 中世の土器が落ち込み状遺構に伴って出土し、その内に輸入陶磁器を含むこと等問題のある地域である。 現在は平坦な畑地が耕やされているが、その下部に旧状の傾斜が残り、その傾斜に対して何らかの遺構が残存している可能性が高い。

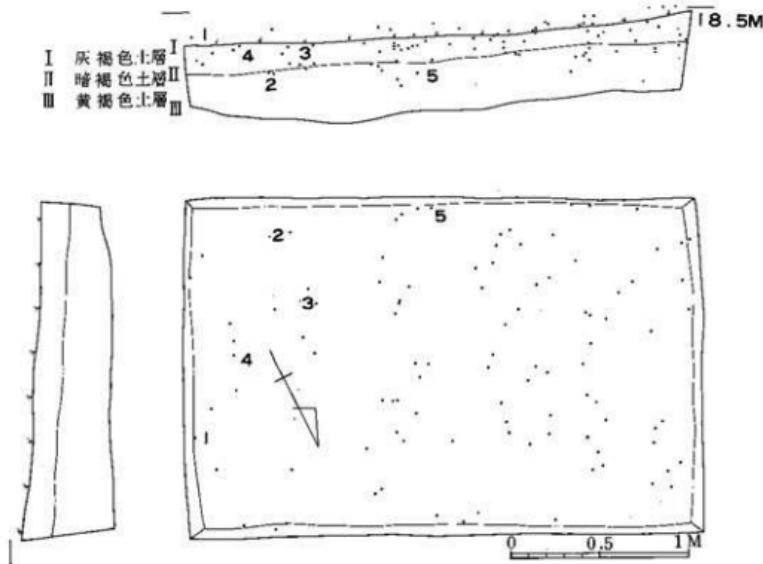
調査グリッド	而積	出 土 遺 物	遺 構	調 査 の 所 見
標Ⅲ-6-A	6 #	サヌカイト片7・土師器片8・須恵器片1・輸入陶器片1・石鏡1(弥生圓基式)・近世土器片		
	B 6 #	サヌカイト片5・土師器片6・須恵器片3・瓦質土器片・石鏡(弥生圓基式)		「隣の浦」に通じる大浦浜背後の奥部の低湿地に面する緩傾斜地と低湿地に定めた調査区である。
	C 4.5 #	チャート片4・近世土器片		類若な遺物・遺構は検出されなかったが、堆積土層がかなり深く、その下層に中世土器片を含む層が所在するため注意を要する。
	D 4.5 #	チャート片2・近世土器片・節楽式土器片		
	E 4.5 #	近世土器片		
標Ⅲ-7-A	8 #	サヌカイト片1・土師器片4・須恵器片10・瓦質土器片3・近世土器片		
	B 6 #	土師器片2・須恵器片1・瓦質土器片6・近世土器片		
	C 6 #	サヌカイト片1・チャート片1・須恵器片7・瓦質土器片3・近世土器片		
	D 6 #	チャート片2・土師器片3・瓦質土器片4・近世土器片		
	E 8 #	サヌカイト片2・土師器片3・瓦質土器片2・輸入青磁片1・近世土器片		
	F 6 #	土師器片2・須恵器片3・瓦質土器片2・近世土器片		
	G 8 #	チャート片1・土師器片6・須恵器片5・瓦質土器片2・近世土器片		
標Ⅲ-8-A	6 #	サヌカイト片19・チャート片8・繩文式土器18・土師器片20・須恵器片2・節楽式土器片1・輸入青磁片2・近世土器片		
	B 6 #	サヌカイト片2・チャート片2・繩文式土器片3・土師器片1・須恵器片1・節楽式土器片1・近世土器片		
	C 4.5 #	繩文式土器片1・須恵器片1・近世土器片		
	D 4.5 #	土師器片3・須恵器片4・近世土器片		
	E 4.5 #	サヌカイト片2・繩文式土器片3・土師器片10・須恵器片1・近世土器片		
	F 4 #	サヌカイト片2・土師器片3・須恵器片5・瓦質土器片1・近世土器片		
	G 4 #	土師器片1・須恵器片3・瓦質土器片2・近世土器片		

5 主たる調査区

(1) 標Ⅲ-1-K

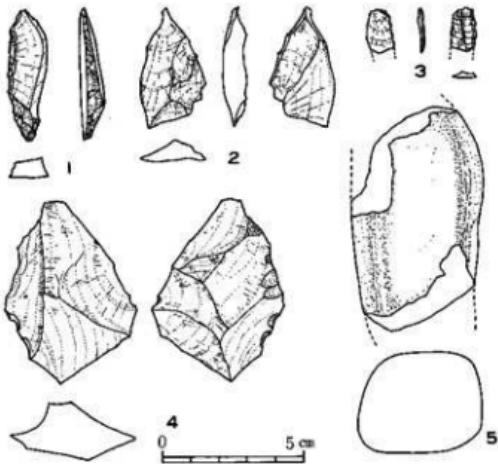
横石島第Ⅲ調査区第1小区は大浦浜に突出する標高20m前後の低丘陵状尾根の上部平坦地に定めた調査区である。Ⅲ-1-Kはそのほぼ中央部のやや南寄りに定めた $2 \times 3\text{ m}$ の長方形グリッドであり、南に僅かに傾斜している。標高18.5mの高さを測る。この平坦地は古くから畑地に開墾されていて、A~Hグリッドは現在も畑作に使用されている。

第1層は表土耕作土で灰褐色土で土壤の粒は細い。第1層中にはサヌカイト碎片とともに中近世の土器片が若干混っていたが耕作土で攪乱が激しい。第2層は明るい褐色土層で下層になるにつれて黄褐色気味になる花崗岩風化土層で粗い石英粒や花崗岩の小角礫が希に認められる。第3層が地山で地層基盤である花崗岩の崩壊上層であるがやや粘りがあり、風化度合は進んでいると考えられる。第2層中にサヌカイト剥片、碎片、砂岩円礫が検出されたが、顯著な遺物は認められないものの縦長剝片、横剝ぎ剝片の折断された小片、Mブレイドと二次加工（プランティング）のある剝片も認められる。円盤状石核とされる不整形な小型の石核も認められ今後の注意を要する。



第2図 標Ⅲ-1-K調査グリッド実測図

この調査グリッドの出土品は第1層に混入する近世の土器片を除くと他はすべて石器製作にかかる遺物で、不定形石核2、二次加工である剝片1、フレーク32、細石刃1、砂岩礫1が数えられる。石質はサヌカイトであるが、堅縛状の節理の目立つ石質のやや悪いものと、やや緻密なものがあり、前者は石質変化が大である。不定形石核としたものの1は表裏両面とも周辺からの不定方向の剝離痕を持つもので、円盤状石核とすることもできる。二次加工ある剝片は、長さ4.6cm、幅1.4cm、断面台形を呈するもので、基部と側片の一方にトリミングが施されている。フレークは殆んどが横剥ぎ剝離によるもので1部を除き石質変化が大である。細石刃は1片だけであるが、表に3条の堅縛状剝離痕が認められ、表面はやはり上端からの打撃痕が認められる。先端部が折断されているが、現長1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmを測る。砂岩礫は両端を欠いているが、現長8cmを測る隅丸角柱状の円礫である。ハンマーと考えられる。なお、標Ⅲ-1調査区全体の旧石器時代遺物を他の調査グリッドの出土遺物や表採品等から列記すると、縦長剝片・翼状剝片・ナイフ形石器・横剥剝片・ポイント・細石刃等の瀬戸内地域の各期の石器があげられる。



第3図 標Ⅲ-1-K調査グリッド出土遺物実測図

(d) 標Ⅲ-2-C・E・F

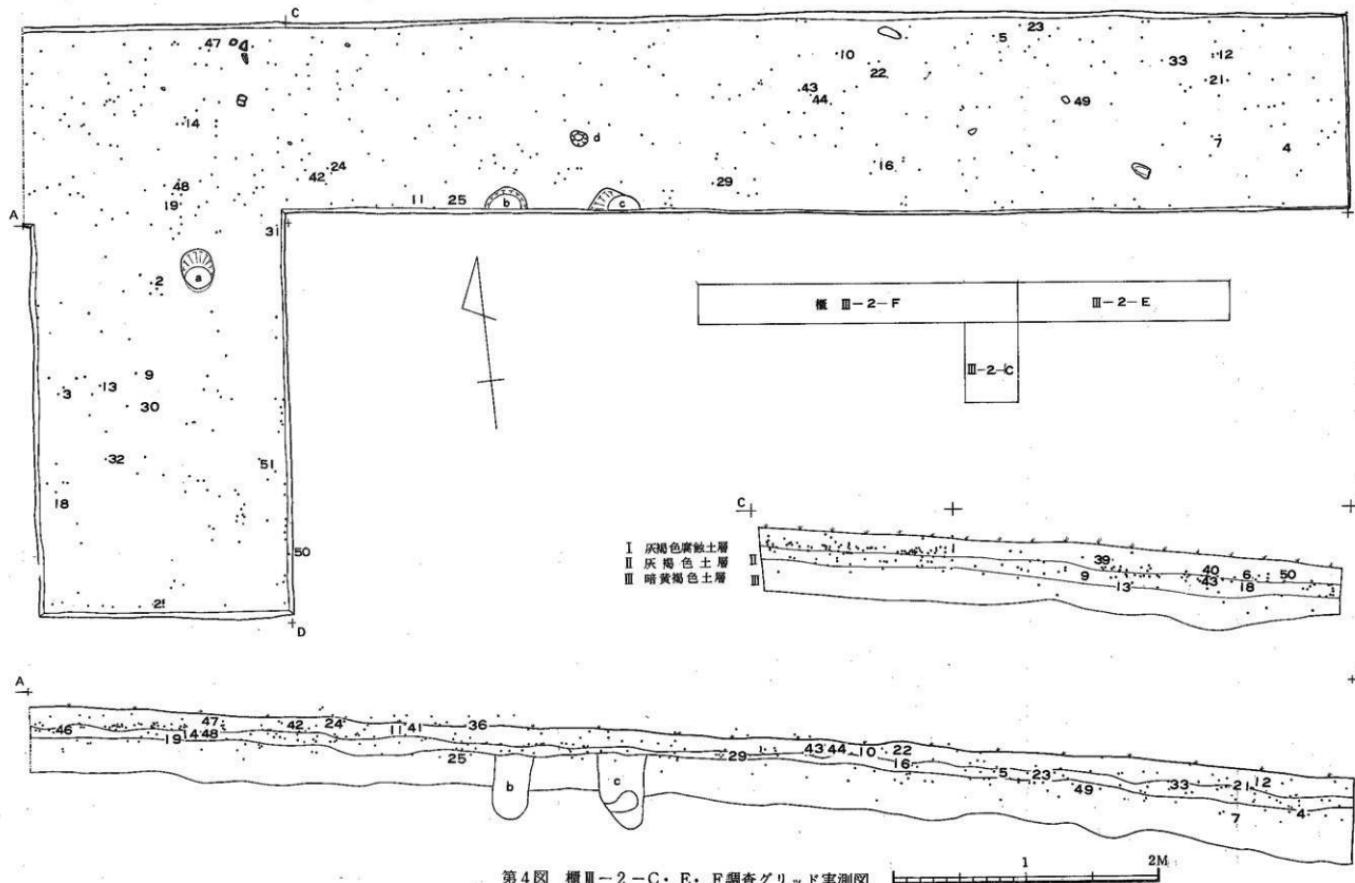
標Ⅲ-2調査小区は横石中学背後の標高44.5mの高みから東に標Ⅲ-1調査小区を定めた尾根が派生するのに対して南生する尾根上に立地するものである。さらに西方には同じ高みから一条の尾根が派生し、「せきの浦」まで伸びて大浦浜から「せきの浦」に通じる小地溝に面する。この調査小区を定めた標高20~25mの尾根稜線上には比較的平坦で旧石器時代の遺構が立地するのに好しい地点であるが、現在東西二条の畑地が狭長に耕やされ、表土部分の搅乱は否めない。Ⅲ-2-A~Dまで33mを測るがそれらのうちA~Bまでは2層の層序を分つだけであるのに対しCは3層、Dは5層を数え尾根稜線上を下傾するにつれて層序を増す。このことは畑地開墾とその後の耕作による切り盛りの二次堆積の事実を明瞭に示しており、Ⅲ-2-A~Bが削平され東西の傾斜面と稜線上下位のC、D地点

に盛ったことが窺われる。III-2-Cは平坦地のはば中央部に定めたもので、E・Fはこのような細い尾根に如何なる形状で遺物の堆積が為されているかを知るため、予備調査であるが敢てトレンチを拡張したものである。東西のE・Fトレンチの断面は、第1層灰褐色腐殖土層（耕作土）・第2層褐色土層・第3層鉄分斑の多い暗黃褐色土層の3層に分けられる。地山は黄褐色を呈する花崗岩風化バイラン土層である。出土した遺物の大半は第1層・第2層からで、第3層出土の遺物は少ない。

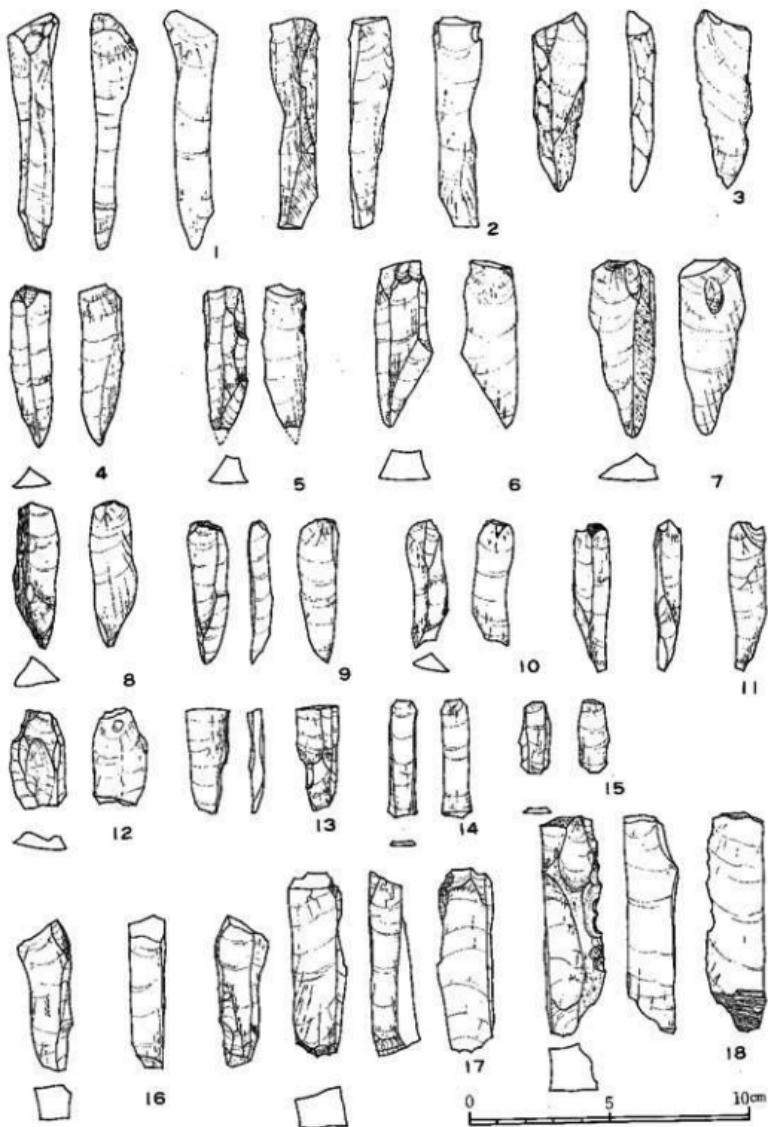
調査グリッドは東西に細長いT字型の33m²の面積であったが、標III-2-C・E・Fグリッドとともに小ピットが検出された。Cグリッドの北半より検出されたaピットは、上縁型35cm・深さ37cmを測る円形のピットで第2層中半から地山面にかけて掘り込まれたもので、垂直よりはやや南に底が片寄っている。Eグリッドに検出されたb・c・dピットはともに第3層上面から落ち込んでいる。b・c両ピットは地山を掘り込んでいるが、グリッドの駆面にかかっているため全容は明らかでない。bピットは径30cm強・深さ50cmを測り、断面が釣鐘状を呈する。cピットはbピットから50cmの側近に検出されたが、bピットより深く掘り下げられていて径35cm・深さ55cmを測る。埋土は上部が黒褐色土、中位が褐色土混り暗褐色土、下部が暗褐色土の三段階が観察される。dピットはb・cピットの側近に検出されたが、径15cm、深さ10cmの浅いものである。図示できなかったFグリッドの西よりも、径30~40cm、深さ20~30cm程のピットが検出されたが、C・Eグリッド検出のものとは数mほど離れている。a・b・c・d各ピットの関係はb・c・dが1m²の範囲内に検出されたこととa・b・c各ピットの規模が類似することが指摘しうるだけで、その性格は明らかでない。なお、C・E・F各グリッドのいづれのピット中にも、遺物、炭化物等は検出されない。また、小ピット以外には遺構らしきものは認められなかつた。

遺物はサヌカイト製石器を中心に、円礫・剝片・碎片を含めて総数600点近くが出土した。石器の種類は、縦長剝片・翼状剝片・ポイント・削器・二次加工ある剝片・細石器・叩き石・焼石が数えられる。しかし、遺物の分布状況には顕著な特徴は見い出せず、むしろ包含層は畑作のため相当搅乱されていると考えられる。

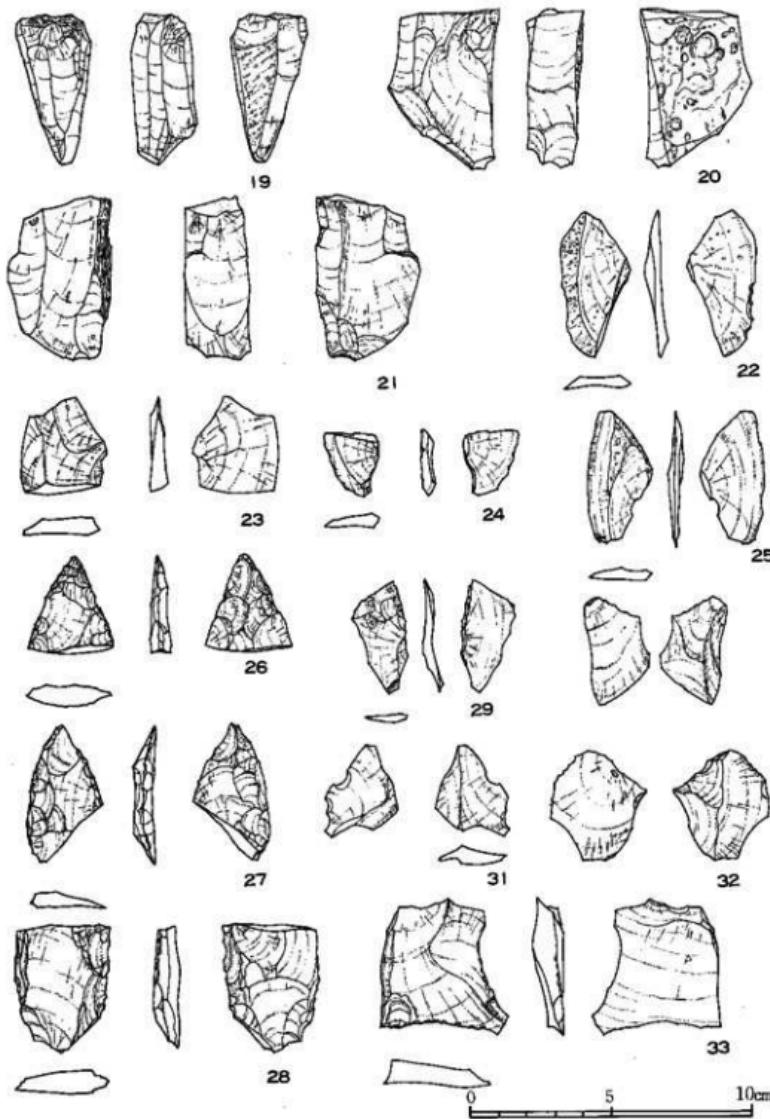
縦長剝片（1~15）はCグリッドとEグリッド東半部にまとまって出土した。縦長剝片に用いられたサヌカイトは朽木状の自然面を呈するものが多く、いずれも長幅比の大なるもので、正面に1条から2条の稜を持ち側縁は平行し、それ等の断面は三角形もしくは台形状を呈する。長さ8cm前後の大型のものと、長さ5~6cmの中型のものと、長さ4cm以下の小型品とに3分し得る。大型品と中型品はともに長幅比が大きく、長さ4cm前後の小形品の一群はさらに2種類に細別できる。長幅比の2前後のものと、14・15のように断面が台形で肉厚の非常に薄い剝片刃器とも言うべき長幅比の大きいものであるが、その数量



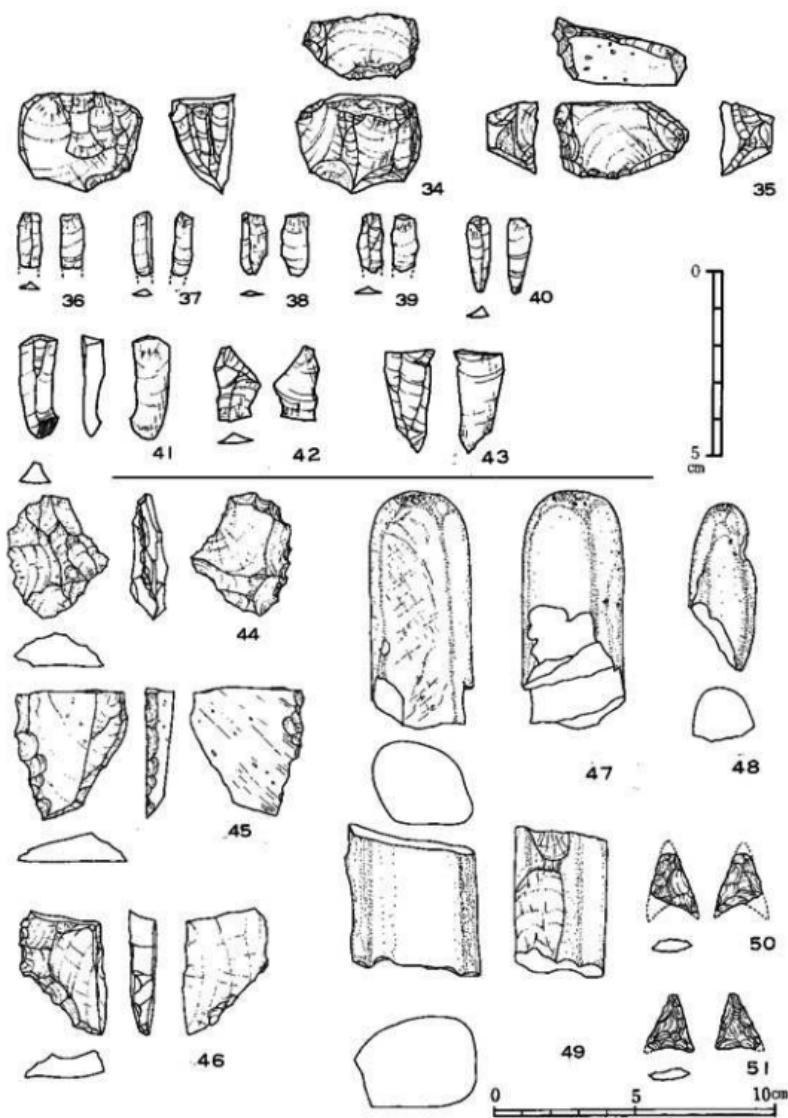
第4図 標III-2-C・E・F調査グリッド実測図



第5図 横II-2-C・E・F調査グリッド出土遺物実測図-1



第6図 横III-2-C・E・F調査グリッド出土遺物実測図-2



第7図 標Ⅲ-2-C・E・F調査グリッド出土遺物実測図-3

は全体の10%に満たない。16・17・18・19・21は縦長剝片を剥離した石核である。16・17・18は細い角柱状を呈し、その断面は方形に近く、17・18の両者は上下方向からの剥離が行なわれていて、打面は調整されている。19は角錐状を呈する石核で、5 cm前後の中型品を剥離したものと考えられる。打面形成は風化の大きいため確信は把めないが、調節打面であると思われる。21は長さ 6 cm、幅 4 cmを測る石核であるが剝片剥離面の背面に朽木状の自然面を持ち、縦長剝片の剥離は一方から短冊切りに行なわれていて、鈍角な方向からの打撃が推定される。21の石核の剥離が進行すれば、最終的には17・18のような角柱状の形態をした残核が残されると考えられる。

縦長剝片のうち 3・4・6・9・14・15は調整打面、2・5・10・12は平坦打面、1・7・8・11は自然面をそのまま打面にしている。全体的にみれば平坦打面のものが最も多く、調整打面のものの数は少ない。剝片の一面に自然面を残すものもかなりある。二次加工痕や使用痕の認められるものは無かったが、風化のため細部の観察の不可能なものが多いため明言はできない。

翼状剝片 (22・24・25) 図示し得た翼状剝片は3点で、22・25は風化が激しくチョークのように瓜で割ることができる程である。打面部の調整痕は22にかすかに認められるが、25は打点部が平坦なことと自然面を一部に残していることが観察できる程でそれ以外は明らかでない。長さはともに 2.3 cm、幅は 5 cmから 6 cmとほぼ等しい。24は長さ 2 cm、幅は推定 4 cm強であると思われるやや小型のものである。打点部分から半折しているが打面は了寧に調整されている。22・25は底辺のカーブが比較的ゆるいのに対して24の底辺のカーブは鋭いといった相異も認められる。

ポイント 26・27・28はいづれも木薺形を呈する幅広のポイントの一部であるが、夫々変化があり、原形の大きさも異なるようである。26は先端部の切損品であるが、断面は整った筋錐形を呈する。側辺からの細部加工が全面に及んでいて主要剥離面を一部も残さない。現存部分だけでは重量は 6.3 gを測る。27は側面観からするとポイントに入れるのに難のあるもので、ドリルであるとすることもできる。左右の側辺は主要剥離面からの細部加工は了寧であるが表面にも大剝離面を残すし、裏面の細部調整は大まかであり同様に大剝離面を残す。28は基部から中央部にかけて残存するもので、その断面は不整な筋錐形である。表面には27と同様 Negative な剝離面を残すが裏面は二次加工により大剝離面は見当らない。周辺からの細部加工は26ほどは了寧でない。27・28の現存部分での重量はそれぞれ 6 g・18 gを測る。

23・29・30・31・32・33は横剥ぎ剝片であるが、必ずしも同性格の剝片ではなく夫々変化がある。32はトリミングがあり搔器と考えられる。

細石核、細石刃 (34・40) 34は玻璃質のサヌカイトを原料とした細石核であり、平坦打面であるが打点部分は細かく調整されている。打面は 8.1 cmを測り、短側面の一方だけ

に細石刃剥離面を持つもので、5条の櫛状剥離を数える。他の3辺のうち1方の短側面は自然面を残し長側面は調整剥離が行なわれている。

35は細石核としては使用されていないが細部に二次加工痕を残し2条の櫛状剥離が認められる。また、図示しなかったが他に同質のサヌカイト角礫を裁断した石核形式の第1段階の剥片も認められる。36から4は細石刃であるが、その巾は6~7mmで長さも2cm前後の小型品であるところに特徴があり、先端部を欠くものもある。40は黒曜石を原料とする。

41・43は小形石刃で、41は頂部に打面調整痕を認める。43は3条の稜線を持つ黒曜石製品で先端に尾留をとどめる。

削器(44・45・46) 44は円盤状石核を再加工して弧状の側面に二次加工を施したものである。46は外側の2辺に二次加工を了寧に施したもので、その先端は鋭く調整刀様の使用も考えられる。他に1点大形横剥ぎ剥片を用いてその縁辺を二次加工したものも出土した。

叩き石他(47・48・49) 47は一方の端部を欠いているが、長方形の砂岩質円礫を用いた叩き石で、端部の先端に打痕を留める。48は現存長6cmを測る小型のもので、花崗岩円礫を素材とした叩き石と考えられる。49は上下端と側辺の1部を欠く石英斑晶の大きく顎著な火成岩円礫であり、面は非常に円滑で人工的な磨製を思わせる程であるが性格は明らかでない。

石鐵(50・51) いづれも凹基無茎式に属するもので風化が激しく、周辺は丸味を帯びている。50は長さ2.3cm、51は長さ2cmを測る。

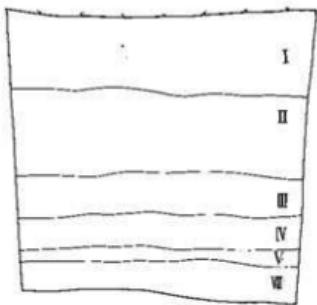
標III-2-C・E・Fグリッドの出土遺物は以上述べた通りであるが、同調査区には、国府型ナイフ・富山型ナイフ・井島I期の石器も少量であるが発見されている。しかし全体的にみれば縦長剥片の量が多く、同石核の出土もかなりあるところから石器製作跡の検出が将来期待される。

④ 標III-5-B

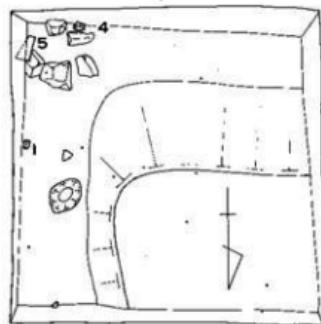
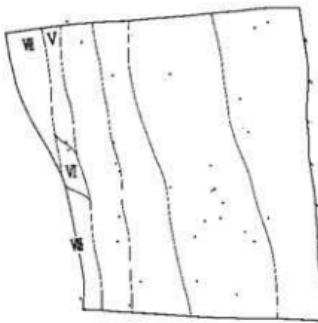
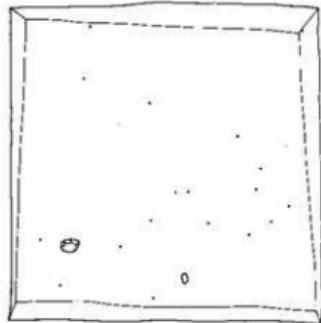
この調査グリッドはIII-1調査区の立地する尾根部の南面する傾斜面の裾部近くの緩傾斜地に定めたものである。日当りの良い傾斜面は全て畑地に階段状に耕作されていて遺構の立地の予期される部分も大幅に切り取られたり、埋蔵したりしている。III-5-B調査グリッドは、尾根裾部が大浦浜に接する山裾部分の南面した箇所に定めたもので、遺構の所在が期待されたものである。

このグリッドは地表から黄褐色粘質土の地山まで約2mを掘り下げたがその間に無遺物層の第3層を挟み8層の土層に分けられる。第1層は現耕作土層で約30~50cmを測る黒褐色腐蝕土層で土壤の粒状は細い。第2層は茶褐色土層で約50cmの厚みである。第3層は灰

— 4.5M



- I 黒褐色腐鈍土層
II 茶褐色土層
III 暗茶褐色土層
IV 暗褐色土層
V 暗黃褐色土層
VI 紅褐色土層
VII 黄褐色土層
VIII 喬褐色枯質土層

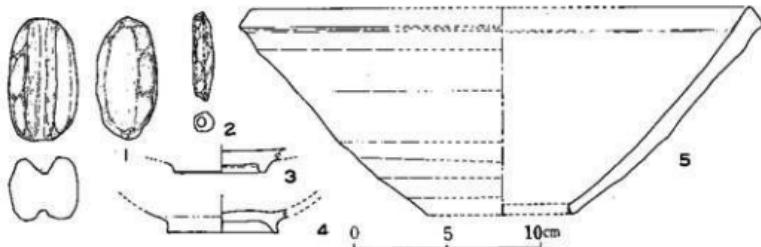


0 1M

第8図 標目-5-B調査グリッド実測図

味がかった暗茶褐色土層で20~35cmの厚みを測り、遺物を全く含まない。第4層はその上層部に10片近くの遺物を含む暗褐色土層で、粒状は比較的細い。第5層は暗黄褐色土層。第6層はブロック状に入る褐色砂質土層、第7層は黄褐色土層で南から東半部の溝状落ち込みに堆積した土層である。第8層は4層と6層に接する土層で暗黄褐色を呈する粘質土層であり、第6層、7層はこの土層を切り込んだ落ち込みに堆積する。第8層より下は黄褐色を呈する粘質土層で地山層と見なされる。第3層の無遺物層より上で検出され、遺物は比較的新しい時期に例えれば階段状の畑が形成された時期に2次的に堆積したものである。第4層はそれ以前のある時期の表層であると考えられ腐蝕の度合も大きいし、遺物も堆積しているが攪乱が認められる。第5層から7層中には須恵器片から瓦質土器片が含まれ、東南部のコーナーには円形に石組み状の配石が認められその間から瓦質の鉢形土器と土師器碗が検出された。これ等の土層の堆積する落ち込みはグリッド東部から南部にはぼし字型に検出されたが現状で45cmの深さが測れるがその性格は明らかでないが、中世以後の遺物が含まれず、土師器碗、瓦質土器鉢の形態から平安末期~鎌倉期にかけての年代が得られ、注意を要する。

第1層、第2層中の出土遺物は、チャート片、瓦質土器のはか、近世の土器片等が明らかに新しい擾乱によって二次堆積したもので、見るべきものは出土しなかった。第4層上面には土雞片1、土師質土器片3、瓦質碗1、サヌカイト片2が検出された。サヌカイト片は3cm足らずの横剥きの剝片を加工したナイフ形石器で、断面は3角形を呈し、短辺には背部にプランティングがある。また刃部基部よりに二次加工が認められるが、或いは使用痕かも知れない。他の土器片は平安末から鎌倉期にかけての細片である。碗は高台のふんばり気味の土師質土器片と底面の幅広い粗略な粘り付け高台の瓦器碗とであり、後述する溝状落ち込みの出土遺物と同種類のものとみてよい。



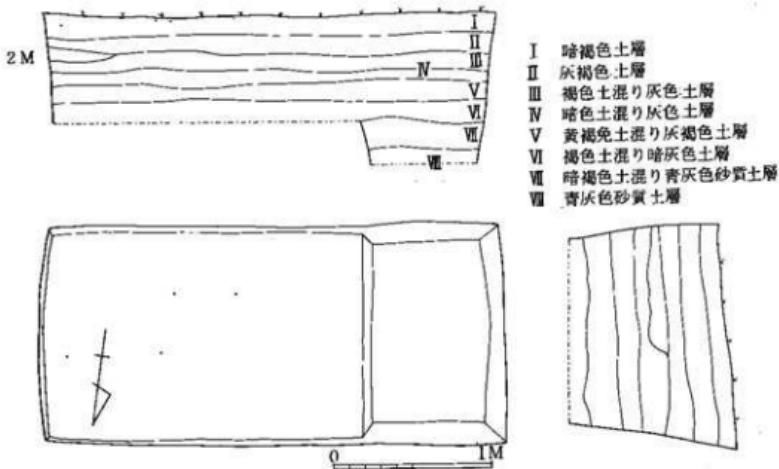
第9図 横II-5-B調査グリッド出土遺物実測図

第7層出土遺物は、L状にトレンチの隅に認められた溝状落ち込みから出土したものである。鉢1、土師器片1、土師器碗高台部分1、瓦質碗高台部分1、土雞1が出土した。鉢と土師器碗は大形礫を組んだ径40cm前後の円形配石の石の隙間に出土した。鉢の体部は

直線的に外上方向に伸び口縁端部は角張り気味で外傾して、下端は鈍く稜を有す。粘土紐積み上げ後ロクロ整形したものであるが、外面中央部は横撫でが為されているものの指頭圧痕が多く認められる。体部下部は笠削りが行なわれている。灰黒色を呈するが断面は灰白色で焼成は悪い。土師器碗は高台径 6 cm を測るものであるが上部は明らかでない。高台は外横方向にふんばるが器壁は薄く、横撫で整形されている。黄白色を呈するが断面は暗黒色である。瓦質土器碗は高台径 5 cm を測る。高台は粘土紐粘り付け後、外面を軽く横撫するだけで高台底面は狭広一様でなく、一部に回転台の板目が残る。碗は底面は平坦で左縁に放射状の板目が 11~12 本残る。四形である可能性がある。他の土師器片 1 は甕もしくは壺の体部の小片であるが形態は明らかでない。土錐は長径 6.5 cm、幅 3.2 ~ 3.6 cm を測るが幅の広い側面に上幅で約 1.5 cm を測る深い溝が掘り込まれている。

(二) 標Ⅲ-6-C

この調査グリッドは大浦浜背後の低湿地の北奥部に定めた $1.5 \times 3 m$ の長方形グリッドで、丘陵裾部と接する標高 2.2 m を測る。現在ミカン園に造成されていて地表の水はけは良い方であるが地表下数 cm の深さに地下水が帶水している低湿地である。Ⅲ-6 調査小区には他に西方 40m を隔てた A, B 2 グリッド、東に 10m 毎に D, E 2 グリッドを開いた。D, E は以下 C について述べると全く同様の堆積土層を示すが、A, B は標高 3.5 m の山裾緩傾斜面に定められたグリッドで、山砂の堆積が認められ C, D, E グリッドとは異なる。



第10図 標Ⅲ-6-C調査グリッド実測図

った土層を示す。

表土から約1mを掘り下げ湧水のためそれ以下の調査は断念したが、その間に表土層を含め8枚の層序を得たが遺物を含む文化層は検出されなかった。以下断面図に従って列記する。第1層は表土層で暗褐色を呈する耕作土である。第2層は耕作床土にあたり灰褐色土層を呈する。第1層とともに粒状の細い耕作土壤である。第3層は褐色土混り灰色土層で褐色土は粒状に混入していて、上記2層が水田土壤であったことを示している。第4層はトレンチの北半部には認められない土層で第3層にみられた褐色土がさらに黒ずんだ暗褐色土混り灰色土で数cm~10cmの厚さを測る。第5層はこれまでの土層の土壤が粒状の細かい砂粒の少ないものであったものが、一度に粒状を大きくする土層であるが低湿地の土壤に山砂が混入したとみなされる黄褐色混りの灰褐色土である。第6層は褐色土混り暗灰色土で、第5層の灰色土が黒ずんだ以外は粒状粘性ともに同質である。第7層は堅果状に暗黒褐色粘質のブロックが混じる青灰色土層で水分を多量に含む。第8層は第7層に認められた堅果状のブロックが認められない青灰色土層である。第7層、8層の青灰色土は比較的粒状の細い砂質土である。

以上8層を数える堆積をみたが、第1層、第2層は旧耕作土、第3層、第4層は旧耕作土の床土。第5層、第6層は灰褐色土として同一系統であるし、第7層、第8層は青灰色土層の上下として一層に数えることができる。土層は第4層が南半にしか認められないことを除くと他はほぼ水平に重なった整層状況を示し水との深い関連が考えられる。

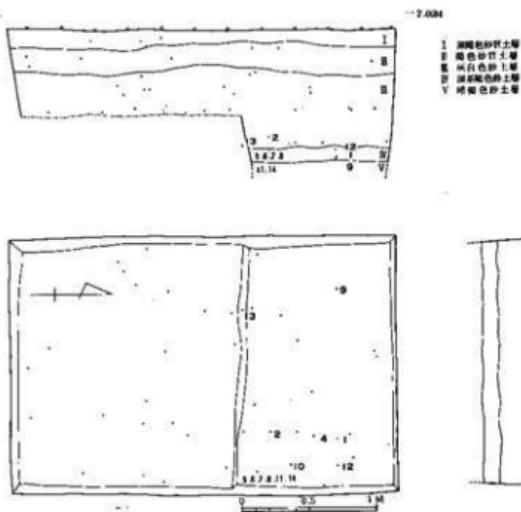
表土中にチャート片を4片検出したが、これ等は中近世の土器片とともに二次的移動によるもので、遺物包含層は発見されない。

(4) 横III-8-A

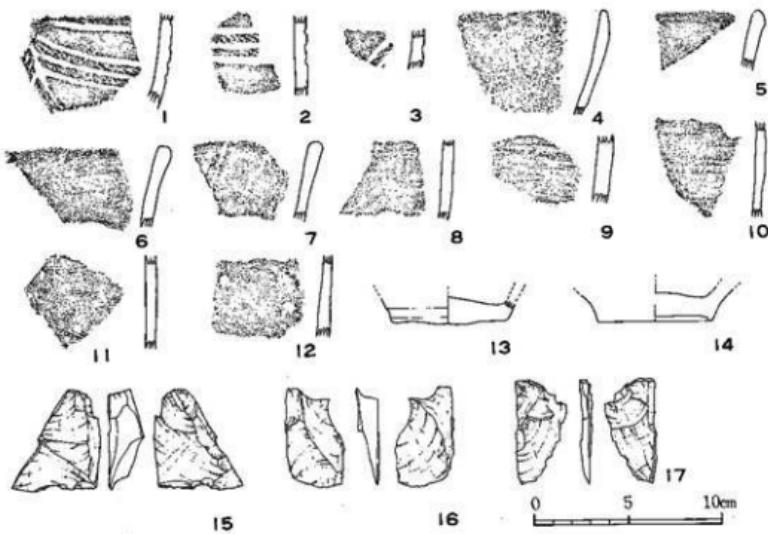
III-8調査小区は大浦浜背後の低湿地のはば中央部に設定したもので、A~Hまでの8調査グリッドを開いた。各グリッドの出土遺物は別記したとおりであるが、III-8-A、B、C、Eに於いては縦文後晩期の少量の土器片の出土をみた。

III-8-AはIII-8調査区の北端にあり舌状丘陵状尾根の先端部分から約40m程離れている標高約2.0mの現在畠地に使用されている低平地に定めた2×3mの調査グリッドである。層序は表土 第1層から湧水のためそれ以下の調査を断念した第5層まで約1.1mの間に5層を分つことができる。第1層は耕作土の上層で黒褐色砂質糖層であるが粒状は細かく有機質に富む。第2層は耕作上下層で褐色砂質土層でやや粒状が粗い。第3層は灰味白砂層で50~60cmの厚さを測る。第4層は淡褐色砂層で砂粒は第3層よりもさらに大きく、この層から湧水が激しくなる。第5層は第4層とはば同質の砂粒からなる砂質土層であるが、色調が幾分茶味がかったような暗褐色に変化する。

遺物は第1層、第2層、第3層にチャート片、サヌカイト片、中近世土器片、須恵器片、



第11図 横III-8-A調査グリッド実測図



第12図 横III-8-A調査グリッド出土遺物実測図

土師器片が出土したがいづれも二次的移動によるもので周辺の磨滅、風化が激しい。これに対し、第3層と第4層の境界から第4層にかけては磨消繩文と条痕土器とサヌカイト剝片の出土がみられ繩文時代後期の遺物包含層と考えられる。第4層は約10cm前後であるが第3層と第5層の境は不明瞭である。しかし、土壌、pitなどの遺構や生活面と考えられる。堅くしまった面は認められず近くの遺構からこの第3層下面から第4層にかけて移動してきたものと考えられる。しかし第4層は繩文式土器の單一層で近くに繩文時代後期の遺構の所在が容易に予測され、注目に値する。

サヌカイト片、チャート片 第1層から第4層まですべてに渡って出土したが、第1層、第2層、第3層のものはいづれも二次的堆積によるもので、削片、破片が大半である。第4層出土のサヌカイト剝片は非常に大まかな剝離によるもので、使用痕の認められるものは認められないものの、繩文後期の土器片と作成していることから、同時期の石器製作にかかる剝片であると云える。

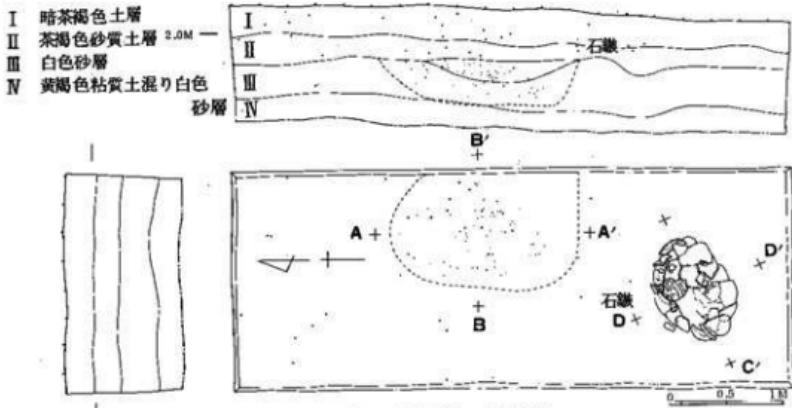
チャート片は5片出土したが、すべて第1層からの出土で二次的移動によるものである。繩文式土器片 第3層下層と第4層に集中的に出土した。湧水のためグリッドの40%だけしか割り下げていないためその全体は把え得ないが、福出KIIとされる磨消繩文のある土器片3片と同時期と考えられる巻貝による条痕のある土器片、無文土器片からなる繩文時代後期の土器群の出土がサヌカイト剝片を伴って出土した。12.3は磨消繩文式土器で、弧状の3本平行線の波線によって画された部分にのみ繩文を残し、他は丁寧に磨かれている精製土器であり、土器内面も丁寧に磨かれている。

条痕文のある土器片は6ヶ所に散乱して出土した。条痕のあり方は、平行に連続するものと、条痕が鋭角に斜交するものがあり、内面にも条痕を認めるものとヘラ状工具によって磨かれているものがあるが、別個体のものが、同一個体の部分差であるのかは明らかでない。III-8-A-14, 13は条痕文ある土器の底部であると考えられる。13は底部の中央部が、レンズ状に肥厚するもので底部に指頭圧痕を残す。胎土は多量の砂粒を含む。14は内底部は同様に肥厚するものの底部は縁辺に3mm程の同線を残し上げ底気味になっている。胎土は1~3mmの砂粒を含むが、39程ではない。また、III-8-A耕作土中に輸入青磁片、伏堀型の小形のシラク式土器片、土雞が中近世の土器の中に混って検出された。青磁片は体部から底部に移る部分であるが時期は不明である。

（iv） III-9-A

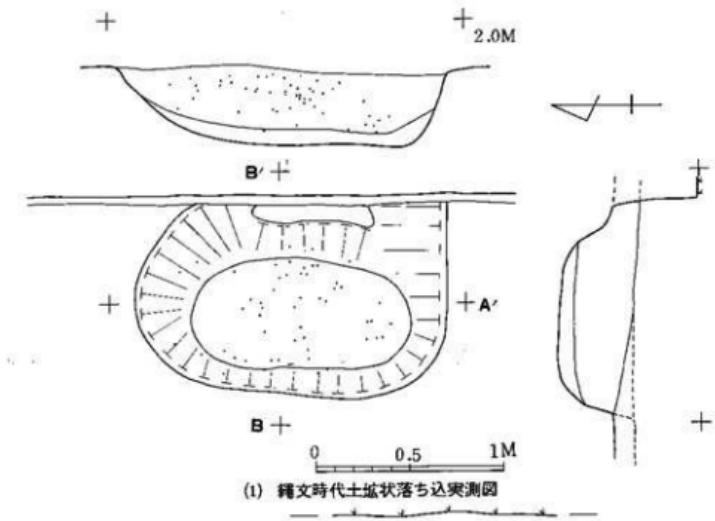
この調査グリッドは大浦浜調査区の北端にあたる。この調査区は大浦の中央部に西から東の方向へ突出した標高20m前後の小丘陵状尾根の先端裾部の緩傾斜地と大浦浜浜堤部の接する地点に定めたもので、浜堤背斜面と山裾の低地との中間点である。標高は約2.3mで、かりもし「刈藻干」と通称される地域である。南北5.5m、東西2mの長方形トレン

チによる発掘区である。地形は北側が高く、南に緩く傾斜する。土層断面も地形とほぼ等しく、北に高く南に低く緩く傾斜している。第1層は畑地の耕作土で約20~30cmの厚さを測る暗茶褐色土で砂がちであるが粒状は比較的細かい。第2層は耕作土にみられた有機質の汚れが漸次少なくなる明るい茶褐色土で砂質土である。この第2層の上端をやや下るとこころからトレンチの東より中央部に縄文式土器を主体とする遺物群を伴なう土壤の落ち込みがある。なお第1層と第2層との間には土層の相互浸透する漸移層を分つことも可能である。第3層は白色砂層であるが、第2層との間に多少の出入りがあり粒状は粗い。第4層は第3層と同様に白色砂層であるが縦長に黄褐色の塊状の凝結土層が混入している。遺物は第1層耕作土中には中近世の土器に混って磨消縄文や条痕文の認められる縄文式土器が混入していた。またこの耕作土中からは手づくねの管状土錐も5個体出土したが時代は新しいものと考えられる。第2層は耕作土の床土にあたるが、第1層と同様搅乱の事実は否定できない。出土遺物は土師器片、サヌカイト片、チャート片と弥生中期後半頃に比定される凸基式で肉厚が大である石錐1点が検出された。また第2層には壺型土器1と甕型土器2と鉢型土器2を組み合せた土器棺葬が認められ注目される。第3層、第4層中からは遺物は全く出土しなかった。第3層は縄文式土器を伴なう土壤状落ち込みのある砂層であるが、それ自体には遺物は検出されなかった。第4層は鉄分を多量に含む粘質土のブロウクが含まれる白砂層であるがやはり遺物は全く含まれていない。

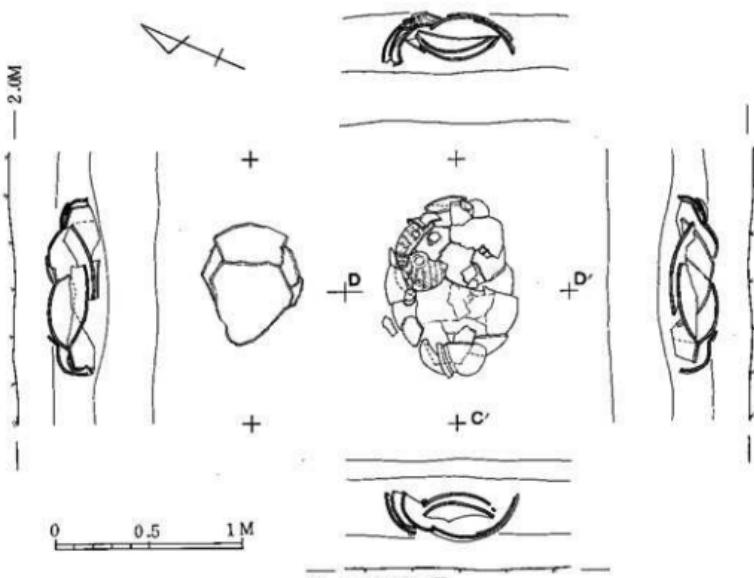


第13図 標III-9調査グリッド実測図

土壤状落ち込みトレンチの東壁面外にさらに延長するものでその規模は明らかでない。トレンチ中央部に第2層を切り込んだ状態で長さ165cm、幅95cm、深さ45cmを測る楕円形に土壤状の落ち込みが検出され、これが東壁寄りにさらに深さを一段浅くした状態



(1) 純文時代土塙状落ち込実測図



(2) 土器棺実測図
第14図 棚Ⅲ-9調査グリッド造構実測図

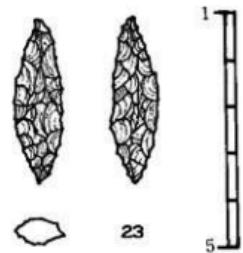
で続く状態で検出された。遺物の出土はこの落ち込み上層の暗褐色土層とその底面の茶褐色のいづれにも認められるがその大半は表土層に続く暗色土層から検出された。表土層とこの土壤状落ち込みとの埋土土質の相違はさほど顕著でないが、縄文式土器の分布は全体を通じてこの土層上層以外に認められないので縄文期の遺構とすることができる。なお壁面部分での落ち肩と底部との差が僅かに10cm前後を測るだけであるためさほど東壁外へ大きく延長するものではないと言える。

組み合せ土器棺 トレンチの南寄りの第2層中に顕著な掘り方は認められなかつたが、第3層の白砂層を僅かに掘り回めた状態で棺の底面を置いた上師器5個体によって組み立てられた土器棺が検出された。上部からの圧力によって天井部が下降していると思われる以外全く損傷のない原形で検出された。棺の主体は土師器大形壺を用いたもので、体腔部を大まかに割り取った土師片を4枚内面を上に向け、重ね合せて長さ65cm、幅50cm程の底面を形づくり、その上部に今度は体腔部から頭部にかけての四半球状の碎片を内面を内に向けて4枚重ね合せながら長さ85cm、幅60cm程の卵型に覆い被せているものである。棺はさらに菱形土器2個体の肩部以下のやや大形の碎片と鉢型土器2個体の四半球状の碎片を持って外護している。外護は全周の背を巡っている。その序列を復原すると主体部分の脇腹部の隙間を叩目のある大形の鉢形土器で塞ぎ次いでさらにその外周を菱形土器片で外護する。主体部分の長軸の両端部は大型菱形土器の口縁部より成っているが、その部分は複合口縁の鉢形土器の四半球形の破片で塞ぎ、さらに菱形土器の体底部の破片で外護している。

出土遺物

第1層、第2層の遺物は縄文式土器片、弥生式土器片、サヌカイト片、チャート片、歴史時代の土器片がみられたが、耕作土中で擾乱が激しい。

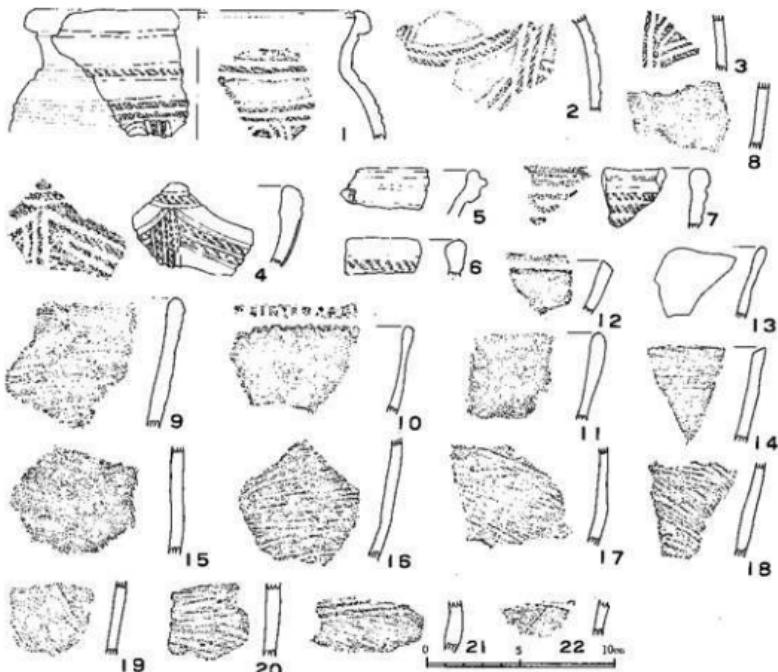
縄文式土器は7片出土したがいづれも小片である。磨消縄文を施した口縁破片はその上端を内外両方向に肥厚するもので、口縁直下に深い沈線が施されている。福田KIIと呼ばれる深鉢型土器に入るものである。また2条の沈線間に縄文を残し他は磨消したものも認められるが、中津式としても良いが小片であるため不明である。条痕文土器も2、3認められるが、いづれも赤褐色を呈する器壁の外面にのみ貝殻条痕を施している。土師器片は平行の印目文を残す小片にすぎず、土器棺に使用されたものが1部移動したものと考えられる。サヌカイト片、チャート片は夫々數片が数えられるが、いづれも碎片であり、二次加工痕は認められない。



第15図 横III-9 石器

石器は凸基無茎式に入るものが長さ3.6cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る大形品で、最大幅は中央部にあり基部は鋭く尖り尖基式のつくりである。なお、重量は2gを測る。

土坡状の落ち込みの出土遺物 繩文式土器片とサヌカイト片が出土したが、繩文式土器は磨消繩文系と条痕文系と無文系に大別できる。磨消繩文系は3本の平行波線の間に2条の繩文帯を残し、他は丁寧に磨り消した福田KⅡ式と呼ばれるもので、口縁部で外反させ口縁端部を内外は張り出すものや、口縁端部が丸く肥厚して波状口縁になるもの、口縁



第16図 横III-9調査グリッド出土遺物実測図-1

端部が内面に肥厚するものの三種があるがいづれも鉢型土器と考えられる。条痕文系の土器片は最も多量に出土したが、内外両面とも貝殻条痕を施すものと外面にのみ条痕を施し、内面は磨いているものの2者に分けられる。条痕は斜め方向に施されたものが多く、方向は一定でなく斜交するものも認められる。内面の磨きはヘラ状工具によるものと考えられるものが多く一部には円錐によるものと考えられるものもある。無文系の土器片は4片あるがいづれも原形は不明である。口縁端部が斜下方に平坦に撫でられているものは福田K

Ⅱに認められるもので内外面ともに磨かれている。口縁端部が鈍く尖り気味なものは赤頬色に焼き上がっているが小鉢のような器形と思われる。器壁に僅かに指頭圧痕が認められる。口縁上縁に数cmおきにヘラ状工具により刻目があるものは胎土にも砂粒が多く器表の処置が全く認められない粗製土器で晩期に入るものと考えられる。

組み合せ土器棺の検索

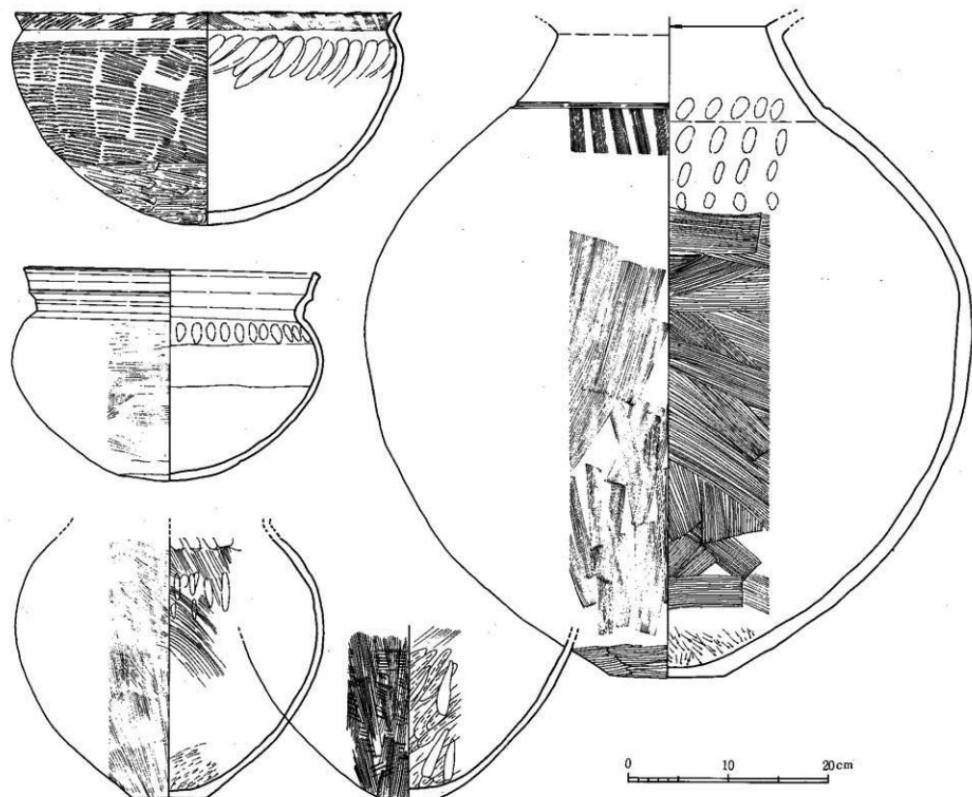
・壺形土器 土器棺の主体部を構成していた破片から復原したもので、口縁部を欠く。口縁部は故意に欠き取ったものと思われる。口縁部は欠失しているので定かでないが、頭部の上端から外横方向に強く張り出すもので、口縁は長く直立に近い形態をすると推定される。頭部は胴体部と明瞭なくびれによって区分され内傾するがその接点には幅広の浅い凹線を巡らせており、頭部は8.5cmと長く、内外面とも横撫で成形が施されている。また接合部周辺の内面には指頭圧痕が撫で整形の下に残っている。胴体部は球形に近く、内面はハケ目整形、外表面は縦方向のハケ目の上に撫で整形が行なわれている。胴部中上部には大きな黒斑が認められる。底部は小さく11.5cmを測る。内底面は箝削りをハケ目整形の後にして器壁を薄くしている。底部外面は平行方向の箝磨きが一定方向に行なわれ、底部周辺の胴部にも箝磨きが認められる。

・甕形土器 土器棺の外周を保護する状態に検出されたもので胴体部を残すものと胴部下半のみを残すものの2個体である。

前者は現在高26cm、胴部最大幅29cm、底部径7.5cmを測るかなり胴の張った形態のもので、外表面にはハケ目、胴体部上半はハケ目の上に撫で調整している。内面は底部から胸部下半にかけて縦方向の荒い箝削り、その他は左上りのハケ目が残っている。後者のものは、底部径6cmを測るものその底部は平坦でなく丸味を持っているもので外表面は左上りの叩目、中央部寄りに水平方向の叩目が、縦方向のハケ目の下に残る。内面は、やはり胴下半部までが斜方向の箝削りが認められる。いづれも胴部の丸く張っているもので古式土師器に入るものであろう。

・鉢形土器 鉢形土器は土器棺主体部の土師器の長軸両端部を伏せていたものと、土器棺主体の腹縁の空隙を伏せていたものの2個体あり、ほぼ復原し得た。

前者は口縁部がやや開いて、斜め上方に立ち上がる複合口縁式のもので、胴部の張りが強く丸味を持ち、胴部最大径は口縁部径とはほぼ同様である。底部は丸味を持つもので、平底の痕跡を殆んど残さないものの径7.5cm程の底径を敢て測ることができる。口縁端部に浅い一条の沈線が残り、口縁内外面と体部上肩部分に横撫で調整が施されている。口縁立ち上がりの外表面には凹線かとも思える凹地みが周囲を巡る。頭部は強くくびれ短いが、横撫でによると思われる凹部が認められる。頭部には接合痕が残る。胴体部の内面は、胴下半が撫で整形、最大径を持つ中央部上半には横方向の箝削りが撫で整形の下に認められる。後者は叩目がある鉢形土器で、口縁径39cm前後、高さ20.5cmを測る肩の張る半球形に近い



第17図 横III-9調査グリッド出土遺物実測図-2

大形品である。口縁部は頸部からくびれて外上方向に強く傾いていて、その断面形は丸味のあるコ字形である。口縁内面は左上がりの笠磨きが施され、外面は右上がり叩目を残しているものの成形時の指頭によるおさえ圧痕が明瞭に残っているうえに、その端部は指頭圧痕を各所に残し、撫で等の調整は施されていない。胴体部外面は、左上がりの叩目が底部の笠削りの部分を除いて全面に亘っている。また、胴体部上端の頸部との接点には横撫で調整が叩目の上に施されている。胴体部内面は下部の笠削り痕をかすかに残す部分も一部あるが、全面丁寧に横撫でされている。底部には巻き上げ成形痕を明瞭に認められる。同例の遺物は、田井深山遺跡に鉢形土器、片口形土器が認められ、近畿の土器との関連が強いものとされている。

土器棺の年代は、壺形土器、甕形土器等の形態から玉泊6層、上東才ノ元ピット併行期の古式土師の年代が得られる古墳時代初頭とすることができる。

6. 遺跡の範囲

・大浦浜遺跡 (1)

南北300m、東西約50mの大浦浜浜堤部に立地する縄文時代から中世までの複合遺跡であるが、各々の分布は浜堤全域に亘るものではなくて、各時期ごとに偏在したような遺跡



第18図 横石島第3調査区の遺跡の範囲

の変遷が考えられる。今回調査によって得られた所見や従前から知られている地点などからして、先述のようにいさかの偏りはあるもののやはり浜堤部全域を遺跡範囲としなければならない。約15,000m²に亘る。

・大浦A遺跡 (2)

櫛石中学校背後の東西になだらかな丘陵地形を示す稜線上平坦地に認められるIH石器包蔵地である。丘陵先端部に稠密な分布が確認された。遺跡の面積は約1,500m²を測る。

・大浦B地区 (3)

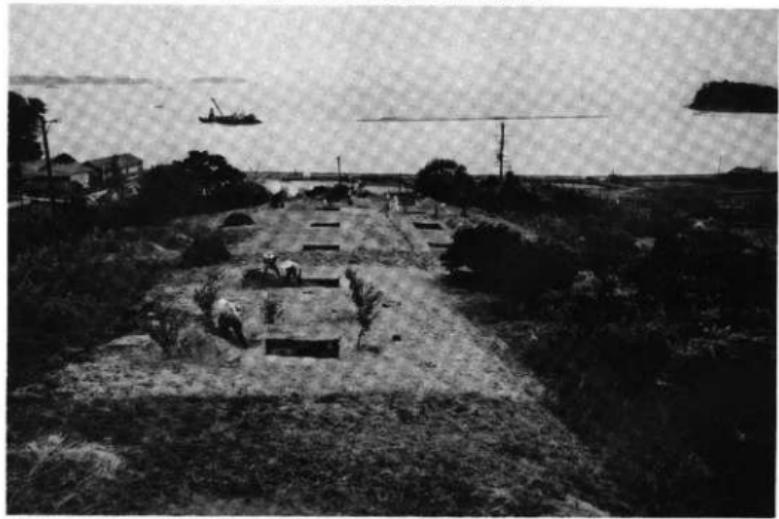
大浦浜から西岸櫛石海水浴場への岬にあたる尾根上に確認されたIH石器包蔵地である。尾根は平坦に耕やされているが東西約25m、南北約1,000mの範囲に遺跡の散布が認められる。

・その他 (4)

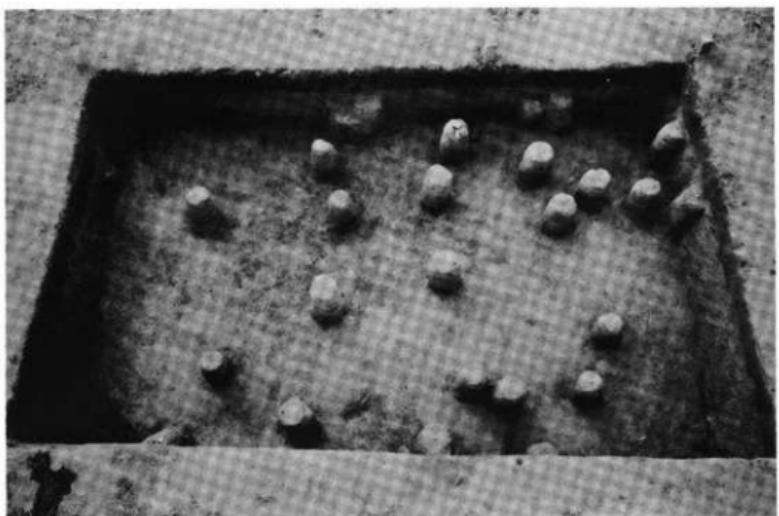
大浦浜浜堤背後の後背湿地は表土下30cm程に地下水頭を持つ低湿地であるが、下層部分には縄文式土器の細片が認められ注意を引く。



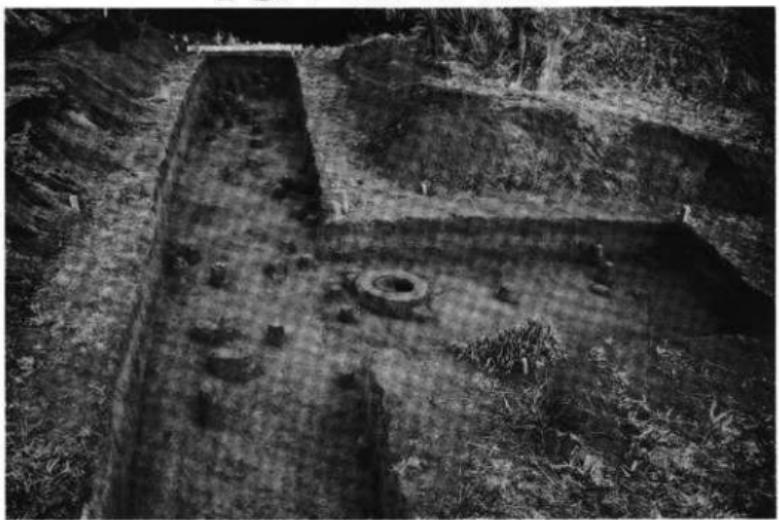
(1) 檜石島第3調査地区全景(大浦浜)



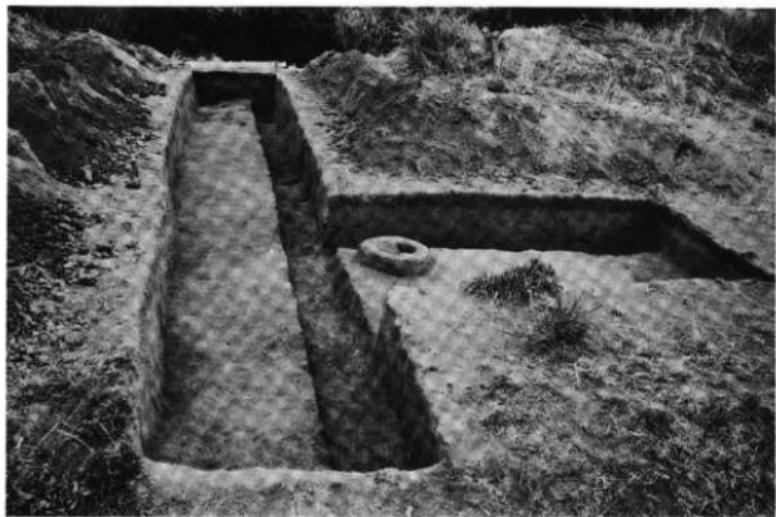
(2) 檜Ⅲ-1調査区全景



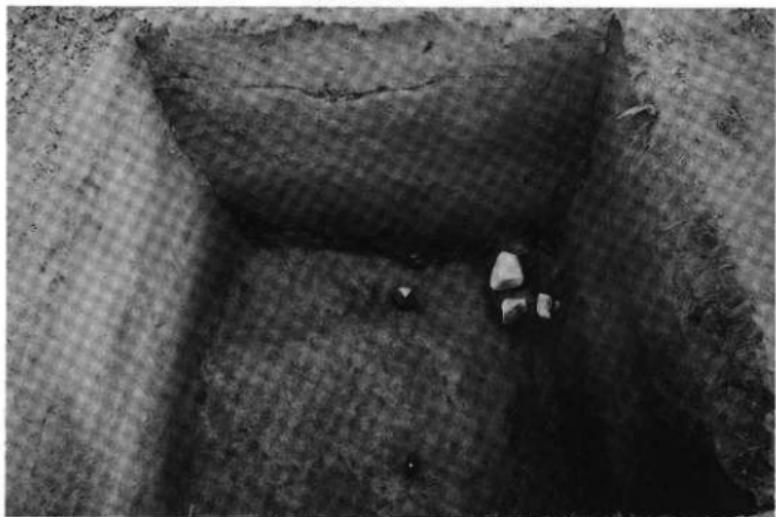
(1) 横III-1-K調査グリッド(西から)



(2) 横III-2-C, E, F調査グリッド-1(西から)



(1) 横III-2-C,E,F調査グリッド-2(西から)



(2) 横III-5-B調査グリッド(西から)